何かする。其も、芋蟲や、蜥蜴は然もあるべきですが、現に蟬を嫌ふものがある。食物の好嫌も味には寄りません。タンスチウは、恁くいふ拙者もあやまります。日の丘やこがれて熱き牛の舌ね、心持が惡いではありませんか。」

守山は衝と身を起して、赤い鼻緒の上草履で、つか〳〵と寄つて、

「藤岡！　握手。」と言つて左の手を。藤岡も微笑みながら、右の手を上下に三ツ振つた。

「呀！　羨望、羨望、僕も一つ。」柏崎は、忙しく卓子の眞中へ、掌を縱に、額に當て、衝と藤岡に差向けた。

此方は故とらしく頭を掉つて、

「意氣相投じなければ不可ません。」

三

柏崎は一寸四邊を見て、

「藤岡、外に客も居る、何か君に嫌はれたやうで、甚だ見つとも好くない。お手輕な處で、是非頼む。」

「否、成りません、お手輕などとは益々以て怪しからん。」

「畜生め、賣ッ妓の氣で振りやあがる。癪に障るが、外聞が惡いからよ。」

「北溟の魚大悄氣の體さ。」と守山は座に歸つた。

「覺えてろ〳〵、猶以て甚だ、之は、是非、これさ、何の事たい。」

中腰で、卓子に蔽はれかゝつたまゝ、大にまごつく。

記者傍より、

「何ぞ、意氣相投ずることにしたら可いでせう。好きとか、嫌ひとか言ふもので。こんな又手取り疾い投じやうはありません、一寸御相談をなさい。」

「だから迂遠だと言はれるのだよ、疾くやれ、嶌口、」と子爵も興がつて口を添へた。

「婦人々々、さあ江戸ッ兒は氣が疾い、これなら申分はあるまい、怪我にも嫌ひだと吐して見ろ、何うだ、美人は。」と言つたが、何か氣が差したか、立直つて、柏崎が振返る、背後の方に紅の窓かけの、一際電燈に照り添ふ處、大輪の菊の花瓶を中に、相對して、人品の好き老人、孫か、末の女かと見ゆる、年紀十七八の女の、高島田に、フラシテンの濃いお納戸の肩掛をした、姿見よげに、打上つて品の可い、氣高いのと二人居て、睦じげに、且つ樂しげに支度をするがあつたために、フッと口を噤んだが、まじくなひに大硝子杯の飲さしを倒に傾けて、

「ボオイ、大を五個、待て、天下分目になつた、さあ、芋蟲！」と調子高。

聞えたか、別なる卓子に一人、件の令嬢と背中合せに飲んで居た、陸軍の中尉が、思はず振向く滿面に笑を湛へて居る。

トタンに三人づれで急ぎ足に入つて來た商人風のが、次の室へ入り際、小耳に挾んで、一寸立停つたのである。

折から硝子杯を持出した、小使も又以前から樣子を心得たと見えて、くすり〳〵。

柏崎は又一盞大呷りに呷つて、

「さあ、一大事、芋蟲は何うだい、よう、藤岡、芋蟲で一つ折合へよ、後生だからよ。」

藤岡は泰然として敢て動ぜず。

「强ひつけたつて、不可ません、先方が、ヤケに嫌ひなものでなくつちや駄目でせう。」

「蝮は何うだ。」

「否。」

「忌々しく持たせやあがる。」

「何、私は決して己を欺きません、蝮は好ぢやありませんが、何うも守山君の牛と接吻位には參りませんから。」と落着く。

愈々急き込み、

「うはゞみか、些と滑稽だな。虻か、いけない。蚤か、いけない。蚊か、えゝ、ぼうふら。」

「變化極りなし、うはゞみから、子々になつた。」

「天上すると、龍に化けるよ、」と子爵も口が惡い。

「柏崎、北溟の魚にしないか。」

「無念骨髓に徹するが、先刻何とやらして何とかが好嫌ひが何うとか言つたな。待て、むゝ、蜥蜴々々！　蜥蜴で負けてくれ、あゝ、草臥れた。」

とどつかり腰を掛けて、

「それとも守宮かい。」

藤岡は未だ頷かないのに、却つて守山が腕をさしのべ、

「柏崎、怨は怨だが道は道だ。公明正大、僕は其の守宮で一つ握手をしよう、聞いても身震がする。」

「謝す！」といつて大呼吸をついた。今は早や敵をも賴むばかりと成つたか、手を緊めながら、慨然として、

「廂合ぢやあるまいし、守宮の道もないものだ。」

一同は哄と笑つた。

子爵はしなやかに手を伸べて、
「私は其の蝮で行かう。」
記者が引續き、
「お次手に蚊を握り殺さう。」

四

餘念なげに、恁く睦み合ふ四人を見て、嬉しさうに、然りながら、敢て同意の色を表はさない、藤岡の秀でた眉宇の間を、稍落着いて、柏崎は瞳を定めて、何等か其の意に投ずべきものを認めんとしたのである。
「しかし人事ぢやありません、恁う四人とも折合つたものを、藤岡を口説き落せないのは、餘り手が無い。」と記者は眞面目に謂ひ出した。
「だから、北溟の魚が可いな。」
「控へろ。」といひながら、じつと藤岡を瞶めた目に、笑を湛へたが、見る〳〵破顔して、又彼の膝に手を置いて、斜に構へ、
「そんなら、藤岡、今日の婿君は何うだ。」

「何、今日の婿。」
「佐賀のお照さんの良人だ。卽ち我々が此處に來て、午後九時半の興津行の汽車で、今しがたその新婚旅行を送つた人物よ。」
藤岡は少時默つたが、
「多田道雄か。」
「氣障な奴だ。」
と答ふる端に、決然として、
「可し。」
「妙だ、是非占めよう。」と記者と一所に手を占めた。
「むゝ、衣服の改良を唱へて、我が國の女子に朝鮮の官妓見たやうなものを着せようとする奴だ。此方からも出掛けよう。」と故々立つて、歩み寄つて、守山も手を取つた。
「小紋縮緬の衣服を着て、朴の木齒の日和下駄を穿いてる男さ。勿論行かう。」と子爵も同一意である。
さて皆顏を見合せた。
柏崎は膝を叩き、

「失戀々々、これがために守山は田舍へ引込まうと言ふし、子爵はラセラスを極めようと言ふ、これは又臺灣へ行かうと言ふか、藤岡なんざ、南亞米利加へ探險に行かうと言つた。いや、はや！」と大欠伸をする。

「お言葉の中ですが、尊公は、」と記者が、膝をつゝいた。

「僕は何、淺間山の神主に成らうと思つた。」

「いや、暢氣なもんです。」

又哄と笑ふ。

「然し、一人として當つて見たものはあるまい。何、柏崎だつて、子爵だつて、憚りながら、此處にある者さ、忍びの緒を切つて出れば可かつたに、いづれも澄すから豎子が手にしてやられた。外聞の惡い。失戀などと言ふな。口說けば必ず用ゐられたさ。」

「何しに以て然るべき。」と柏崎は腕を組んで、

「遠くこれを意中の人に求めんより、近く隣席の御老體に聞いて見ろ。あれなる令孃を嫁したまふやうなものは一人も居ない。」と先刻は、口にするのも憚つたが、硝子杯の數を重ねたれば、氣焰萬丈。

「たゞし、諸君、其の良人を、あしざまに言つて、德義に對して恥んでも宜いか。」と藤岡はフト

溜息を吐いた。

柏崎は言下に、

「宜しい、敢て構はん。」

「いや、藤岡の意味は、然うでない。兎も角も其の良人たる多田を罵つて、彼の人に對して濟なくはないかと言ふんだ。」

「勿論、今ぢや、其の幸福を祈るばかりさ。」

と一人がいつた。

「亭主は亭主、美人のためには心から其の結婚を祝するんだ。可からう、お照さんは實に祝すべし、だが、亭主は馬鹿だと言ふ事よ。」

「尤も蜥蜴、守宮のはじめから、ものの道理上から立つた議論ではないのです。」と柏崎は沈着に。

「理非明白。」

「ぢやあ、奴を占めたかはりに、好惡の感情の、今までは惡の方だつた其の反對に、今度は好い方を行つて、眞心を捧げて佳人の健康を祝し、且つ其の幸福を占めようではないか。」と柏崎がづかと立つ。

「贊成。」の聲、口々也。

「お待ちなさい、しかし同一握手の手段を以て爲ては、此際些と情を表するに足りないやうです。」と藤岡が言つた。

「諸君、祝杯を上げませう。」と其美しき頭髪、やゝ亂れて、紅顏の公子も陶然たる風情である。

「ぢやあ、杯を改めて、」

「滿々と五個の硝子杯を。」と守山が手を鳴した。

やがて、水晶に雪を削つて、橙黃色の眞心を湛へたのが、手に、手に、手に、丁、丁、丁、丁、丁と合つて、颯とばかり、姿正しく滿を引いた。餘の事の見事さに、事の半ばより傍目も觸らず五人に見惚れて獨笑みした、隣席なる老人の、思はずハタと手を鳴すに連れて、獨酌の士官も又拍手。

波がしら

一

「おかみさん、今晩は、今晩は、」

と鬼川べりの霙の夕暮、侍町の長い土塀の角なる、小さな荒物屋を、腰障子の外から呼ぶ、三は袖口まで窘めた凍瘡の手に、悄乎と番傘の濡れしよびれたのを傾けながら、暗い軒下に彳んで、聲をかくる内も寒さに顫へて、小刻に足駄の齒をかち〳〵〳〵、

「遣切れない〳〵、おゝ、」と又一ッ體をゆすつて、

「一寸、一寸、おかみさん、今晩は、」

時に升形の戸をかつちり、たばね髪、そゝけ鬢の四十餘の古女房、店で呼ばれても不性を極めて、急には炬燵から出なかつた。尻の重い癖に、女中の顏を透かして見ると、口は輕く、

「よう、浮氣者。」

「馬鹿におしな、何時だと思つてるよ、未だ灯も點けないぢやないかね。」

「然れば、人間御飯をさへ戴かないで濟むものなら、友白髪まで炬燵から離れたくはないよ、餘

り寒いからね、一ッ切煖つて居た處さ、これから、又蕪ぢよき〳〵だ、寒いねえ。」

「本當に寒いッたらないね、何うしようかと思ふ。」

「而してお前さん何處へ行く。」

「何ね、」

といつて三は袂をかさこそ、

「提灯に灯を一つ借りようと思つて。あゝ、お湯へお迎さ、奥樣が行らしつた。」

「おともぢやないの。」

「否大のお身輕で氣取らない方ですから、湯へ行らつしやるのに、おともが附くやうなんぢやありません。迎にも及ばないとおつしやるんだけれど、此の土塀の間が長いのに、寂しいッたらないんだもの、使はれて居るものの志です。」

「忠臣々々、然うしておあげなさい、惡くは報はない。」

「何も德を取らうといふ譯ぢやあないんだけれど、あの通りの御容色好しだから、途中でまた間違でもあるとならないからね。」

女房は件の升形の戸に、指の尖だけ掴つたのが見える、煤けた顏で打頷き、

「暫くの間だけれども、此處んところが恐しく難所だよ。お前さん處の奥樣が、あの御樣子で、

湯上りか何かで、お前、人通のない處をお歩行でさ、惡く生醉にでもおつかまんなすつて御覽、金時計をぶら提げて、掏摸にぶッつかるやうなものさ、危險至極さ。それに甚麼にお心懸が高等でも、一度褄をお取んなすつた弱身だよ、からかはうといふ奴に出つくはしちや、先方が氣が強いから恐しいやね、其處は馬の骨にでもアイお一杯で、悲しいことにひけ目がおあんなさるといふものさ。でもまあ、旦那樣が軍人で被在しやるから、其の御威光が、あるにやあるといふもんだ。」

「其ね、旦那樣は御留守なの。」

「お留守だつて。」

「つい此間御役所の御用で、名古屋の方へ御出張なすつたんです。」

「然う、そんなら此のまあ寒いのに、尻つ切炬燵へ入つて樂寢をなすつて被在つしやりや可いものを、其處は矢張それ者だね。」

と女房は染々いつて、憮然たるものあるが如し。

三は傾けて居た番傘をうしろ廻にして、軒を漏る雫を厭ひながら尙ほ窓口に差寄つて、

「大違ひ、唯そればかりぢやあ、飛んだおめかしのやうに聞えるが、榮燿の餅の皮とやらで、此の降るのに、それも三日入らない人ぢやあなし、びしよ〳〵湯に行くには當らないつた勘定になるけれども、其處がね、本當においとしい處なの。」

「ふう。」

「先に勤をなすつておいでの時分、何うにかして堅氣になつたら、演劇だの、遊山だの、いや奥樣、御新造と、奉られて見たいのと、そんな望は些ともない。唯こんな晩にやあ、櫛卷にしてざんぶり一風呂入つて、一人で八疊敷の眞中へ寢て見たかつたんですとさ。」

二

「ふむ。」といつて女房は、大きに思ふ所あるらしかつたが、はたと合點し、

「客商賣は骨が折れるね。何うして〳〵並大抵、傍で見るやうなものぢやあないんだよ。――こんな晩にやあ湯に入つて、八疊敷で一人寢て見たい――なるほど奥樣は苦勞をなすつた。あゝ又御奉公をなさる、お前さんも御苦勞なり、荒物屋に添つて居る、媽々殿も御苦勞なり。」

「其處らもくらうなりましたわ、ほゝゝほゝ。」

「大きにさ、」

三は急に又慌しく、足駄の齒を土間に鳴して、

「笑ひごッちやあない、おゝ、寒い。」

と袖口に絡めながら鎖を引出したぶら提灯、かじかんだ不精から氣味の惡いもののやうに、端を撮んで提げて見せ、

「疾く點けて下さいな。」

「一寸まあ、此方へお入り。」と窓から顏を引込ませて、腰障子をかたりと開けると、吹入る風に染込む冷氣。

二人とも胴顫して、

「おゝ！」

「耐らない、此のさき二町ばかりは、田圃から吹曝でお察し申すよ。」

三は傘を土間にばさりと置いて、夜目には鮮かな霙の中の一筋路を、鬼川の流るゝ瀨の行く方にずつと見遣り、

「若いもんです、寒さの方はそんなに驚きはしないけれど、此の長土塀には獺が出るつて謂ふからね、驚いちまふ。つい二日ばかり前にも、内へ來る定どんが驚かされたつていふんですよ。否、眞個ですとさ、小僧に化けるつていふぢやありませんか。」と傘を一つくるりと廻して腰障子を屈んで覗く。

と、ちよろ〳〵と附木が燃えて、ひらめいて二ツに分れ、眞暗な中へ提灯が一ツ出る、中仕切

の障子が寒さうに顯れて、やがて板の間の黑い上、五寸ばかりの處をふらりと來る、女房の姿は茫然して、鎖を下げた掌が窪んで眞赤。

片手をだらりと提灯の上へ陰に提げて、咽を長くすると、目を白くした。

「三や——」

「あれ。」

「怨めしい。ふん、馬丁に情人がある癖に、何だ、然う怯氣々々して人魂と間違へちや可けないよ。」と渡す。

「いけふざけた、串戲だつて、おゝ厭だ、本當ですよ。未だ暮れ切つたといふんぢやあないから、湯屋で點けて歸らうと思つた、其さへ此方や我慢が出來ないで寄つたんだものを、」と大眞面目。

「おや、感心に獺が恐い？　あゝ、悴があらば嫁にする。」

「人、可い氣だねえ。」

「何、小僧にも幽靈にも化りはしない、奥樣になるから氣をつけておいで。」

「唯、其の氣で參じませう。」と苦笑、提灯の鎖を乳のあたりへぶら〳〵と釣つて持ち、足駄を引ずるやうにして軒を出しな、引かけた番傘が、逆にかへつて、柄が耳より上になり、三は胸を反して、はツと支へる機、川邊の方へ弓形によろけて、くるりと行手に背を向け、後退をする形で

二足三足。

「おゝ、風立つた。」と高調子、女房が聲をかけたのにも、三は向風に呼吸を飲んで、むうとも言はず、旋てギックリ、差す方に向直つて、傘を眞圓に備へて、一文字。

一陣颯と荒れた迄、又降しきるばかりなり。

未だ暮れも果てないのに、荒物屋は腰障子を下すばかり、之れに限らず、閉籠勝の越路の冬、最も場末の侍町、長土塀二町ばかりの間は、獺のたはれ男の浮名に立つて、宵月の夏さへ人通は稀である。

況して、霜月の半頃から夜半に一しきり、黄昏に一しきり、片割月に、入日影に、漆のやうな雲がかゝると、塀の中で狐が鳴く。

三

其の雲が時雨れ〳〵て、終日夜すがら降續くこと二日三日、山蔭に小さな青い月の影を見る曉方、ばら〳〵と初霰、さて世が變つたやうに晴上つて、晝になると、寒さが身に染みて、市中五萬軒、後馳の分も、やゝ冬構なし果つる。

旋てとことはの闇となり、雲は墨の上へ漆を重ね、月も星も包み果てて、時々風が荒立つても

其の一片の動くとも見えず。

恁て天に雪催が調ふと、矢玉の音絶ゆる時なく、丑、寅、辰、巳、刻々に修羅礫を打掛けて、霰霰、又玉霰。

其のけたゝましさ、凄じさも、北海を搖ぶる風の、海鳴のおどろ〳〵しいのと一所に、耳につい て、板屋打つ音にも、窓を破る響にも、敢て耳を傾けず、目を欹てぬ頃を期して、正午の寒威良緩むと思ふと、例年の如く哄と雨、凡そ半時ばかりの間に、五度六度といふもの、恰も盆を傾くるが如き大雨になつて、頃刻止んだ、と思ふと、此日も晩方から、霙交りになつたのであつた。

越の冬に恁ばかりのものはあるまい。霜はよし、霰はよし、雪はよし、凍さへ防ぐに楯がある。霙は凡そ世にあらゆる寒さ、冷たさの、水に會へば流に交り、火に會へば雫となり、風に會へば、白筋を立てて、さツと樹立に注ぎ、飜つて雪となるのである。

或はぴしや〳〵と石を嘗め、或は畦土の大根の葉に形を留め、瀨を早め行く泡に化し、袖に觸るれば絲をなやして、恰も飴の纏ふやう、拂へども落ちず、打てども響かず、絞れども敢て雫を切らぬ。

然れば傘には柄もりして、つる〳〵辷るのを、忘れるばかり確乎と取つて、三は川べりの霙の暗路。長土塀の半ばを辿る。

左手は鬼川を隔てて、遙に目貫の町の、裏手に並ぶ藏を望むまで、三十年來殖産工業の道の開けざる市は衰へて、次第に畠となつた一面の大根畑の中に、非人小屋が二つ三つ見ゆるのみ、犬も吠えず、川は唯幅五間に過ぎないのであるけれども、晝頃の大雨に濁流渦を卷いて溢るゝばかり、中流波を蜿らし、土塀際の細道は處々弓形に切れ込んで、靜にゆつたりとして寄せつ返しつするのが、沈んだ色で光るやうに、目を遮つて、今にも脛を浸すかと、三は足許も定かならず、傍に狐が棲むといふ塀の内の屋敷跡は、陰々滅々として霧が落着くのも手に取るやう、彼は人一人に出逢はなかつた。勿論今朝から片手で數へる位は通つたものの、北よりも、南よりも、行逢つたのはなかつたのである。

「おや。」

「……」

「三かい。あゝ、然うだつた。」

「奥様！」と一生懸命、聲に縋つて、眞俯向に前途を急いだ、顏とともに提灯を上げると、崩れた土塀に茫乎と女の影。

「奥様。」と些と甲走つて、提灯を環形に一振、振返るとすれ違つて、主は背後に立つて居た。爪皮の淺いのに、甲のふツくりした素足、絲織の半纏、繻子の帶、小袖にも繻子の襟、眞黑な艶に

映つて、項から頰の色の白さ。透通るやうな耳許へ、斜に黄楊の鬢櫛、是が望といつた束ね髪で、提灯のあかりに湯上りの目許ほんのりと、蛇の目の傘の中で、振向いて身を捻つて、

「だらうと思つたよ、御苦勞ね、寒いのに。」

「奥様々々、私はあの。」と、呼吸を切つて未だせい〳〵、横幅の廣いのが、すらりとした立姿と、傘の、黑と鼠を組交ぜに、ざ、ざ、ざ、ざ、ざ、ざと霙れる中で、擦寄つて身を搖り、

「もう〳〵もう、お念佛三昧でございました。」

四

「然う、私も此の提灯が便だつたよ。」と爽かに言つたが、三の傘から雫して、ヒヤリとかゝつた足の甲を、踵の見ゆるまで、うしろざまに擡げて蹴出しの裾の夜目にも媚かしいのを搦めながら、左の足の小うらにあてて、拭つて足駄を穿直して、其まゝ。

「急いで歸らうね。」

「あれ、奥様、お提灯はさきへ參りますものでございます。」

「長い丁場に灯は唯た一ツ切だねえ、もうね、お湯を出ると酒屋の前あたりから眞直に是が見えたよ。」と丁と蛇の目を振りかたげ、舊來た方を振向いて一寸イむ。

「あなた。」
「あい。」
「こんな晩に背後を振向いて御覽なさるものぢやございませんよ。」
「何故え。」
「魔がさすものだと申します。」
「然うかい、三が嘘ばつかり。」
「否、眞個でございますよ、唯最うまツとう向うを、一心に念じて、目を瞑つて歩行く心持で居さいすれば、何事もないさうでございます。」
「厭だよ、そんなにして歩行いて川へなんぞ落こちちやあ。あら大變に水が出たこと、御覽、海のやうぢやないか、路が傾いで溢れて來さうだよ、ずつと此方へ寄つてお歩きよ。」
と横に身を開いて土塀の際。
「奥様、狐が居りますよ、あなた。」
「こん〳〵様、お稲荷様ぢやないか。」
と石垣に裳を觸れさうに、すく〳〵すく〳〵と見え隱れに影を描いて通つたが、一際明るく、濡土の壁の崩に、其の姿の映つた時、偶然目に留るものがあつた。

「まあ、大きな相合傘を描いたこと、一寸お待ち、お前一寸其の灯をお見せな。」
「何うなさいますのでございます。」
「誰も居ないから見てやらう、いろ〳〵〳〵なんだよ。」
「お止し遊ばせ、あなたお湯醒で風邪を引きますよ。」と止むことを得ず立停つたが、大きに縮む。
「然う〳〵、私はぽか〳〵するのに、冷いのがひや〳〵して、此頃にない體中のあかが抜けたやうで、すつきりして、他愛なく可い心持だけれども、お前は寒からう、行きがけにやあ私も骨が硬ばるかと思つたもの。可いやね、堪忍おし、見かけて見ないと今夜魔される、一寸お手數。其のかはり内へ歸るとお前を炬燵に煖らして、掻卷を着せて煖めて遣つてさ、私が衣服を脱いで板の間に坐つて顫へてあげるから。」
何んなに心地が清々しいか、何事も思はぬ狀で、二十四と云ふ人が、道草の惡足掻。
「何の他愛のないことをおつしやるやら。」と餘のことに三も笑ひながら、ずつと寄つて、土塀に提灯をさしつけた、影は消えて、前後十町人なき處、灯を包んだ後姿、はつきりと二ツ立つたり。
「何、おせき。」と讀みかけて、ためて見て、差覗き、
「丁寧に釘か何かで刻んで描いたよ、おせきが、厭だ、同一名だよ。」

「あら、彼處はそれぢやあ、旦那樣のお名前でございますか。」
「串戲をお言ひな、小兒同志のいたづらだよ。」といひ消したが、ものずきは猶止まず、同一名の相合傘、男の名をと見ようとすると、僅の間も降りしきつて、面に、霙がさら〳〵、お關はもどかしさうに、手に持つた白地の濡手拭をひらりとほぐしてひら〳〵と、土塀に對して雫を拂つた。
「おゝ、三枝。」
三枝と一聲高く讀んで、銀杏齒の足駄をざツくと一足、あとへ退つて、じつと瞳を定めたのである。

五

「もう可いのでございますか。」と呼んで見ても返事がなし。お關は黑目勝な目をぱつちりと、傍目も觸らず、土塀を瞶めて彳んだが、忘れたやうに提げて居た手拭の端を引上げ、傘の柄を片頰にあて、差俯向いて、一寸背向、漬に濡れたる目を拭ひ、
「何のこつた、詰らないものを、おゝ寒くなつた。」と肩のあたりのぞく〳〵する狀、するりと繻子の襟を引合せる、又一時哄と風。

川波の逆立つばかり、北から南に吹荒ぶと、土に溜つた水も蜿つて、裳も袖も斜にはら〳〵、びしやりと傘を向う狀にすぼめると、袖口を卷きあげて、腕白く、兩手に確乎と柄を掴んで、
「しどいよ。」といふと又一ゆれ、半纏の背は波をはらんで、髢を殺ぐやうに黑髮も颯と靡く。
三の體は一ツ廻つて、番傘は一間引裂かれた、提灯は一ひしぎ、重石でひしやがれたやうに礎と消える。
「ほう。」といつて立竦む、三の袂を横合から無手と捕へて、びたりと附着いた、濡鼠の一寸法師。
「むゝ。」といひざま腰に縋つた毬栗天窓の猿眼、きよろりとするのを一目見るや、ぎやツとも言はず、其の取着かれた腰を拔かして、水ツ溜へ貫目のある肥つた臀をどつさり尻餅。
途端に小男は黑犬が立つたやうに、ひよこ〳〵と飛離れたが、突然、なよ〳〵と風に堪へたるお關の腰に縋着いた。
と殆ど同時に、起きも上らず、肩を搖つて、腹に大波を打たせて、難產といふ體で居た三は、ぬツくと突立つて、
「河童だッ」と喚くと齊しく、彈丸が外れたやうに、湯屋の方へ霙を亂して一目散。
お關も取着かれた體は鳩尾のあたりから消えて失せさうな、冷いものに引抱かれて、舌を釣つて呼吸を引いたが、わな〳〵と顫へながら、

「あゝれさ、何をおしだねえ。」と見る間に細りと痩せて、身を竦めた。
「叔母さん、寒いよう。」
「まあ。」
「寒いやあ、寒いやあ。」と顫へ〳〵我を忘れて泣いて居るは、お關が乳の邊までよりない脊たけの、九ツばかりの男の兒、あはれ小雀の霜に凍てた、いたいけな手の赤らんだので、覺えのないまで、半纏の褄を引掴み、腋あけの下の肌のぬくみに、ひつたり顏を押當てた。
筒袖の布子一枚、襤褸の見える襯衣を着たが、尻端折で、跣足、笠も持たず、唯取着かれたばかりでもお關が小袖二枚を透して膚まで通りさうにづぶ濡である。
と先づ見て落着く端に、心優しい婦人なれば、怪しかる者を振りも放さず、傘前に差傾け、手拭を持つた手を、上から背に載せてそッと叩いて、
「兄さん、何うしたよ。」
「寒くつて歸られねえや、叔母さん連れてつておくんな。」
「家は何處。」
「彼處！　彼處！」と言つて掴まつたまゝ、小僧は身悶して、
「荒物屋の角から曲ッて、ずつと行くんだ、ずつと行くと穴水田圃の入口だ。」

お關は然も親身に頷き、
「あゝ可うござんすとも、連れて行つて上げませう、何て家なの。」
「三枝。」
「え。」
「三枝だよ。」
「三枝です！」
小僧の背を抱いた手に、確乎と力が入つた、少し屈むやうにして、
「名は。」
「菊次だ。」
「而して、而して。」とお關は息をはずませながら、
「何は、お父さんのお名、ぢやあない、あゝ、お父さんはない、ぢやあ兄さんの名は。」
「蒟藏てんだ。」

六

お關は四邊を眴した、今の一荒で持つて來たか、降るものの白さが增した。土塀にざら〳〵と

當る音。
「さあ、何しろまあ、此方へ附着いておくれ、生憎肩掛も何も着て來ない、お前さん傘は何うしたのさ。」
「川へ流れつちやつたの。」
「あらしに取られたんだね。」
「あゝ。」
「お前、まあ何より跣足で冷たからう。可哀さうに、お待ちよ、今此の足駄を脱いで上げるから。」
と、ずいと引上げる下前の勝色裏。
「入らねえ、そんなものあ入らねえ、轉んじまあ、駄目なこつた、跣足は馴れてら、足は冷たかないんだよ。」
「然うかい、可いかい、叔母さんは大人だから大丈夫だものを。」
「寒くつて爲様がねえ。」
「何しろ、困つたね、成たけ、さあ恁うやつて、袂をかけて、」
菊次はお關の半纏の中へすつぽりと左右から襟を合せて、顔だけ顯して、目をくるくるとやつ

て呼吸を吐いた。
「歩行けるか知ら、」
「最う歩行けら。歩行くな譯や無えや、叔母さん又あんな風が吹いたら確乎つかまらしてくんねえ。私、川の中へ捲込まれさうだつたから、つかまつたんだ、頼むぜ。」
「あいよ、大丈夫だよ、私が死ねばつたつて、お前に怪我はさせないよ、安心おし。」
「あゝ、酷かつた、酒も何も打ちまけッちやつた、ビールの瓶も形なしだ。」
「お酒を買つて來たの、水溜だ、氣をおつけ。」
「うむ。」
「此のさきの酒屋で、然う、おやあ叔母さんも今湯から歸つて來たんだよ、同一路だから彼處で逢ひさうなものだつたねえ。」
「先刻叔母さん湯へ行つた時、私も行つたの、それから魚市へ行つて、鹽鰤を一ッ片買つた、其も獺に捕られッちやつた、何にもねえや。」
「飛んだことをおしだねえ、何なの、菊さん、あの兄さんがお酒を飲むの。」
「あゝ、飲むけれど買へねえんだ、今日は鞴様のお祭だから、お神酒に些とばかし買ひに行つた、酒屋の番頭め、出ないよッて言やがつた、それから癪に障つて喧嘩をした、えゝ！　やッつけた

い。それだから歸る時又叔母さんと一所になつたの、びちよ〳〵歩行いて來たけれど、暗いから解らなかつたんだぜ、え、叔母さん。」

とぶら下るやうにして、圓い顏を仰向けて言ふのを、じつと見ながら、お關は染々。

「そんなら早くから一所にくれば可かつたもの、何故、そツと歩行いてました。」と情餘つて窘めるが如くに言ふ。

「だつて、可けねえや、私、汚えから、叔母さん厭がるだらうと思つたの、」

「えゝ！　まあ、お前。」と言切に、お關は少し涙ぐみ、思はず歩を留めたが、

「一寸誰がそんな智慧をつけました、兄さん、」

「否。」

「そんなら可いけれどね、お前、そんな氣を出すものぢやあないよ、困つた時だの、切ないことのある時には、屹度人に相談をするものだよ。ね、兄さんにも然うお言ひ。自分おやあ何も知らないけれど、姉さんはもう本當の姉さんのやうに思ふよ。今ね、路でね、私の家を教へるからね、欲いものがあつたら、然ういつておいで。お待ちよ、兄さんに言つちやあ惡いよ、そして今夜お酒も鹽鰤とかも失くして了つて、叱られやしないか。」

「何叱りやしないや、夜も抱いて寢てくれるもの、だつて何だなあ、あとで御神酒を頂くツて言

つてたつけ、可哀さうだ、叔母さん、ほんたうに何かくれるんなら、酒え些とばかし買つてやつておくれ、躍らあ。」

「泣かしちや厭。ほんとに兄さん思だよ。」とくびれるばかり小さな手首を確乎と取つたが、

「氷のやうだ。」と内懷へ。

身に染みたか、肩をすぼめ、蛇の目を斜に翳して、

「あの、菊さんは未だ、女房さんは持つまいねえ。」

七

「酒も、然うか、鹽鰤も、むう、然うか、可いや、仕方がねえ。俺もそんなこツたらうと思つたい、未だまあ、手前が怪我をしなかつたが目ツけものだ。

何うしてお神酒を備へて、お祭所かい、やい菊、俺つひぞ弱い音を吹いたことはねえが、最う耐らねえ、犬の子一疋だつて話對手はなし、年紀も行かねえ、手前を捕へて愚癡を言つたつてはじまらず、俺あ何も言はねえが、餘のこつた、手前びつしよりで寒からうけれど、まあ、一寸見てくんねえ。」

と細工盤を背後に、鐵床を控へながら、敷居の上へ小洋燈の油煙に燻ぼつた、赤黑い灯を置い

て、薄汚れたどんつくに細帶を前でしめ、首筋の綻びたちやん〳〵を着て、窶れ果てた壯佼、腕組をして悄然と瞶める背後から、弟の菊次は毬栗頭の、霎の、雫も未だ乾かぬ、霜げて赤らんだ圓顏を出して差覗く。

敷居を三寸餘すまで、充滿の水、疊一疊敷ばかりの土間を、だぶ〳〵と浸して居る。

「何うだ菊、まさかと思つたが、過日からの雨で到頭これだ、障子の外は田圃一面宛然湖よ。」と深い溜息。

土間を仕切つた、小窓の雨戸は、疾く嵐に取られて、露出しの破障子二枚、下が羽目になつて、外は空地の一軒家。特に此の裏口は、田圃續で一段地盤が低いために、彼の鬼川を田に引いた用水の、直ぐ間近なのが溢れたのである。

「先刻な、手前を使に出した後で、見ねえ如彼やつて、鞴の神樣をかけてよ。」

土間の片隅に鞴を置いて、こゝに爐を切り、下ならしの細工場にした、正面の壁には、一幅の畫像の、古色燦爛たる中に、白衣を纏ひ、黑髮長く、金、銀、紺朱の瓔珞をかけて、波の上に彳み給ふ、御手に一挺の鐵槌を取つた、端麗、微妙の御姿、髣髴として見え給ふ。

其の描いた波と、溢れ浸した水との間に、古びたが一脚の白木の臺。

「お前が歸つたら御神酒を供へよう、それまでに一ツ仕事の口をつけて置かうと、酷工面の彼の

銅板を焠すによ、なけなしの炭火を起して、幾月にもない赫と威勢よく遣つたと思へ！　根太の朽ちた處から壁を潛つてちよろ〳〵と山形に舌を出さあ、引いたり、出たりしてる內に、段々幅が廣くなつて、はじめは拳で引拂つたのが、いや藁だの、繩だの、洗ひざらひ持出したが、役に立たねえ。敷いて居た、莫蓙までぶく〳〵と浮き上らあ、爐の火は黑い泡を吹くな、見ねえ、」といふ、灰汁色をした水の上に泡立つて、炭はごろ〳〵と浮いて動く。

「然も鞴祭の晩だ。噫、菊、堪忍しねえ、手前にもお下げを頂かして鹽鰤を食はして遣らうと思つたが、其も是も運勢よ、何たる見限られたこツた喃、菊藏ともいつてくれるものあねえ。」と弟を背に掴まらせて、盤石に押さるゝやう、力も弛げに垂れて居た、顏を上げて、振向いて、

「今な、蒲團を暖める算段をして遣るから、手前、素裸になつて潛つて先へ寢ねえ、よ、然うづぶ濡ぢやあ體が堪らない、煩ふな、菊、あとで俺が何うともすら……あとで俺は何うともすら、」と思入つた目に涙充滿、餓に迫つても、渴ゑても恁う氣の弱かつた驗はつひにない、菊藏も今は早や支へ兼ねた風情である。

其ともなく因果を含められた菊次は、聲を揚げても泣くべきに、奴、些ともめげたる體なく、

「何だ、泣くなんて何だ、お前、大きい兄さんの癖に見つともないや。あるよ、丁とあるよ、構つてくれる人があるんだぜ。今度酒を買つて遣ら、何だ泣くなんて、弱蟲ぢやあないか、姉さん

が見て笑つてるぜ。」
「何を。」
「泣いちやあ姉さんが笑はあな。」

八

菊藏は不審の面色で、
「姉さんツて何だ。」
「餘所の叔母さんだい、整然と今夜姉さんになつたんだよ。長土塀の所で、この、風に吹き飛ばされさうになつたから摑まつて助けて貰ふとね、可愛がつて、半纏の中へ入れて内まで連れて來てくれたい。
門ん處も水がついてら、膝まであるぜ。兄さんは何處に居るツて聞くから、裏の輔の處だ、細工場に坐つてるツたら、跣足になつて密と溢れてる水ん中を渡つて裏口へ廻つたんだ。言つちやあ不可いツていひつけられたんだけれど、泣いて見つともないや、見て居るんだぜ。」
「えゝ野郎、早く言へ。送つて來て下すつたのか、馬鹿だな、お禮も何にも申しやあしねえ。」
と突然菊藏は片膝立てたが、土間は水。

間近だからすいと立つたまゝ、片手を鴨居に摑まると、天井の煤がばツさり、凄じい鼠の音、其まゝ身體を橋にして向うざまに右手で障子を一枚、紙がめら〳〵と破れて、かツたり引開けると霎は歇んで、戸外は薄月。
「呀！」
つら〳〵とある水の中に、束ね髪の其の姿、ひらりと身を交したが、屹と見て、
「菊さん。」
「お關か。」とばツたり閉めて、どツかと坐した。
「何うするんだ、何うするんだい。」と弟はおろ〳〵聲。
其處を流るゝ用水の出水に連る響に紛れて、人の氣勢もしなかつた、お關は我を憚る身の、頑是ないものに打明けられて、退くにも退かれずはら〳〵とする間に、ひたと菊藏に知られたのである。
障子の外には忍泣、菊藏は色を變へて唇を震はして、暫くはものも言はなかつたが、一聲鋭く、
「お關さん、お前、お前何にも言つちやあ可けねえ、俺も何にも言やしねえ。」
「あいよ。」
「お前、只た一人の目の見えねえ父爺に、苦勞を懸けちやあならねえぞ。」

「……」

「歸んな。」

「あい。」といつて、障子の外に傾いた柱に摑まつて、顫へたが、衝と身を飜して、水を踏亂して、横ざまに、四五間退き、破れ〳〵の羽目の處に、顏を押當ててわッと泣いた。

我を忘れて時も知らず、お關は泣いて泣き盡して、足は水に浸したまゝ、懶げに肩で身を返して、振向けた、頰のあたりも細りと、目じしも殺げた窶れやう。濡れて纏るゝ後毛は、顫ふ手先で振り退けたが、冷え通つたか、鳩尾をキリリと押して、艶麗に眉を顰めて打仰いだ、雲の絶間に細い月、愛宕の頂に冴え渡つて其影の透いて映る、むら消の煙の如きもの、どんよりと、朧に似た大空の此處彼處に湧くが如く動いて見ゆるは、未だ地に落ちぬ雪催。

お關が纖弱い體壓にも傾きさうな三枝の小家は、黑く一つ月下に沈んで、淡く影も映りさう。嵩增した水の溢れたのが、四面を籠めて、遙に長土塀の唯壁一帶を以て周圍を仕切つた邊から、野ともいはず畠ともいはず、一面に黑み渡り、遮るもののある處、こゝかしこ銀の色を蜿らして、渺として一個小湖の景、風も凪ぎ、雨も歇み、夜色沈々として、唯凄じきは二間を措かず、矢を射る用水の響である。

お關は歔欷を白齒で嚙み留め、面の色を正して、判然と天の一方にかゝる愛宕の頂を打望み、

丁と額に手を翳すと、身を縮めて、一心に拜み伏した。

時に小川の浪逆立ち、下流の方より逆に、長さ三丈一條の、白布を蜿らして、忽然として波がしら。

最物凄き月影に、黑頭長身のものこそありけれ、かゝる夜にはまゝある習の、獺にや追はれけむ、二尺ばかりの一尾の鮭。

彼の波がしら縱橫に、巴を描き、渦を卷いて、川立騷ぎ、水亂れて、衝と躍つて、お關が間近を、散を投げて橫截つたが、弓形に飜然と跳ね、ばつと鞴場の障子を脫した、大の魚は、勢餘つて鰭を返すと、鞴の御神の畫像の前なる白木の臺に橫はんぬ。

「あれ。」とばかりに思はず知らず、縋り寄つて取着く敷居。

「菊さん、緣起ですよ、嬉しいねえ。」

「やあ。」と突立つて、菊藏は、大手を廣げたが、牲の動かむともせざるを見て、眉を開いて見返した、氣高いばかりの女の顏。

「お關、喜びねえ。」と高胡坐、手を引込めると懷から片膚をずばと脫ぎ、

「菊、しつかりしろい、まんは直つた。」といひざまに、術で鍛へた腕の冴、鐵槌をぐいと取つて、目よりも高く差上げた。

青切符

「おゝ、酷いこと。」

紫の荒い矢絣の羽織を、絞られたやうに身を捻ぢて、よろ〳〵と二等の戸を入つた娘がある。

「ずつと其方へ、ずつと、」と其の後から聲をかけながら、潛り込んだのは、兄か、許嫁か、いゝ中か。それとも供の者か、五ッばかり年紀上の、二十二三と見えたる青年、鼠の中折の鍔廣なのを、躑躅時の快晴に、却つて、一雨浴びたやう、線の柔な三角形に押頂き、黑紬の紋着を、丈長く着て、袴を穿いた、脊が目立つて高い。

青年が、縱に二側にぎッしりの乘客の中に挾まれて立つた時、扉はハタと鎖されて、娘は對の窓へ、トンと肩をあてて、象牙の柄の極めて長い、蝙蝠傘をついて、

「大變な乘客。」と言つた。

然うすると青年が、伸上つて室內を見廻して、娘に向いて、

「未だ〳〵可い方。あゝ、」

頤を深く、胸につけるまで頷いたが、此の仕切を選定したのは、我が過失でないのを諭して、保護の任を空しうせざる由を告げたのらしい。

娘は滿足、

「然うね、」と輕く、胸を張つて、腰を捻ると、其の窓から横顏を出して車外を覗いた。

ふつさりした輪の大きい銀杏がへしを、煽るが如く、衝と手を開いたのは驛長で。

汽車は品川へ向けて、此の時新宿を發したのである。

「出ます。」

「あゝ、出るわ。」と娘は緋天鵝絨の緒のすがつた、高いぽッくりを二ッばかり床板にコト〳〵と鳴したが、立直つて、

「品川に着くのは何時でせうね。」

「直ですなあ。」

「一寸、それでも私時間が惜くつてよ。高輪の叔母さんの許へも寄らなきやならないし、品川にも行かなきやならないし、」

言ひかけて傾いて、眞面目に、眞面目に青年の顏を、

「あの……」

「はあ？」と尻上り。聞き取れなかつたと思つたさうで、前にかゞんで、耳を差出すやうにした。

言ふまでもないが、此の室內に饒舌つて居るのは二人ばかりでは無かつた。

「私、困るわ。」
「はあ。」
「麻布の伯父さんの許へ寄らなくッちゃ惡かつたわ。」
「可いでせう、構はんでせう。」
「構はなか無いの、あとで怨まれるわ。だつて、たまの日曜なんだもの、さう〳〵は廻り切れなくッてよ。私、困つちまふ、」と殆ど獨言のやうに言つたが、フト默つて、口を、心ほど開けたまま、目をぱつちり。さて、何を見るともなしに、青年の帽子の鍔の緣から、直角に天井の片隅を見据ゑた。乘合は、殊に此の小な室に、無慮五十人以上あつたけれども、時に娘の眼中にあるものは無かつたらう。左右の頰の肉動くばかり、大きな前齒と唇を上下に、何か口ずさむ風采、かさねて乘せた蝙蝠傘の柄の上で、小指を一寸々々と彈いたのは譜を算へたもののやう。

此の擧動の一秒時前、娘が中途で言を消したので、青年は一向要領を得ず。

「……ですよ……はあ。」とばかりで、かゞんだ身を伸してすッくと立つて、屹と腕組をしたが、それでも氣がすまぬと見えて、青い切符の端を嚙んだ、勿論娘の分と二枚也。ト流るゝやうな、森、畑、畦道の馬だの、雄大な煙突だの、草だの堇だのが、ぱッたり、遠目金を外したやうに、赤土の土手にかくれたので、娘は、自然に遠ざかつたやうな顏をして、詩趣ある——此の女に取

つて、——態度を俗了して、また、
「困るわ、何うしませう。」
「……」
「一寸、何うしませう、皆で來い〳〵ッて言ふのだもの、困ッちまふことよ。私一寸、何時に着くでせう。」
「ざッと小一時間ですかな。」
「のろいのね。」とたしなめるやう、細い銀鎖の附いた、銀の小形の女時計を出して、パチンと開け、一ッまはして、うつむいて、じつと見た。頰の肉はこれにも動いた。而して後ざまに、肱を窓に掛けて、蝦茶の袴を長く蹈伸したぽッくりのを、室內に按排したる、彼の吸殼おとしの器に乘せて、胸をぐッと反したが、恁る姿勢の少女は近頃繪畫界にも流行するので。

一目見ると、青年もいそがはしく、帶の間から時計を出して齊しく視めた、些細なことにも二人の意氣は相投ずる。
「二時ねえ。」
「えゝ、五分ばかり進んで居ます。」
「眞個に私、時間が惜しくッてならないことよ。」

「同感ですなあ。」
「ねえ、一寸、」
「はあ、」
「おゝ、暑い。」と娘は急に顔を背向けて、頰へさす眞赤なのを手で遮つたが蔽ひ果さず、向直つても猶まともに照すので、項をおさへて、うつむけになると、埃が白く見ゆるまで黑髪に日があたる。
これにも堪へないかして、思はず振あをむくと、光線が又齒へ染み込むばかりだから、顏をふつて、首をふつて、
「おゝ、暑い。堪らないこと。」としたゝかに眉を顰めた。
青年はあたふたして、二三度及腰に、切符を銜へて、手を出したけれども、身動もならない充滿の乘客に、手は窓の戸に屆きはせぬ。
「お閉めなさい、〳〵。」
「だツて堅くツてよ、堅くツてよ。」と身震ひをしながら、兩袖に觸るばかりの、左右の客を見まはしたけれども、席を讓つて立つものはなかつた。娘の容子は、はじめから、聊かも可憐でなかつたから。

あはれ、うまれつきではない。渠は此の頃の試驗に、一番で及第した所爲である。

やどり木

一

「怪しいのは確に今の其の猫萬、……然やう、渾名です、、姓は何といひますか存じません、萬五とか言ふ鐵道の掃除夫で。けれども從姉を殺したのは、其の者だとは申しません、其は眞個の猫でございませうから。」

紳士は卷莨に火を點じた、寒さに密閉した汽車は夜更けて、三島沼津間。

「最う五年になります。」

「は、然やうでございますか。」と差向ひに夫人一人、其附添と見ゆる女中は、少し下つた椅子に居睡りして、二等の此の一室に乘客は三人のみ。

手練の技師が、函嶺の嶮を出でて、刻下、砥の如き線路を颯と行る、車輪の音は、野中の孤屋、山寺の廚にばかり蟲々と遙に響いて、車中は却つて物靜に。

「矢張こんな寒い晩で、一月の半ばのことです。

御覽の通り、今でも何といふことはありませんが、私が學生の頃で、正月のお小遣が少々出來

ましたもんですから、函嶺から熱海、三島越をして、三島へ出て、それから靜岡へ歸りまして、又東京へ出かけに、久能へまはつて清水港から江尻へ出て、緩り終汽車に乘つたのです。」

紳士は室内を見まはしたが、

「此の邊で日が暮れた筈でした。

新橋へ着く、十時四十五分がいつでもおくれて、彼是十二時近うなる上りですから、それから貴女。大學の近所まで參つて、さきが下宿屋では一寸考へものなんですけれども、はじめから、横濱の其の從姉の處へ寄りますつもり、尤も宅から言づけなどもありましてね。」

夫人、

「貴下も、其の方も、」

「然うです。靜岡です。其處で從姉といふのが、名はお話し申しません、野毛の二丁目に女の一人住居といふので、お恥かしいわけなんだけれども、」

微笑みながら、

「同一靜岡の或豪商に圍はれて居るんです、其の時分。尤も然ういふ境遇なんですから、始終懇意にして、居たのではないので、横濱に居るといふことも、實は歸省して始めて聞いた位。

しばらく上方の方へ往つて居なすッた、あゝ、姉さんが、然う、それはいゝ都合、縱令職人で

も、日傭取でも、女房といはれるに越したことはありません、しかし、兎も角も身が定まつてお芽出たい、丁ど東京へ歸り路、久しぶりで逢つて行きませう。兩親が是非、其の女の母親、叔母さんです、其も斷つてといふし、自分も懐しい人でした。

未だ平沼といふ停車場は出來ない時分で、横濱へ着くと、十時些と廻つて居ます。

豫て、餘り遠くないやうに聞いて居たもんですから、俥も命じず、杉田へ行つた時に、あれから本牧のはなを船に乘らうといふので一度、それから見送る人があつて西京丸へ一度、海岸の方は其でも薄々知つて居ましたけれども、山の手は皆しき不案内。

路を聞きながら、あの川べりを傳つて大概此處等といふ橋を一ツ、停車場の方から渡りました。

暗い晩で、彼處等は片側立、仕舞屋が多いと見えまして、未だ十一時には間があるのに、ぴつたり戸を閉めた門ばかり。中に一軒、山城屋と筆太に書いた看板が、それも最う消えさうになつて、半分だけおもての雨戸をあけた、車の帳場がありましたから其處で番地を聞くと、些と數が多過ぎる、野毛の二丁目は新開で、番地が皆若いのですが、お宅は何といふツて聞くのです。

で姓だけ言ひました。」

二

「一寸、心當はありませんが、何をなすつて在らつしやる。

まさか開ッ放して、實際をいふわけにも參りませず、商賣は知らないが、女世帶の一人住居だといひますとね。

お少いのかねッて、些と調子が上ずつて居ましたつけ、何の氣も付かないで、少いのだよと、申しますと、知らねえ、と打ッ棄つたやうな返事。心付いて極が惡うございました。」

「車夫なぞと申しますものは、人が惡うございますよ。」

紳士は頷き、

「やッかまれようといふ柄でもありませんのに、氣を廻したがるものと見えます。

家は分らず、さあ然うなると何だか氣が咎めて、かけ構ひなしに何家でも門口から尋ねるわけにも參りません。

着換の一枚も、親元から仕入れて來て、些とばかし荷物もございますなり、旅革鞄の小いのを持つてる手も、凍えるやうに寒さは寒し、次第に夜も更けさうな樣子。

うろ〳〵路地へ入りましてね、何でも新開だといふから、家並も新しからうと思つて、見て歩行く内が、皆寂寞して居るのだから、自分ながら、何か怪しいものが寢息を伺つてでも歩行いてるやうで、氣咎めはするし、始末が惡い、すると又一軒ほんの棟割長屋のやうでしたが、戸の合

せ目から、灯影がさした處がありましたから、恁う、立つて樣子を見ると、五六人も人の寄つて居るらしい氣勢です。

御免なさい、何うして先方は、何かしら氣が入つて、一聲呼んだ位ぢや耳に留めさうもないやうに思はれましたので、御免なさい、失禮ですが、失禮ですがと、折入つて言をかけました。

急に、ばた〳〵と鼎が沸くやうに動搖を造ると忘れたやうに又ひッそり、（はい）ッて婦人の聲で、妙に改まつてこたへました。

あとで考へますと、氣の毒です。」

「何うしたのでございませう。」

「勝負事をして居たものと見えます、聞くと、彼處等は、凡てそんな風な處ですつて、しかし氣が付いて冷汗を流したのですが、從姉の家は知れました。

二日前まで、從姉は其家に住んで居たんださうで、豫て望みだつた二階家の恰好なのが見つかつて、新世帶なり、わけもなく引越したといふことです。

（番地もよくは承りませんでしたが、このさきの荒物屋の横町を入ると、二軒立、おんなじ二階家で、外は平家ばかり、直きにわかるといふお話し、否、知れにくい處ですから、嘸お困り）と言ひ〳〵、出て來て、雨戸をあけて深切にいつてくれたのは、粹な女房だつたので。

禮をいつて其路地を出ますと、荒物屋が分りました、通の角に瓦斯燈が一本、暗い横町。

入つてしばらくすると、道の幅が廣くなつたはいゝが、突當りのやうで、見付からないものですから、はて、知れないと難儀此の上もなしだと、少々慌てまして、ぐる〳〵あるきながら見廻しますと、又た板戸から灯がさして、其處ぢや嬰兒の泣く聲がいたしました。

おなじやうなことを申して、くどいやうですが順でございますから。

嘸迷惑だらうと存じながら、其處でまた從姉の姓をいつて聞きますと、隣の格子戸がそれだといひます。

喜んで、退つて見上げると、なるほど二階家、暗いからまるで平家のやうに見えたので。

いかにも二軒立。

戸をがた〳〵と遣ると閉つて居るので、然も其の路地の突當の廣くなつた丸い地所の中へ、十文字を入れた角家ですから、ついて勝手の方があいてやしないか知らと、まはつて見たのです。」

三

「矢張、しまつて居るので、寢たのか、然うすると寢入端だから一寸は起きまい、留守だと此の寒いのにと思ひまして辟易して、引返して參つて貴女。

大戸を密と、がた〳〵遣つて見るといふ、先刻から、凡そ氣の利かな過ぎる役廻りで、定めしお聞きなさるにも張合がございますまい、お待ちなさいよ、」

と灰を落して、二ツばかり、葉卷を振つたのを持直した。

「しかし追つて先づ長火鉢で、差向ひになるといふ寸法なんですから。

其處でまた格子戸のあたりに寄つて、（隣家は留守なんでございませうか、）

女房らしい物越で、

（ツイ今しがたまで、話聲がして居りましたよ、）

（度々お邪魔を、）と早々軒づたひに從姉の戸口を、

（姉さん、姉さん、）ツて呼んで見たのです。

（長さん、長さんかい、）

（然うです、）

（今あけますよ、）と直ぐに出て、カツチリ錠をはづすと寢衣の態。

（眞暗ぢやありませんか、）

（あかりを引込ましてあるんですよ、）ツていそ〳〵して、土間から取着の三疊の間に吊した、洋燈の心を、扱帶を卷いた後姿で、ぱつと繰上げますとね、疊に引いた褥の處で、長煙管、茶盆が

顯れる、長火鉢がてら〳〵して、傍に茶棚が見えようといふ體裁で。

（何うも寒いッたら、〳〵、）

私は飛上るやうにして、障子の隅へ、突然革鞄を拋り出して胸の釦を引切るばかり急いで外套を脱ぐ始末。

（今暖にしてあげるわ、）ツて入かはつて、貴女、あとの障子を閉めて、はら〳〵と、向う正面、茶棚のわきへ膝を丸くついて、ずッしり重量のある鐵瓶をずらして、其の手で襟を搔合せて、帶をぐるりとまはしながら、片手は炭を繼ぐといふ働ぶり。

（よくねえ、ほんたうによく來たのねえ、今しがたがあッといつたあの汽車でお着きなの、久しぶりッちやあないよ、）とこと〴〵しく久しぶりの顏を見ないのが、一層馴染がひで隔がないぢやありませんか。

（恐しく早寢だね、）

（もうそちこち十時半でせう、いゝえ、それにしても未だ寢るのぢやないの、一人ね、寄席へ行つてるのがあつて、未だそれも歸つて來ないんですから、唯床へ入つて居たばかり、）

（これかい、）と親指を見せました。

棚から今燗徳利を取らうとして居たのが、此の時はじめて顏を見て、わけもなく、

（うゝむ、なあに、泊りに來て貰つてる男の人。）
どうこへトンと入る、猪口を出したと思ふと、小皿に布巾をかけながら、
（さあ、樂に在らつしやい、何うしたの、何か見えませんか。）
私は紙入がないのであわてて居たので。
（長さん、大丈夫よ、江戸なれたものが、横濱で落したり、掏られたりして、可いものですか、
屹と其處等にありますよ、落着いておいでなさい、何うしてもなけりや、あなたのお小遣ぐらゐ
立てかへて置くわ。）と澄して海苔をあぶります。
（ぢや、其の氣さ。）
（さあ息つぎに一ツ、お茶のかはり、まだぬるいでせう、其の內お湯が沸るとはうじたのを入れ
ておまんまを上げます。）
（大船で辨當を食つたから、腹はいゝが、それから此方震へが留まらない、寒いね。）
（おかさねなさい、まあ、おまんまは。それぢや卽席御料理早吸物といふのをお目にかけませう、
お香のものは出しませんよ。）
（澤山。）
（一寸、まぶが來たやうな晩だねえ。）と從姉は自分も一口、」と飲む眞似、口輕うはないが、話

上手な紳士であつた。

四

「（飛んだ晩だね。）と年上だつて憎いから謂つて遣つたのです。さうすると莞爾と笑ひましたつけ。
（長さん、飛んだ晩といや、此間盜賊に入られてね。）
飛んだ話ぢやありませんか。
（へえ？）
（何も目を圓くしなくツても可い、私は無事さ。）
（別に盜られたものはないのか。）
（些とやられたの。）
（餘り無事なこともないぢやないか。何うしたんです。）ツてうつかり猪口を下に置きました。
（ですがね、私は怪我も何にもしなくツて宜かつたんですよ、丁度湯に行つて居たの。）
（留守なしで。）
（はあ、それからそら今寄席へ行つて居るてツたね、其の萬といふ男に泊つて貰ふことにしたん

だわ。)――」

語りかけつゝ紳士は後なる方、次の室と隔の扉の方を、稍伸上るが如くにして振向いたが、靜に夫人に向直つて、

「貴女、」

といつて髪の黑い、若やかな額を差寄せた。

「其の萬といふのが一件です。」

「それでは其の者があの、掃除人でございますか。」

「全く。……それから、從姉が一葛籠、帶を三本、衣もの、羽織五枚、紋着も交つて居たさうで、外に拋り出して置いた不斷着をそツくり、櫛だの笄だのを入れた桐の手箱を一ツ、幸ひ、鏡臺の上に拔いて出た、珊瑚の佳い方は取られなかッたッて、さしてるのを拔いて見せたりなんかして、雲丹と海苔で先觸のあつた早吸物などが出來ましてさ、あとの氣味の惡かつたことや、巡査の深切なこと、屆を出したこと、それから、土地馴れないで見くびられるが口惜しいから、桂庵に口をかけないこと、豫て約束をしてある女中が鄕里の靜岡から舊の正月が濟むと出て來ること。

旦那は濱に取引があつて便宜上、自分を妾へ引越さした樣子、其時は矢張商業で京都の方へ行つてることだの、其が年寄で肥つた人で、いろ〳〵ものも思つたけれど、あきらめて堅くして居

るの、年寄は愚癡だの、別れる時泣いたの。茶が好きだの、扨萬といふのは、もと靜岡の湯屋に三助奉公をして居たもので、隣家のうどん屋の雇女を何うとかで、其で何とかして首を縊めようとしたのを、自分の主人が助けて、鐵道の掃除夫に世話をして、横濱に居るから、淋しければ泊らして置けといはれたこと、乃至其の男が大の色男がりで、勿論些と甘くッて、おはこが夕暮にながめ見渡すといふ踊で、汚い大な足をひよいとあげて、身振をするの、しかし小力はあるの。何のッて、やがて勉强をおしなさいよ、あなたも女なんぞにと些とまはつた處へ寄席から。

(萬さんか、)

(はあい、)と生ぬるい返事です。

從姉は　さん、と樣づけにして呼んで居ましたけれども、然ういふ關係なのですから、遠慮はしないと見えて、萬が、私の傍へ坐つて、顏をじろ〳〵見ながら、兩提の煙草入を捻くるのを、

(もう、お寢なさいよ、)とうつちやるやうにいひますので。

(一ッ何うです、)と私は愛想振にさしましたけれども、受取もしないで、默つて、辭儀をして、

(私や、眠うないで、)と舌ッ足らずにものをいひます。

いやな奴だとは思ひましたが　又氣の毒な、不便なやうな氣がして、其晩は些とも恐しいの凄いのといふ、心持はしなかつたんですが、イヤ、」

驛夫が、
「原――原――」
此處で三分。

五

「十日經つて、二度目に今度は東京から參つた夜……萬の顏といふものは、實に私は男子だけれども身ぶるひをして悚氣としたのです。
唯今貴女が御覽なすつた通りです。」
夫人ははづして膝に置いたフラシテンの肩掛に包んだ手を、帶のあたりに出して、柔かに指を組み反して、
「私はまた國府津で乘合の方が、ばら〳〵、皆降りてお了ひなすつて、急にさみしくなりますのに、これがもう他愛なく眠がりますし、」
供の女中は、うつゝなのありさま也。
「其のうち又貴下が、うと〳〵遊ばすもんですから、急に電燈も暗くなりましたやうに思はれまして、陰氣で、寂しくつて仕やうがなかつたのでございます、然うします內、確か御殿場を越し

てからでございました。
彼の掃除人夫が、むかうの、」
齊しく其方に眼を注いで、
「なるほど、」
「ね、貴方、あの扉をあけて出ましたが、眞直に立つまでもなしに、直ぐ這ふばかりに俯向いて、丁寧に、お辨當の殼、蜜柑の皮、早附木の燃さし、灰落しの上まで綺麗に掃いて參りまして、箒をね、貴下の御足の處へ當てましたッけ。
フトお顏を見ると、ずつと立つて、」
一寸指し、
「あすこまで後飛びに退つて、外套の頭巾の中から、じつと見て居ましたが、つか〳〵と此方の扉をあけて、又振返つたと思ふと出て行きました。
逢つては惡いお方なんだらうと、存じましたばかり、貴下には何でもない人らしうございましたので、まあ、其時は、然まで氣にも留めなかつたのでございます。はあ、先刻、未だお言葉も交しませんでした貴下を、見ず知らずの私がお起し申しましたまでは、」
「何うも、恁う汽車の中で、ふら〳〵居眠なんかしたことはありませんのに、何うしたことでせ

う、私は故郷の靜岡から新橋、其の距離より長い汽車に乘つたことはございませんから、大して退屈なことも覺えないで、眞個です、眠るなんといふことはなかつたのに、魔がさしたのかも知れません。ぢやあ彼奴が、私の肩を摑まうといたしたのは、函嶺の中でございますね。」

「否、その前にも、一度然うやつて貴下に目をつけてからと申しますものは、此の室を蔦が通るやうに、何なんですよ、電燈の下を切つちやあ、行き拔けましたが、

然うです、丁度函嶺で、アノ恐しい轟々といふ中に、靴の音を沈めてじり〳〵と寄つて參つて、貴下の背後へ一杯に立ちはだかりましたから、私は其まで、女中と並んで、彼處に居て、其の掃除夫には氣も付かないやうなふりをして居ましたのですが、變だと思ひましたから、故と顏を見てやりました。

然うすると、氣がさしたやうすで、私の方を見ましたつけ、睨みつけました、何うも其のいやなことツたら。

其までは、スリででもあるかと疑ひましたのが、餘りいやな人相なんで、大變に取つて、私は、貴下の敵で、これは！お殺されなさるんぢやないかと思ひましたもの。」

「何のおかゝりあひのないお方が見て其だもの、まともにやられた從姉は無理もありません。」

と人知れず歎息した。

「それで、まあ、何うなすつたのでございます。」

「話があとさきになりましたが。

却説、其の二度目に從姉の許に參りましたのは、先刻も申しました通り、十日過ぎて後で。前の時、矢張、何うもお恥しいにも何にも全く何處へか紙入を失くなして居たのですから、差當り困ります。

串戲を事實にして、小遣を借りて歸りました、それを返しかた〴〵、學校が濟んで、彼是して出かけました時間ですから、日の短い時分のこと、横濱へ着きますと又夜分で。」

六

「從姉は長火鉢の向うに貸本を讀んで居りましたつけ、火鉢は場所をかへて、次の六疊に置いてあつたのです。

其の六疊は、前夜私どもが床を三ツならべて寢た處でございました。」

紳士は思ひ出したやうに、

「然う〳〵、未だ申しませんでしたが、前晩は未だ他に小兒が二人來て泊つて居たのです、あとで聞くと、矢張從姉の世話をした主人が遠緣で、おなじ鐵道に運送係を勤めて居るものの小兒だ

さうで、五ツになるのと九ツになるのと。

小な方は女の兒で、これは盗人に入られて、萬を頼まないさき、横濱に世帶を持つた當初から、夜は淋しいッて從姉が抱いて寢たんですな。

すると私が飛込んだ晩は、小兒たちの内にも不意の泊客があつたとかいふことで、九ツになる坊やがあぶれて泊りに來たのだといふことでした。

（萬さん、小兒を踏んぢや厭よ、）と寄席がへりが、やう〳〵寢に行く時に、從姉が氣をつけたので、私もはじめて氣がついた、スーとも言はないで、よく靜に寢て居たものです。襖一重で分りません位、其癖ね、兒坊の方は、をばさん盗賊が入ると突くよかなんかで、小刀を捻りながら寢たんですとさ。

（そりや大變だ、新世帶に三組泊客ぢや、夜具にありつけさうもない、姉さん許で風をひいちや、先祖のお位牌に濟まない、）と一杯機嫌で勇氣がついたから、迷惑を察して、遲いが旅籠屋へでも行く氣だつたんです。

從姉が、

（私は冷性だから行火を二ツ抱く、夜のものは其のつもりで一番さきに用意がしてあるから、氣遣なさるにや及ばない、私は小兒二人と一所に寢るから、）

（其の方へ私が入らう、）

（お前さんを子持にするのは未だ惜しい、い、から任かしてお置きなさい。）ッて、並べて床を取つてくれました。

小兒の寢所と此方が二ツ、裾合せにして、萬が寢たのです。

内には二階が一室、も一ッ臺所の傍に三疊、盗賊は其處から入つたといひます、それだけありましたけれども、二階は建具を入れたが骨ばかりで、未だ障子が貼つてなかつたんで、萬を次の室へ、下げて寢かしては、襖を隔てる、縱令從姉弟同士でも、若いものが二人、といふ遠慮があつたらしい、殊に掃除夫は、大分主人に恩を被て居る男だもんですから。

（ぢやあすぐお寢みなさい、）と私はさきへころげ込みました。手足をのばした工合はよし、くたびれては居るし、醉つちや居りましたし、枕に就くと、もうう と〳〵。

柔な裾で、枕頭を二度ばかり、する〳〵と硝子杯、煙草盆などをくれましたやうな氣がして、あとは分らなくなりました。

然うすると何か身體に觸つたから、フト目が覺めますと、從姉が一所に寢て居たんです。

やましき處なかりけむ、紳士は事もなげに語つたのである。

「裾の方で、

（あゝ、寝られぬ、寝られぬ、）と萬が獨言をいふんでさ。
（もう、起きたら可いでせう、）と從姉が澄していつた時、私の方へ肩を見せて、身をねぢりました。
（六時打つたよ、）
（どりや、起きようかねや、）
と萬が大欠伸をして、しばらくもぢ〳〵して居ました、衣ものを引ッかけたと見えて、のそりと襖をあけて、それからも三疊に出て、釜の下を焚きつける役だつたんです。
それが早いか、從姉はするりと、起上りさまに、拔け出したあとの夜具の襟を、私の胸におさへつけましたが、」

七

「一ッ飛びにトンと萬の寝た衾の殼へ、音をさしてずぶりと入つて、
（おゝ、暖い、萬さん、お前さん火の性だと見えてほか〳〵するねえ、あゝ〳〵可い心持だ、）とあだな聲で。
私は胸がどき〳〵したから、夜具を引被つてしまひました。ぱち〳〵聞えたのは、萬がやがて、

釜の下を焚くんです。
雀の聲がすると、小兒が目を覺し、冴えた聲で饒舌り出したのを、聞き〳〵、又ぐつすり一寝入。
目を覺すと、私の寝床一ッ殘して、あとは綺麗に片づいて居ました。
帶を取つてくれる、書生羽織を着せてくれる、紺足袋も裏を揃へて、行火に暖めてある、顏を洗ひに行くと、シヤボン、齒磨、櫛、鏡も揃つて、井には豆腐、眞白な葱まで買つてある。
萬が、親類のお客樣に御馳走をしておあげなさいと、それは〳〵小まめに立働いて、雜巾も二度かけて、朝疾く勤めに出て行つたといひます。
小兒も最う歸つて居ました。
從姉は別に變つた樣子もなし、私も何とも思ひませんでしたが、妙に胸の底に得もいはれないやうな心持がしたのです。十一時の汽車で、本鄕の下宿に歸りました、それから十日經つて其の二度目に參りました時まで、此の思は絕えなかつたので。
すると貸本を讀んで居た、一心に見入つて、明い洋燈も霞んだやうに、うつとりして顏を上げましたが、
（おゝ、長さん、）とばつたり疊に伏せたのです、元氣よく聲をかけて、快くいそ〳〵迎へてくれ

ましたけれども、何となく窶れて、あひかはらず串戯をいふ内に、取つてつけたやうに、一寸々々眞面目になつて、何か考へ事をするらしい。

從姉は、小取まはしに、座を立たないで、二ツ三ツ一寸食べられるものをならべて、酒を出すのが不斷から大の自慢で。蓋物を出しながら、又考へて居ましたが、

（あゝ、萬さん、）

（へい、）と例の舌ッたるく、臺所のわきの三疊の襖を中からあけて、ぼつとして間のぬけた、然も目も眉も口つきも、せゝッこましい顔を出したのは掃除夫です。

（あのね、長さんは今夜泊るんですからね。）

（はい、）

（そしてね、お身體の都合で、しばらく同居をしますから、）

私に目配せをして、

（お前さん、最う可いんですよ、）

睨めるやうにして又私の顔を見たんです、口を出すなといふのでせう。

（はあ、然うかね、そして私これから官舍の溜へ去つて寢るかね。）

（何うともさ、）

（はあ、）といつたッ切、ぴしやりと襖を閉めたんです。

内證で、極低聲でひそ〳〵いふことがあるだらうと、私は耳を差寄せましたけれども、從姉は膝にブリッキの海苔の罐をついたまゝ、うつむいて、呼吸を殺すやうに。

しばらくしてはッと溜息、いやしらけましたこと夥しい。

トがさ〳〵して居た襖を又開けますと新しい手拭を腰にはさんで、手織のどんつく、こて〳〵と綿の厚いのを、はや座敷から尻端折。

棒縞の汚れたヅボン下を太く穿いて、例の汚い、大な足で、のさり〳〵と私のうしろを通る、片手に風呂敷づつみ、片手に何と行火をむき出しに引提げてませう。

（おや〳〵大變なお荷物、）

（もう、むかうぢや火もねえだ、）といひましたが、土間見たやうな處へ寢るんですつてね。

（荷物はあしたでも取りにおいでな、）

（へゝゝゝへゝ、）と不意に笑ひましたぜ。」

八

「而して其の時、あの凄い目で、二人をじろりと見ましたが、

(今度くりや、そんな用ぢやござりません。)ッて。
従姉を蒼くなりました、そんな氣の弱い人ぢやないのでしたが、しかし、」
紳士はあらたまつて、
「貴女も唯今御覽なすつた時、あいつの睨むのを見て、私が殺されでもする、大切な事のやうにお思ひなすつたとおッしやいました。
誰が見ても何ともいはれない獰惡な目つきなんでございますね。
で、ひどい泥濘だつたもんですから、其のなりでのさ〳〵出て行つたあとで、しばらくして従姉が、
(長さん、濟まないが、今夜は歸つて下さい、御出世前の身體だから何につけても御大切だ、)ッていふのです。
何事がはじまるのだらうと思ひますと、
(屹と萬が殺しに來るよ、)といひました。
而して染々、
(前世の因縁といふのでせう、私は境涯で、心にもない罪も造つて居るし、好きなこと、勝手なこと、隨分我まゝをして、長さんとも一所に寢たから、もう思ひ殘すことはない、)といつて顔を

見て莞爾する。
一度は私も吃驚したけれど、これを聞いて、馬鹿々々しくなつて安心をしたのです。
けれども、串戲は串戲、誰も他に人がないから、其には寄らず終汽車で引返しました、別に心には留めなかつたんですが、何となく別れぎはが惡かつたも、道理、從姉はもう亡なりました。
話の様子でお分りになりましたでせう、勿論殺されて。
しかし、咽喉だの背だの、七八ケ所嚙み散らかしてあつた齒のあとが、當時のしらべでは、何うも獸の牙だといふことで、未だに警察の疑問になつて居ります。
私は公儀のことについて、何とも口を出しません、唯心靜に亡き人を弔ふばかりでありますが、こゝで萬に逢うとは思ひませんでした。
萬は何うしたか七年越うはさも聞かないのでしたが、ぢやあ、矢張掃除夫をして居るのでせう。
決して、萬の仕業だとは思ひません、從姉を殺したのはあいつではありますまいが、しかし、貴女が氣をつけて下さいませんと、私もフト嚙まれたかも知れないのです。
何と、あの顏は一種の猫に肖ては居ませんでしたか、左の目のふちから頰へかけた、赤痣は、斑のやうに見えませんでしたか。
ついては、同一形の斑猫が一疋此の話に絡んで居ます、腕白盛に、亡くなつた從姉がお轉婆で、

いやもう近所を荒して歩行いた名高いのを、二人で殺して、見届けて、裏の大藪へ棄てたことがありました。

くだらないことですから、貴女には、一切其事に就いては申しませぬ。

お棄てなさらないで、お聞きだといふなら、なほ悪い、夜更だし、それにあやかしがついて居ますから、お氣味が悪うございませう。

二十五の厄年の男とは、同行もしないものと申します。

殊に猫萬が此の汽車に居て、既に私の身のまはりへ出没します上は、なほ更のこと、貴女にまた御迷惑でもかゝつてはなりませんから、室を別にいたしませう、これで、」

夫人は濱松に歸つてから、然る寂しい、物凄い夜汽車に乘つたことをつひぞ覺えぬ、で、寧ろ同車して事件に携はるより、跡に取殘されて女ばかりになる方がなほ堪へられないと、言つて切に引留めたが、靜岡で別れて何の事もなかつた。しかし心を寒うしたのは、興津の停車場で、他愛のなかつた女中が、恐しく魘された時であつたと、親しい友に物語つて、

「其の掃除夫は、私が見ても猫そツくり。」

お留守さま

一

今戸邊で出來るのだといつて、友達がくれた姉さんの人形が一個、小形の、細長い桐の箱に入つて居るのを、はじめは墨かと思つた。學生、生駒讃平。

小石川柳町の、玄關とも二間といふ長屋の侘住居、南向の庭を前に、緣側に向けて据ゑた昔の寺小屋もので、引出が三個づゝ兩方についた机の上に、其の人形を。

唯頰杖をついて、傍なる大湯呑に煎茶を入れたのに片手をかけながらつくづく……見るから媚めかしい、衣服は薄お納戸の彩色、帶の處を墨で染めて、しめたといふより、卷きつけたやうな引かけ結び。弱腰は、消えて見えないほど、すらりと裳に搦んで、片足を眞直に、衣服の上から透いて見えるやうに、線を柔かに描いて、左の脚を折曲げて、其の伸した右の太ら脛の處で組違へた、稍々じだらくな後姿。はらばひの人形で、根上りの品の可い圓髷、生際のぼかし手際よく、鼻筋が通つて黑目勝、優しい眉、これに兩手を頰杖した、其の手の肱のあたりから、下ぶくれの、うつとりした顏へかけて、胡粉の色の白々とある美しさ。但し唇を紅で描かず、墨でしたためか、

何となく曇を帶びて、愁を含み、歌麿の艶な處へ、北齋の凄味を帶びた、凡そ二寸ばかりの、所謂のあるらしい、何となく深い祕密な意味のありさうなのが、土で拵へたものだけに、水の垂るといふ艶はないが、恰も柳の蔭で白魚を見るが如き婦人である。

此の手の前に、同一、其の箱の中に一册、櫻の花片位な、小さな本が備へてあるが、なり形、顏の氣組から推して試れば、經典、詩歌の書ではあるまい。

出來は新しいのであるけれども、見る處、髮の結ひやう、衣のつくり、當時の妻妾の風俗ではない、古くからある形を、あらためて作つたものらしいのである。

讃平は右瞻左瞻ながら、不圖桐の箱の蓋の裏に、色紙形の紅唐紙をはつて、

おるすさん

と記してあるのに心付いた。然矣、何者か、良人の留守を意匠として直ちに婦人の名としたもののやうに思はれた。

讃平は、思はず湯呑を推遣つた手で、膝を打つて、打微笑み、

「乳母や、をかしいぢや無いか、一寸御覽。」

其の姉さんを掌にのせて、背後を振向いて言ふ。

爰に針箱を据ゑて縫物——寧ろ繼物をして居るのは、此の孤兒のために一身を捧げて十七の年

紀から守育て、今、一室に水入らず、乳母のお松といふのである。
「何うだ、よく出來て居るぢやあないか。」
乳母は針の手を留めて、少し顔を出すやうにして、
「まあ、上手に拵へましたねえ讃様、お藥師様の縁日ですか。」
「可哀相に、お前見たつて違ふよ。縁日ものにこんなのがあつて堪りますか、御覽、能く。」
「成るほど、綺麗だよ。私は又昨夜買つておいでなすつたかと思つて。」
「昨夜買つて來たものを今更感心することがあるもんか。」
「でも坊ちやんだと言はれるのが口惜くつて隱しておいでなすつたのかと思ひましたの。」

二

「何ういたして、坊ちやんのおもちやにしては、こりや色氣があり過ぎら。杉山が朝ッから飛込んで、何だか仰々しく、歸つてから出して見ろ、感心するッて置いて行つたんだが、お前にや然う見えないか、何處かこりや、あの、深川の姉さんに肖てるやうだ。」
「御新造さん。」
「むゝ。」

「拜見。」といつて請取つて、眩いばかり障子越に秋の日の射し入るのを、片手、人形の上に翳して掌を少し影にしてためつすがめつ。
「本當ですねえ。」
讃平は頷いて、
「何うだ、そつくりだらう。」
「肖て居りますこと、まあ。」と上へ上げて又見直す。
「まだ驚くことがあるんだ、此の人形の名をお留守さんとつけてある。」
「へい、おるす……何でございますか、名なんでございますか。」
「あゝ、名さ。」
「妙なお名前でございますね。」
「いゝえ。」とおさへて、讃平はまた微笑みながら、
「洒落なんだよ、そら其の旦那か、御亭主か、おかみさんが留守をして居る處さ。」
「なるほど解りました。」と乳母合點をする。
「今つからお前然う早く感心をしちまつちやあ不可い、まだこれからなんです。
ねえ深川のにそツくりだらう、處が彼の人のことを皆がおるすさんと恁う申します。」

「御新造さんでございますか。」
「うむお婦美さんのこッた、お貸し。」といつて、讃平は乳母の手から人形を請取つて舊の机の上に置き、座を斜に彼方此方お松の顏と、お留守の顏。
「卽ち、取も直さずだ、取も直さん此の人のことさ。」
「何故然ういふことを申しませう。」
「其がね、死んで居ないものを、彼の人は御亭主が留守のつもりで居る。」
「御亭主だなんてをかしうございます、あなたの從兄さまぢやありませんか。」
「僕の從兄だつて多之助はお前、お婦美にやあ亭主だらう。
お婦美は感心にや感心だがね、多之助が死んで居ないなんと謂はうものなら、顏色をかへて腹を立つよ。
僕が行つたからッて、突然顏を見ると、
(姉さん今日は、從兄さんは、)とお極りなんだ。然うするとね、お婦美が、
(あの今留守なの、)と何時でもいふことになつてるがね、極が惡いか、氣の毒さうに莞爾するよ、可哀相だな、乳母。」
「はい、」

「おゝ、不可い、お前年紀を取つたか、此頃は、すぐ泣くね、厭だぜ、僕は。」
「其でも御新造樣の話が出ますと、御親類中、何誰もほろりとなさらないものはございません。
否、お婦美樣のことばかりぢやあないのでございます、一所に若旦那樣のことも思出しますからでございます、あの、其でお留守さんといひますのでございますかい。」
「女中にでも然うだッさ、だから皆で、」
「誰がそんなことを申します。」
「先づ僕、」と讃平は低聲なり。
「お人の惡い！　あなたは！」

三

「蔭口といつちやあ濟まないけれども、何それ位なことは本人も心得てます、だつて、お前泣いてばかり居られやしないや。
「そんなら可うございますけれども、また其れにしました處で、面と向つて怪我にもお留守さんなんておつしやつては不可ませんよ、本當にお可哀相だと思つてお上げなさいまし、此の間も蠣殼町の大旦那樣に、あなたのことを大層お譽めなさいましたつて、而して釦の光る學校の服を召

して、胡坐して、姉さんッて言つて下さる、最う何も思ひませんとさ。御新造さんも未だ三十には間がおあんなさるし、貴方もお若うございますから本當ならば一寸々々別莊の方へ被行つしやいますのは宜くございませんと申しますのですが、あゝやつて二十の年紀から佛樣に操を立通して在らつしやる、御新造樣のお心を察しますれば、そんなに懷しがつておいでなさいます貴方を、何も世間體を分隔をつけますでもございません。まあ却つて御不便に思つてお上げなさいましと、お勸め申します位でございますが、しかし讃樣、」と少し更まつていふ。

「何だ。」

「當家の親御樣が世に被入つしやいますれば、屹とお留めなさいますよ。其は實のお兒さまでございますと却つて思過しをなすつて、不安心に思召しませう。私には御主人でございます、家來が見ましてお主を確だと思つたのに間違はございません、其は最うお婦美さまとお床を並べておやすみなさいましても、乳母やは安心をして居ります、自慢のお兒樣なんでございますもの、私は不容色でも本當に鼻が高いのでございますよ。」

「だから精出して勉强をなさいだらう、大分評判が可い。」

「ほゝゝ、あんなことを。もう其に越したことはないの。」

「處が實は一寸出懸けたいのです。」

「おや、どちらへか。」

「お言葉に甘えるやうで濟まないけれども。」

「深川へ行らつしやるの。」

「お留守め、此の間も僕にぜんまい仕かけの肭臍臍の玩弄品をやらうかッていつた。おまけにお前、鞄を肩からぶら下げろの、半洋袴にして長い靴足袋を穿くと似合ふのと、人を小兒にして居ら、丁ど可いから此の人形を持つて行つて一番驚かしてくれようと思ふ。」

「其は行らつしやいますのは可うございますけれども、あの餘りおいでなさりません方が可うございます。」

「何だか譯が解らないね。」

「否、別莊の方へはいろんな藝人などが出入をしますさうですから、また。」

「なあに、お婦美がもう飽いたと見えて俳優や義太夫語なんざ此頃ぢやあまるで來ない、內中ひツそりして奧の方で長唄のやうな謠を遣つてます、」といひながら早や人形を懷中へ、つい手の屆く床の間の隅にある蝦蟆口と卷煙草を一所に摑んで、無造作に袂の中、不斷着を其のまゝ飛白の書生羽織の紐を結び直すのを見て、

「洋服ですとお喜びなさいますよ。」

讃平は打笑ひ、
「然う旨くゆくもんですか。」
「そんなことをおつしやつて、貴方また憎まれ口をお利きなさいますなよ。」
「そりや、さきへ行つた上で、御馳走のあり無しに因るさ。」

四

「御馳走、解りましたよ、入らつしやり早々、晩のお菜の御穿鑿なんかなさるもんぢやありませんわ。婦人の顔を見たら髪の出來ぐらゐお賞め遊ばすもんですよ。」と中の間の口でいふ小間使の初は、島田に美しく結つて居たが、自ら讃せる如く出來たてのやうで、衣服も餘所行の派手な絲織。日向を通つて些と暑かつたといふ風、衣紋が亂れて圓顔の逆氣鹽梅、つい今出先から歸つたらしい。讃平が汐入町の別莊の木戸を入る時、宿車が三臺、洲濱形に梶棒を置いて、一人金時の文身であらう、脇腹の邊ほのかに鉞の柄の見える胸の汗を拭うて居た。
「何だ、髪の出來、よせ、椎茸なら汁のだし位にやあなるけれども、汝の島田なんかおかめの雜物とおなじことだ。」
「あら覺えて在らつしやい！」

「何といふ大きな聲です。」と此の時銀杏返の年増が次の室からひよつくり出たが、何故か眉を顰めて居た。
「お仲お前も一所か、」
「おや入らつしやいまし。」
「何處へ行つた。」
「はい、」と二人が前後もなく、殆ど同時に言はうとするのを、讃平遮つて莞爾して、
「待て當てて見せよう。」
「當てて御覽なさい。」と甲走つたり、そはついたり、叱られたり、悄げたりしたお初は絲織を大事さうに膝を浮して坐る。
「いきなり口へ浮んだのが干瓢ね、初の天窓が島田湯婆と。」
「お仲さんあんなことをおつしやるんだものを、」と仲働の顔を見て怨めしさう。
「默つて聞かないか、ものには前兆といふのがある。こゝで考へるに築地へお墓參だらう。」
「當りました！」
といひながらお仲が束々と出て、斜に半身を土間に乘出すと、開閉の荒ツぽい、腕白がよくは閉めないで入つた戸口から、顔を出して繻子の帶の引掛結びの背を捩り、

「長吉さん、」
「おゝ、」と大聲を引張つて、返事をしたのは件の文身の兄哥なり。
「お茶をお飲んなさいな、壯佼さん、御苦勞樣。」
「へい、難有う存じます、」といふのが聞える。
「さあ、奥へおいでなさいまし、讃樣、臺所の方を氣に遊ばすものぢやありませんわ、何うせ湯婆でございます、ほゝほゝ。」
「生意氣なことをいふな、どれ、お婦美の奴を口說いてやらう、何方だ、庭の方か、池の方か。」
「お仲さん、御新造樣は。」
「あゝ池の方のお座敷ですがね。」と又忙しさうに取つて返し、歩き〳〵、
「讃樣、讃樣、讃樣、」といひ〳〵以前の次の室に入つて、
「一寸々々何うぞ、」とものありげに低聲で呼んだ。
「うむ、」
立話でお仲はひそめき、
「賢客、よく入らつしやいましたのね、本當に可い處、實は其のお墓參に參つたんですが。まあ行らつしたんです。」

「感心。」
「はじめの內は、歸途に新富座を見せようよ、なんて仰有つて大層御機嫌が良かつたんですが、向うへ參りますと、お側まではお連れなさいません、お一人でお墓へお參りなさいましたつけ、卵塔場を出ておいで遊ばしたお顏を見ますと、私どもは何うなさいましたと、駈出して參りましたわ、生駒さん、御新造樣は宛然ねえ、去年瘧をお煩ひの時のやうなお色なんです。
吃驚して、お初どんと兩方からお顏を見て居りますと、心持が惡い、歸る、とおつしやつて、丁ど梅吉の姿も見えましたから、直に。母衣をおろせとおつしやッたッ切、今しがた、まあ、無事にお歸りなさいました、が御帶をお解きなさると、其儘あなたね、枕を寄越せッて、横におなんなさるぢやありませんか。
お初どんは少いから、そんなぢやおあんなさらないと暢氣でせう、私は心配でなりませんから、お醫者樣を呼びますやうに申しましたけれども、病氣ではない、とおつしやるんでせう。其でも と押返していひましたら、煩い！とね、散々な御機嫌です。何うしようかと、うろ〳〵して居りますのに、お初どんが暢氣らしい、わあ〳〵いふのが又逆らつちや惡いと思つて、參つて見ましたら、あなたが在らつしやつたんですよ。
眞個に助かりますわ、何うぞ一番樣子を見て下さいましな、可い工合にねえ、後生なんです。」

讃平は頷いて聞きつゝ、少時考へたが、
「何か我儘だらう、其とも、お前たちが謀計に乗つて新富座をごまかされたんぢやあないか。」
「御串戯ばかり、何うぞ。」
「可し、池の方だな、」と立つてた二人は二ッに分れて、生駒はつか〳〵と行き懸けたが、振向いて調子高く、
「お茶菓子を早く、あの又最中を紙に乗せて出すと、撲るよ。」

五

「呀、なるほど御不例のやうだ、」と生駒は奥座敷の入口で聲高に言つた。
勝色うら郡内の小搔卷の襟を深く引懸けて、お仲は横になつて居るといつたけれども、しかし枕を其の搔卷の裾の處に轉がして、六畳の片隅に差置いた小机に恁懸つて、根上りに結つた年紀には肖ない内端な髷、其さへ重たげに、眉の隱るゝばかり俯向いて手で支へ、壁に對して念ずるが如く、煩へるが如く、惱めるが如く、惱めるが如き風情なるがお婦美である。
見るから最も惱ましげな姿であるのに、生駒は遠慮些とも無く、つか〳〵と座に通つて、汐入の池に臨んで欄干のついた板縁に腰を懸けて、斜めに見るお婦美の後姿は、艶かに冷たさうに、

鬢の毛の透いて映るばかり、眞白な耳朶から頰のあたり、顋をさし入れて二枚合の衣紋、やゝ寛かに、解棄てたまゝの錦の帶は、紫紺の地に處々白金黄金の光さして、搔卷の裾にかくれ、疊の上にあらはれて、恰も恁る麗姫の棲める仙境の細道に異ならず。
されば此時、池の面に一點の雲の淀みなく、空は淡く澄んで水かと見え、いらかを辷り、廂を傳ひ、別莊の奥深く弱々とさし入る日は、畫の月の色を見るやう、掛花活の芙蓉の影を、てらてらとある小机の面に宿して、朱の小さき硯が一個、一册觀世流の謠の本。生駒は身を反して、欄干に背を凭らせ腰かけた足を組違へながら、お婦美の容子を眺めたが、繼穂ないのを事とも思はず、座に人ありとも思はぬ狀で、
「おや〳〵相變らず唸つてます。……如何に賴光御心地は何とござ候ぞ、」と軍歌のやうに、一寸節を附けて言つて見たが、無邪氣に呵々と笑つて、
「何、そりや姉さん。」
「これですか、」
と衝と見返りざま、右手をしなやかに差出すと、手首にかけたは、一聯の珊瑚の數珠、爾時搔卷の袖はゑり脫けて、お納戸の紋着に、色こそ違へしどけない桃色の扱き帶、姿も、ふりも、此處に……と思はず讃平は胸を抱いたが、フと恁る人と、恁る境遇を天が戯にこしらへて見たのだと

感じて、あはれに思つた。

親子そば

三人客

一

花まきを一つ、と誂へて、縞の羽織の片手を懐に、右手で燒落しの、最う灰になつた大火鉢をぐい、と引寄せながら、帳場格子を後にして整然と坐つた、角帶に金鎖を見せた客があつた。彼是十二時に近い頃、雨上りの春寒い晩である。

「まきを一、」と媚かしい聲で通したが、やがて十能に眞赤なのを堆く、紅の襷がけ、圓く白い二の腕あたり惜氣もなう、效々しく、土間を蓮葉にカラ〳〵と突かけ下駄で持つて來て、鐵火箸を柄長に取つて火鉢にざッくり。

面長で色白な、些と柄は大いが、六か七と見えてあどけない風、結綿の髷がよく似合ひ、あらい絣の前垂して、立働きに繕はず、衣紋の亂れたのも初々しい。嬌態もなく眞直に立つて、火を入れるのを見て、

「おゝ、難有う、」と忙しく兩手を翳した、客は此の節一寸々々來て見知越なので、帳場に坐つて居た、女房が愛想をいふ。

「飛んだお寒うございますねえ。」

「寒いッて何うも、」

「妙なお天氣でございます。」

「然やうさ、」といひかけて、火鉢の緣に頰杖した、客はフト心付いたやうに、自分と斜向に、其は入口の、一間破れた障子を背、上框に甃をかけた、左足を土間一杯に踏伸し、銅色の艶々と、然も痞せた片足を前はだけにぐいと折つて、踵で臍を壓するばかり、斜に肩を落して、前のめり、坐睡すると見ゆるやう、左利の拇指と、人指を割つたのに、薄手の猪口を挾んで、肘を鍵形にしやッちこばらせ、貧乏搖ぎといふ、總身をゆすぶッては俯向いたまゝ、猪口を鼻の頭で押つけるやうにして酒を嗅いで居る親仁があつた。これを見て、目を返して、いま引返さうとする娘が、襟脚の雪のやうに鬢の浮いた、撫肩の、雙子もしなよく、すらりとした後姿を、

「あゝ、姉さん、」

「はい、」とあでやかに振返る。

「一合正宗をつけておくれ。」

「お君や、熱くしてお上げ申しな。」

「はい、はい、」

母親と客へ二ツ返事で、お君といふ娘、向をかへると手を上へ、一寸爪立つたが、眞暗な棚の、貼札を正面にならんでゐる、罎の中から一本抜いて、直ぐ下の板の間へ、無造作に十能を差置いて、小刻に、やがて、煤けた柱で劃つたやう、磨硝子を嵌めたる如き、湯氣のむら〳〵として、洋燈の朦朧とある中へ見えなくなる。

彼處に父親が居て、其のかゝりで、

「かけ一上、」と口早也。

「あいよ、」

直ぐに娘は盆を据ゑて、片手を振りながら、臺所の曇つたやうな中仕切の敷居を跨いで、結綿に結んだ手柄の色、鮮麗に露れたが、此の註文は別に一人。

入口に極近く、障子に肩の觸れるばかり、悄れた狀して、羽織も着ないで、頰被をして居たらしい、なえた手拭を項に絡いて、身を窄めて居た壯佼で、顏を灯に背けたから、年紀の頃よく分らず。

「お待遠樣、」

と出したのを、默つて請取つて、腰のあたりへ引着けたまゝ茫乎。

「おや〳〵おや！」

帳場から、

「父上！」

「何うしたの、」と娘もばた〳〵、何につけても忙しい、壹岐殿坂下のおやこ蕎麥と看板に記して、夫婦と娘ばかり、男も使はず、近所の出前は親仁が受持つて、留守の內は板前を母親が預る、娘が給仕の共稼ぎ。

店も座敷も八疊の上り口の此の間一ツ、積んだ蒸籠を床飾にして、客は五人だとぎッしり立込む程、內端な商賣、勿論こゝが親子三人の閨にもなる。

二

けれども加減をよく食べさせて、種ものの種を惜まず、トンと腕を鳴した、打方の緊の好さ。かい撫のもりかけ屋に澤山類がないと、土方、日雇取、大工、仕事師、造兵のお職人などが味ひ覺えて、透の無い繁昌に、めッきり仕出し、未だ出來上りはしないが、つい月はじめから、金方なしに二階の普請にかゝつた位。

亭主が懸聲の大さに、女房も帳場を立つた。

「何の、今お燗を上げようとすると、罎がお前、ポカと斜ッかけに破ッたらうぢやないか。雫も

殘らず、釜の中へ打ちまけよ。ほら、芬々して居ら、湯の中で暢氣なものだ、人の氣も知らねえ奴さ。」

「希有だねえ。」

「父上、ひゞが入ッてたんでせう。」

「それにしても湯は恁う溫いんだからな。」

「まあ、何しろかはりをおつけよ、早くおしよ。」といつておいて、女房は帳場に直つた。

「相濟みません。」

「御一所でなくッて不可ませんが、何うぞ召上りまし、お待遠樣でございました。」と娘が誂を土間から其へ。

火鉢を一寸押遣ッて、

「可いとも。」

「おう、娘さん、」と此の時、又嘗の猪口をひッたり盆に置いたが、糊で附着けたやうに未練らしく指も放さず、杉の丸箸が松葉に散ッて、井の蓋は桐一葉、親仁は苦々しい眉の顰んだ、然もトロンコの顏を上げて呼びかけた。

「お銚子？」と派手な聲、既に四本ばかり並んだり。

「いンや、澤山だ。」と强く首を掉ッて、がッくりとうつむき、斜に股のあたりへついた手を、膝頭へのめらせて、一ッ肩を搖つた。

「待ちねえ、待ッてくんねえ。」

一調子ドス聲を高らかに、

「待つてくんねえよ、」と內懷へ手を入れたが、ふッ〳〵と向うざまに息を吹いて、しばらくして、

「えゝと、恁うだに因つて、」と、よろけ縞の唐棧の羽織の兩方の袖口を引いて、左右に二つ三つ扱くと、襟を返して、うしろへ脫ぎ、腋の下を潛らして、中央を攝んでずるりと前へ引いて曖をした。

「おう、何だぜ、」といひさま細い赤大名の雙子の、寢皺は寄つたが、未だ新しい、艶のある袷に、三尺をしめた姿で、土間へツイと立上つて、

「都合があるからね、おい、これを預けて行かあ、ねえ、おい、」と二足三足。

親仁が寄せて來るので、娘は鈴のやうな目を睜つて襷がけの其のあらはな手で、前垂の端を取つたまゝ思はず退る。

「都合があるからね、濟みませんがね。」

「あゝ、もうし、」女房は帳場の中で片膝立てた。

「眞個に濟まねえ、ウイ、、濟みませんでごぜえす、ごぜえすが濟みませんでごぜえすが、ごぜえすがね。」

ほッと呼吸して、

「私あね、三崎町だ、三崎町のね、おい、藤助ッてもんです。此の何だ、町内の頭に聞いて見ねえ、知ッてら、懇意です、直に何すら、ねえ、おい。」

「お次手でよろしう、」と夫婦ほとんど一所に聲をかけたが、亭主姿は見えず、女房は一寸面を背けた。

娘はじッと見て居るのである。

「お次手でよろしう、何、お次手で、」と藤助ぐつたりと尻を下し、

「可かあねえ、よくねえです。憚んながら、濟むもんかい。そんなことをして濟むと思ひますかい。えゝ、濟むめえ、相濟むめえが、ヤイ、何うだ、姉や、」

突かゝりさうな劍幕に、帳場から、

「何の貴客……お君や、」

此方へ、と目くばせする、母親の顏を見て微笑んで、

「可いわねえ、母様。」

三

「可かありませんてことさ、フム、」と打棄つたやう、海鼠に首があらば此の形さ。

客は其の容子と彳んだ娘の顏を上下に打視め、

「突然だが、お前さん、お金子なら何うかしようぢやあないか、何も御緣さ、」

帳場に捻向いて、早や手を懷中へ、

「おかみさん、私が立かへて置きませう。」

「まあ、旦那、」

「滅相な、」と調子はづれに、向うから燗の出來た一罎を、亭主は不作法に引摑んでのッこり出て來た。布子に、これも襷がけ。半股引を穿いた、およそ五段目の定九郎が、山賊頭巾で、揚幕を出た頃の蕎麥屋の風と見て可也矣。

繕ふ處更になく、

「へい、」と客の前へ突出して置いて、娘に並んで、藤助の傍に寄り、手はかけぬが、肩の上へ、掌を開いて腰を屈め、

「えゝ、もし、心持を惡くなさらねえで、一ツ勘定を踏んでおくんなさるわけにやあ行くめえか

ね。」
「何を、」
「いゝえさ、腹をお立てなさらねえで、何うでございませう。御都合はまゝあることなり潔白に然うやつて形を置いて行つて遣らうとおつしやる、其のお心は讀めました、讀めましたが相談で さ、唯た今ソレ鰻が破れて酒がこぼれたでがす、内の奴も希有なこツたといひまさ。
此處で私も心持が惡くツてなりません、吉左右だとは誰が考へても思へますまい、いや、詰らないことでもあると氣になりますわ。
處を一ツ勘定を踏んで下さりや、はゝあ、今夜これだけの損のゆく、其の前兆であつたにして、さて、さらりと事濟み、何うでございませう。え、もし、」
「馬鹿に、馬鹿にしやがんない、誰だと思ふ、誰だと思ふ藤助だ。恁う、藤助を誰だと思ふ、」深く慎つた風もないが、だらしもなう縛れかゝる。
ト白けて皆が默りの折から、ぞろヲり〳〵と高い音、此の時まで伸して居た、件の影のやうな壯佼が、思ひ出したやうに啜つたのである。
「御主人、ともかくもまあ、其の事は氣にしないが可い、壞れた分は私が買つた分にして、代を拂ひませう、別に。で、私が買つたものとすりや、お前さんが心持を惡くするにも當るまい。何

うです。」
「飛んだことをおつしやる、勿體ない。」
「そして何しようぢやあないか、一つ其の方のも立かへて上げようぢやあないか。」
忽ち大音聲、
「誰だと思ふ、藤助だ、鑢なしの藤じるし、」と半から極低聲、と聞くと急に開き直つて、細い目を見据ゑながら、
「恁う〳〵、内の亭も、餘所の旦も、可い加減にしろい。勘定を踏んでくれの、立かへるのと好なことをいはあ。藤助だ、さあ。藤助だ。恁うなりや、さあ、手前ン處の太打が鼻緒に化けても踏まねえよ。情婦が富鬮に當つてもかけらだつて達引かせねえ。天が二杯よ、一、二、三、四い、銚子が五本だ。取つといてくンねえ、斷つて預かつてくれ、え、おい、斷つてのこツた、」
「でもさ、」
「眞個にお次手で可うござんす。」
「かみさん、おかみさん、おい、かみさんや、女の癖に無勘定なことをいふない。恁う、聞きねえ。女房は家のかためなりけりさ、聞きねえ、女房は家のめツかちよ、なあ。お前さんは兩眼明かだ、しかも佳い年增だ、佳い年增で居て、見ず知らずの野郎を達引いて濟むかい。

はゝあ、さては、お前密男をしてやあがるな。」

「ほゝほゝ、」

先刻から他愛なく、莞爾々々して醉どれの狀を見ながら、餘念もなう、其の管を聞いて居た、お君は兩親が、今のあまりの雜言に齊しく色を變へたにもかゝはらず、およそ堪らないと言つたやうに、

「まあ、松助にそツくりだよ。嬉しいねえ、」と擦寄つたが、いきなり唐棧の羽織を請け取つて、手にのせると、肱のあたりがヒヤリとした。

「おゝ、冷い、雨にあつたの、母様預つて置きませう。」

「へい、お値段を此處で、」といつて、件の壯佼はフイと立つてがらりと戸をあけた。立てかけてあつた、番傘がはずみで、ばツさり。見向きもしないで、影が消えたやうにポンと出た。

「誰だ、おねだんを此處へなんて言ふなあ、誰だい、へん、己が名は藤助でえ。」

「藤助、」

「や、」

「本名皮剝の庄兵衛、」

「……」

「御用だ！」

「ウム、」

「神妙にしろ、」

「おゝ、先刻蕎麥屋で背後に居た、」

「夜中に羽織を取りに行つて、戸をあけさせて押込まうと、强盜品玉の材は上ツたぞ、覺悟しろ、唯だ一人だが、鐵三郎だ。」

「旦那、まあ、御覽なせえ、」とビクともせず、內懷から、取出して、片手業で紙包、開いて掌に据ゑたのを、眞砂町の原の角あたりから、一筋の赤い虹の如く、暗を貫く瓦斯燈の灯に、唯見れば美い半襟であつた。

「馬鹿といや、まア馬鹿でごぜえすがね、あんまり娘の罪の無さ。短刀で威したら、蟲がかぶらう、俳優だと思つて嬉しがるか、どツちにしても仕事は出來ねえと、狙つた的をフイにして、土產を持つて、寢ねえうちに、これからね、羽織を取りに引返す處でさ。

旦那、たゞ此のまんまぢやあ不可え、私も庄兵衛だ、唯今一立廻やツつけやすぜ、天命なら仕方がねえ、お前さんの手柄になせえ。

しかし旦那、お職掌だから御無理はねえがね、考えて御覽じろ、私が痛めつけたッて、たかが金子だ、働きや譯なしさ。も一人居た野郎なざア、いやに見せびらかしやあがつて、あいら、娘を狙ひまさ、疵ものにされた日にや、取返しがつくものぢやねえ。

可哀相に私のやうな惡黨せえ、涙が出るやうな可愛らしいものを、慰まうといふ善人が世の中にや澤山ありまさ、そいつらにも些と氣を配つて、庇つて遣つておくんねえ。

はて、何處へ、持つてく土産だらう、」と水を飲んだより一層醒めた、酒の名も知らぬらしい、苦み走つて引しまつた、頰のあたりに微笑を含んで、其の半襟を帶のあたりへ突込む、と思ふと、鐵三郎は颯と退いた。

冷龍一躍、三寸ばかり閃いて、疾く手にかゝつた捕繩は、端短にプツリと切れた。

「お前さんは未だ少いや。」

トタンに衝と寄る、背後へ飛んで、下富坂の暗の底へ、淵に隱れるやうに下りた。行方知れず、上野の鐘。

起誓文

お客分　松蟲　銀色赫奕　納涼臺　二十六夜　住居之段
朝戸出　田舍唄　蟹の怪　岩井靜馬　若木の橘　火焔
山神童

お客分

一

「おや、お歸りでございますか。」

停車場前の新開地、古顏の犬も居らず、蝙蝠の棲む穴も出來ない、未だ新しい軒並び、海水浴旅館の案内所。鮑の粕漬、水雲の賣店、一寸一杯お晝食、お休み處などある中に、客が駕籠で來た時分から、一軒老鋪の角の茶屋。

こゝに名物の女夫饅頭と云ふのを商ふ。釜の上に冷えたらしい蒸籠を重ねた店の、油煙で燻つた眞赤な灯、薄暗い釣洋燈の蔭から、三十近だが緣付かぬ、お縫といつて評判なのが、店さきへ通りかゝつた男女連を見懸けて呼ぶと、

「あい、唯今。」

と婦人が先へ、あと齒の下駄の音からりとさせ、素足の爪尖ちら〳〵と、摺れ逢ふばかり內端

な歩み、片褄きりゝと引上げた、裳を溢るゝ水色縮緬、露にしつとりと重たさう。
鼠地に紺で市松形に、三番と置いた組合の揃の浴衣に、黒繻子の帯を引かけ結び、小造だけれど襟脚の長い脊は高いくらゐ。洗ひ髪をさらりと無造作に亂したが、上手に肩で捌いたれば、丈に餘るのも目に立たず。眉細長く、鼻筋の通つた、目の涼しい、細面、口許が引緊つて、頬の肉の薄いのは、愛嬌に缺けたが品の可い處あり、年紀の頃二十か一。
眞白な胸を衣紋寛やかに、裄を短う、ふツくりした腕あらはに、竹の柄を輕く取つて、提灯を提げた、帯にも褄にも蹴出しにも、媚かしい夜の隈、浴衣の袖のひだが搖れて、店頭へ來て、嬌態好く彳む。
お縫は蒸籠の後へツイと立ち、干菓子の箱の硝子蓋、龜裂を稲妻形に貼つた上へ、輕く手を置いて半身を乘出いて、
「まあ、お掛けなさいまし、御緩りでございましたこと。」
婦人は忘れたやうに其の提灯を地摺にぶらり、眞直に手を下し、まともに受けた洋燈の灯が眩しいといつた目を、一ッぱつちりと瞬いた。
「あゝ、難有う、大分手間が取れたでせう。」
「しばらくでございましたよ。先刻お寄りなさいましたのは、未だ灯の點くか點かない時分でございましたもの、ねえ、母様。」

背後を見返ると、停車場に面した向うの隅の大火鉢に肱を支いて、前に腰を掛けた車夫、魚屋なぞ草鞋連の相手をしながら、言を途切らして、海手の方の軒に立つた、此の婀娜者に見惚れて居たのが、
「然うとも、お前。」と仔細のないことを仰山に答へたが、心付いて車夫に向ひ、
「だとね、うむ、然うかい。」と可い加減なことを云つて、煙管を見ると吸殻が消えて居るので、一ッ扱いて、トーンと叩く。
寂寞する。
婀娜なのは立つたまゝ、白脛を外に捻ぢて、下駄を溝石にカラリと當てた。
「姐さん、最う何時です。」
「未だ下りの終汽車が着きません、まあ、お休みなさいましな。」
「然うね。」いひながら、打傾くが如くにして、
「あなた。」と振向く。
背中合せに間を置いて、人通のない路中に、秋草山の空を仰いで、星の美しいのを視めて居た、つれの少いのが、

「一寸、お掛けな。」

二

紺絣の單物、鼠縮緬の兵兒帶して、此は草履穿。麥藁の海浴帽を、眞白な紐で結んで大きやかに肩にかけた、年紀は同一くらゐ歟、人摺れのしない內端らしい質であるから、或は五か六かも知れぬ。

休んで行かうといつたので、提灯を下に置き、直に傍なる內の者の納涼臺兼帶の床几の上に、褄も下さず、

「あゝ。」と、片手を背後へ反して、可愛い足を素直に、下駄の齒の見ゆるまで、罪もなく投げ出して、草臥れたあどけない風、ほつれ毛を一寸拂ふ。

娘は干菓子の箱に頰杖して、一擧一動に目を注ぎ、惚々とする顏色、蔭では熱心に其の假色を使ふと知るべし。

「あなた、これから月ケ岡まで、隨分お大抵ぢやございません。」

「否、つれがありますから。」と、何の氣もつかずに云つた。

「まあ、お樂み！」

と目を圓くする、お縫の呆れた顏の前へ、ヅイと出たのは連の男で、背にかついだ麥藁帽が洋燈のあかりを遮る蔭に、婦人は耳許をほんのりと、口に差し寄せて提灯を一吹、フツ。目を反して、星を見て、澄したものである。

青年は頓着せず、

「姐さん、此の梨はおいしいだらうか。」

「唯、否、其よりか其方の笊のが、好うございますよ。」

「どれ、此かね。」

「其は若旦那樣、泡雪と申しまして、口へ入れると皆解けて終ひます。飛んだおいしいのでございますよ。」

「いや、何うですか、姐さんの口の方が餘程旨しさうでございますね。」

「あら、あんなお人の惡い、御新姐樣お聞きなさいまし。」

打微笑むのみ、

「……」何にも不言。

「これ、お客なんだよ。」

「若旦那。」

「何だ。」
「月ケ岡の若旦那、お客分といふのでござんせう。」と母親が又向うから伸上つて煙管を杖。
「ひろめをしたら祝つておくれよ。」
「そりや、もう。」
「一ッ御馳走にならうかね。」と、取つて床几に憩つたが、婦人とは斜向の背中合せで、恰も懇意な獨りもの同士、壁隣に住つたといふ趣である。
「梨を食るんですか。」
「あゝ。」
「庖丁を貸して下さいな。」
少し調子高にいつて、投げて居た足を引いて、床几から立たうとする。
「其處に在らつしやいましよ、唯今上げます。」
「何うぞ。」
「それから、煙草の火を。」
「光や、お茶をお上げなさい。さあ、睡つてちや、不可いぢやないか。」
「はあ。」と云ふと、ずるりと土間へ、はだけた膝をつきさうにしたが、危く貽して身を橋に、睡

がりの雇女、ばた〳〵と希代に泳ぐ。
「おッと、どッこい。」
「呀！　相かはらず。」
「お天氣が變るのかい。」と草鞋連が哄と笑ふ。

松蟲

三

洗ひ髪の意氣なのは、胸を伏せて、俯向きながら、手尖の働に器用を見せた、皮は溝の上に長く垂れて、梨は半ば掌に雪を捧げたやうである。
切れものの刃を見詰めながら、
「おいしさうですねえ。」
「そりや貴方、其に何でございます、つい晩方馬に附けて持つて參りましたばかりですもの。」
「あの、先刻行きがけに此處に繋いであつた馬は、これを積んで來たんですか。」
「然やうでございます。」

「然う、大きな顔だわねえ。」と呟いて眞面目で居る。
黙つて煙草を飲んでたのが、
「大きな馬？」
と聞答めた、妙なことをいふと思つたらしい。
娘は堪らず笑ひ出して、
「東京の馬は小さいんでございますか。」
「何をだらしのないことを言ふんです。」
庖丁の手を留め、眉にはら〳〵と亂るゝ髪を、横に輕く拂ひながら、
「嫌ぢやないんですが、恐らしいから、馬車のでも、荷車のでも、成たけ遠くへ退いて歩行くんですから、あんなに近い處で見たのは珍しい位なの。」
「だつて、お内へ行らつしやいます路では、澤山、馬士が曳いて行くのにお逢ひなさるんでございませう。」
「其の時は、連の方の背後にかくれて、目を瞑るの。」と目を瞑る。
「へい、なるほど。」と是非に不及、感じ入つた體でお縫は頷く。
「先刻のは其處の柱に、緊乎と、結へてあつたからよく見ました。而して顔の長いツたら、……

こんな。」と庖丁を持つたまゝ、腕を白う、自分の顔の前へ衝と伸した。
「それぢやまるで、狐のやうだ。」
「人！　憚様ですよ。」
二人が交へた咄嗟の此の言、お縫には聞取れなかつた。はて、間は抜けたとは思つたが、轡頭を引繞らし、話を棒鼻から取つて返して、
「然う〳〵、あの時、お通りなすつたんでございますね、眞實に何をして在らつしやいました、今時分まで。」
「些と、お轉婆をして居たんです。」といひかけて、フト梨を剝く手を留め、掌をかへして、兩方、瞳を動かし熟と見たが、
「おや。」庖丁を置くや否や、まさに剝き終らうとしたのをばツたり取落した、小さな雪丸げは、露を持つた夜の地へ星の宿りさうにころりと轉がる。
お縫が驚いて、
「何うなさいました。あれ！」
「まあ、私。」と細い指を宙にぱら〳〵と雫を拂つて、うつかりした其の風情。
顧みて、

「何うした？」
「お切りなさりはしませんか。」
「否。」といつて手を袂へ、白の絹ハンケチを取出して、掌を合せて拭き〳〵、
「はじめッから綺麗にして、それから取れば可かつたのに、今お轉婆で思ひ出したら、手が汚れて居たんですわ。ねえ、松蟲を捕まへようッて騒いだでせう。」

四

「何て處、此のさきの、海へ出ようとする些と手前の砂ッ原に蒼白い異人館がありませう。橋があつて、片一方が芋畠になつてますね。路傍に三味線草だの何か、入ると乳ぎり伸びて居るでせう、彼處に澤山鳴いて居るの。松蟲ッたら、まるで草續きに一軒々々、世帶を持つて棲つて居るやうですわ。しばらく立つて聞いて居ると、欲しくなつて仕樣がないんです、ですけれどもねえ、灯もなし、お星樣は出て居ても宵暗でせう、何うすることも出來なくッて、私口惜くッて、堪らなかつた處へ、向う横町の八百屋さんが、異人館へ急に納めるものがあつて、其の歸りがけなんだつて。
提灯を持つて居て、蟲を取るんなら貸しませう、然ういつてくれたもんですから、それから方

方草ン中を暴れたんでせう。草は深しさ、お前さん、あかりが茫乎して、じれッたいから、蠟燭を引張り出して、裸火を振つて潛つて歩行きました。
其ですもの。」と唇に指を觸れて、眉を顰め、
「私、つい氣が付かなかつたの、ぢかに此の手ぢや上げられやしないんです。姐さん、憚かり樣、一ッかはりを剝いて上げて下さいな。はい、庖丁、」
振仰いで差出したのを、青年は無言のまゝ、菓子箱の彼方へ取次がうとする時、梨を引摑むと、お縫は肥つた身を小取廻、急いで下駄を引かけて、
「其處へ參ります、參ります、可うございます。何も其の位なら汚れて在らつしやりやしませんわ。」
「何うして亂暴なんですから。」
「だつて、あなた、草ン中は夜露がひどいばかりぢやありませんか。」
「其でも汚いんですよ、馬の草鞋が打棄つてあつたし、女のね、駒下駄の緒の切れたのが片足さ、草ッたら蒼い水晶のやうで、露が透通る中に、チロリン〳〵、何うも葉さきが搖れるやうに鳴いてるから、夢中になつて櫛を落ッことしたのも知らないで探したんですが、晝間見たら、それこそ汚らしくッて大變だらうと思ふの、ねえ。」と薄ら寒さうに肩を窄め、兩手でしッかりと乳を

抱く。雪の頸を輕く撫でて、そよ〳〵と風が出た。

溝石の外に棄てられた一魂の雪は砂にも塗れず、早や初秋の氣の所爲か、それさへ俤に立つ位。五六軒筋向うの、町家に交つた茅屋の軒に、淡く殘つて居た蚊遣の煙が名殘なく消えると、髪に染み、袖に宿つた磯の香が、ほの〴〵としたのがはじまり。

界隈の灯が一ッ消え、二ッ消え、やがて間近な腰障子に人の影法師が大きく映つて、屋根暗く、銀河つら〳〵と低く下りた。

一點の雲もなく、星は一ッ一ッあらん限りの光を放つて、ものの凝つたやうに輝く間、空の色は漆の如き、其の影を敷いた初夜過ぎの町に、折から、犬も鳴かず、ばッたり人の往來途絶えて、石ころも無い路傍に、唯一つまみの黑き砂あり。其の砂、見る〳〵うちに堅まつて、石となり、飜然と動いて木の葉に變じ、忽ち足が生え、爪が出來、むく〳〵と躍り出でて、暗い隅から灯の射す中へ、さら〳〵と來て、體を据ゑ、斜に構へたるは、先づ……何物ぞ。

五

即是兩眼在レ天、一甲不着地、大足二足、小足八足、右行左行而渡レ世者、蟹也。

甲を斜に溝石へ反を打つて、蹴出の媚かしくこぼれた端を、引挾まむばかり間近く、今しも男

の手から煙管を受けて、伏目に一吸した地を這ふ煙を貫き、ガツキと爪を上げたのを、見るとも無しに一目見るや、

「あゝ、」と呼吸を引いてついと立ち、身を飜して慌しく、青年と傍に立つた娘の中を、羽色の青い、あはれな鳥の、けたゝましく搔潛つて、突然土間へ飛込むと、烈しく下駄の齒を蹈鳴らして、

「厭よ！　厭よ！」と身を揉んで、煙管を簪に袖を上げた。

恰も其の時、洋燈にも蛾の大きなのが、ばッさりと、白い粉を撒いたので、停車場の灯は屆かず、驛長室の窓の明が、薄黃色に見えるばかり。此が消えたら、界隈に灯は無くならう。一國を暗にする蟲の羽音の凄じさに、飲むものは飲み、饒舌るは饒舌り、草臥れたのは草臥れて、壁を天窓で小突いて一人、敷居にはらんばひになつて一人、蜈蚣といふ身で頤を膝に挾んで最う一人。母親は火鉢の緣に頬杖して血の道の廣告に出ようといふ顏、猫及び雇女は蚊の鳴く中に座睡して、陰々滅々、穴居時代の風情であつたが、婦人の叫聲に齊しく驚き、吁々といふ、一時に魂が、ひよいと入ると、思ひ〳〵の立働き、起返るやら、突立つやら、膝を立てる、猫が歩行く。停車場ではがら〳〵と鈴が鳴つた。

「何です。」

「何うなすつた。」

と逸疾く、納涼臺に立ちかゝつたのは、大肌脱の車夫と、向顱卷の魚屋さん。
時に海手から俥が二臺、停車場をさして、矢の如く駈け拔ける、響きに應じて、怪物の足が消えた。
木の葉となり、石となり、見る間に黑き砂に紛れて、横ざまに見えなくなる。
娘は前後を眴しながら、
「何でございますね、梨の白いのが落つこちたもんですから、蟹が握飯だとでも思つたんでせう、そんなにお嫌ひでございますか。」
「何ね、恐しくはないんですけれど、吃驚したんですもの。」と極が惡さうに莞爾する。
「惡戯が過ぎるからです。」
「だツて……」とうつむいて口の裡、仔細ありげに言ひかはしたが、驚破鎌倉に駈け着けた、御馬前の兩名聊かも耳に留めず。
「はゝゝゝ、蟹ですかい。」
「私あ、また可い心持にうと〳〵しながら、荷の中の鰹が泳ぎ出した……と。」

銀色赫奕

六

魚屋の彦次は、若くつて、威勢の可い、毛だらけな、腋の下の汗を拭いて、
「現と云ふんだらうか、それとも幻か、私ア何も眠つたとも思はねえけれど、ふらりと往來へ泳ぎ出すから大變だと思つた處だつたから、尙のこと驚いたい、えゝ、姐え。」
「(笑ふ)ほゝゝほゝ」
「まあ、氣の毒だつたわねえ。」
車夫の筑松傍より、
「何もお嬢樣、氣の毒がんなさることはねえんでさ。何、鰹が泳ぐ夢なんか見るもんですか、今ね、口を開いて寢て居やあがつたから、鳶に攫はれた處を見たですよ。」
「馬鹿をいへ、へむ、彦次の魚は活きてるぜ、影がさしや鳶を取らあな。」と大力味で肱を張り、足を踏んで、灸のあとがある背中でしやがみ、天秤は草鞋の下つた柱に立てかけ、此のあたりに便ふ魚籠を二ツ宛かさねたのを一荷、土間に引入れてあつた、蓋を向うへ撥ねると、銀色赫奕として鰹あり。
彦次は魚頭に片手を翳し、

「これだもの、夢に泳ぎ出さあ、そら未だ、くり〳〵と目が動く。」
「嘘をつくぜ。」
洗髪のは肩越に差覗いて、
「サウダですか。」
「へい、さうだ鰹のいかいんです。」
「活がいゝねえ。」といふ口ぶり、引かけの帶、裾端折、浴衣の染も質素なので、馬の顏が長いと言つた人に似ず、花道を出た世話女房といふ風がある。一ッは氣の毒らしい今の騷ぎのまじくなひに、鰹の活を賞められて、彦次は大得意。
但し背に近い美人の胸に、力瘤のでこぼこした肌脫の身を、もぢ〳〵、
「何うだ、御新姐樣の目が曇らぬ鏡よ。」
「云つてらあ、私だつて、お客を乘せりや、鳶くらゐにや一のしに飛ぶ男だ。」
「此の鳶野郎、鰹を攫はれちや大變だい。」
呵々と笑つたが、
「物騷々々。」と呟いて、彦次はやがて蓋をしようとした。
「あなた。」

「……」
「一寸買つて行きませうか。此間から鰺ッか持つて來ないんだもの。」
床几に掛けたのが、又星を見たまゝ、振向きもしないで領く。
「魚屋さん、幾干なの。」
そりやこそお聲がかりに、彦次はしかゝつて居た蓋を、今度は威勢よくポンと撥ね上げ、
「え、安うがす、安くして置きますぜ。御覽なさる通り唯もう一尾ですからね、先刻の地引で上つたのを、此處へ持つて來るまでに、其處らのお別莊へ羽が生えて飛んだでがす。魚はもう此の通りだ。」
「お前さん效能書は分りましたよ。」
彦次は目を返して、
「默つて居ねえ、おゝ、お前、其の梨は何うだ。諏訪法相の兜といふ形で捧げ奉て居るぢやねえか。」と近ごろ玉之丞といふ俳優が、明神の境内で小屋がけ芝居をした、其の十種香の段で、見覺えの警句を吐く。
「おや、おや〳〵。」とばかりお縫さん大テレで、手に据ゑたのを廻しながら庖丁を取りにかゝる。
「澤山、其のまゝ持つて歸るから可い。もう二つばかりおくれ、次手に袂へ入れて行く。」と銀煙

管を、御殿持の筒へさして、膝について居たのを持直して、其手を袖口に入れたまゝ、床几を放れて衝と立つた、欲は帶に、ひたりとつく、瘠形な人に一そよぎ、星きら〳〵と風涼し、月ケ岡さして歸り支度。

納涼臺

七

「彦、やい、恁う唯は返さねえぜ。鰹を一本可い値で商ひをした上に、御祝儀を二貫とせしめて、別嬪を歸しやがつた、畜生め。」と車夫は納涼臺に居所をかへた。

「何さ、ありや二十五錢なら大した高い値ぢやあないがね。」母親も店の方へ出かけて來て、

「しかし、兄哥や。お前一寸々々商ひに行くだらう、内も恁うやつて、海へ行らつしやる行歸りに御贔員になることなり、彼の方達は何にも御存じない、お坊ちやんとお嬢さま、阿漕なことをして儲けちや濟まないよ。」

彦次は田舍の氣樂さ、溝石の上に立ち、肌脫の身を露出で、

「おッかあ、心配しなさんな、そりや無え、憚りながら彦次だ、いや又儲けようとした處で、今

の一件だ、何うしてうつかりして居ようものなら、飛んだ背負投げを喫つて酷い目に逢ふ。」

「今の一件ッて何なの、御祝儀の出た一件、彦さん、お前が、何かいつてへゝゝへゝッて希代な顏をおしだと、おや、然うお前さんだッたのかい、御免なさいよッて、恁う繻子の帶の間へ手が入ると、銀貨が一ッ、アイヨさ。そして何うも極りの惡いやうな彼の笑顏ッたら、何うも〳〵無いんだよ。」と自分が大きに笑顏になつて、お縫は半面を團扇でかくす。

「さあ、大變、何うも早や、此間ッから樣子が變だ、何かといふと、妙に別嬪の假色を使つたり、身振をしなさるがね、不可やせん、肥つてるもの。何それも肥つたのと瘠せたのだから、大した相違はねえやうなもんだけれど、唯、何だね、女の名を濁つて讀むだけさ、一寸先づ、前方の風が玄冶店のお富だと、お前さんは、」

「何だい。」

「然うさ、田舍茶屋のおどみさ。」

「畜生！」

「だがね、唯た今アイヨと帶の間へ手をお入れなすつた風は、そつくりでしたぜ、何なら銀貨を一ッお驕んなさい。然うすりや、尙の事お富さんだ。」

「可い加減におしよ。」

「おッと打たねえで、何うぞ其の團扇を貸しておくんなさい。身に染みるやうだが、何うも蚊が居て不可え。」

彦次も毛脛を高く摺り合せ、

「ほんたうに酷い蚊だ、よく彼の方達はじつとして、身悶もしないで居なすつた。」

「其苦さ、お前達のやうに酒をのんで裸ぢやあないものを。」といひながら、母親も土間へ下りた。納涼臺は夏中いつも此の時分から、内の者が領するのである。

「筑松。」

と呼んだ娘の語氣が極めて烈しい、母親といふ味方を今身近に引寄せたから、こゝで燒酎の貸を枷に大に仕返をされることと、車夫は思はず恐入ッて、

「へい。」と弱い音。

「串戲はよして、彼の方は、お富さんといふの。」

「何、そりや出たらめさ。眞實は何てえんだか、尤もあの方がはじめて停車場へ着いて、此の店へ休んで、それから月ケ岡まで行らつしやらうといふ時、おともをしたのは私でさ。そら、姐さんも知つてませう、先月の末だ、ねえ、阿母。」

「然うさ、晩方だッけ。」

「小形の革鞄が一ツ、ハンケチに藥瓶を包んだのを持つて、其の手で涼傘をさして、恁うだによつて、」

娘は團扇を頰にあてたが、

「質素な鼠の縞明石の單衣を、あの素裸に着て、水淺葱に白で撫子を拔いた絽と、茶の無地の絽とを打合せた帶を、しんの無いお太鼓に薄く結んで、下じめが鶯茶に海松ふさを拔いた縮緬さ、一寸、よく知ッて居るだらう。」

八

「何うも其の可かつたこと。そして上品に白足袋を穿いて、其の時は引詰めの銀杏返、根を短かうして飾ッ氣がなくッて、矢張水色縮緬の蹴出だつたでせう。紅ッ氣ッたらこれッぱかりも無いんだもの。停車場からぞろ〳〵と出て來る、人ごみの中を拔けて、向うから内へおいでなすつた時は、一寸三十ぐらゐに見えたらうぢやありませんか、ねえ、おッかさん。小造な品の良い高等な年增に見えたねえ。今夜なんざ、草双紙の繪に描いてある、此處らの船頭の姐御といふ風だけれど、何うして其の時は、どんな立派な處の令夫人かと思つた。」

「矢張御緣だよ、つい停車場前に四五軒も新店の茶店が出來て居りますに、まあ、よくおいで下

さいましたと云ふと、大勢人が居ますから、此方へお邪魔をしたんですッて、小さな聲で言ひなすつた。呼吸が切れて、どんな長旅をなすつたらうと思ふくらゐ、旅の疲か、それとも御病氣か、口紅だけは薄くさして在らつしやつた、其の色も白つちやけた面窶れ、目ぶちなんざ眞蒼で、晝間見てさへ宛然幽靈。

月ケ岡まで直ぐに俥を世話して下さいとおつしやるから、はてな、此春から歸省つて在らつしやる新家の若旦那、數夫様は好男、久しく東京へ行つていらつしやつたから、こりや仔細あつて生靈でも來たのではあるまいか。影も薄し、第一、活きた身體で唯た一人、此處等まで來られさうもない御容子なり、また、お前、傍で見て口をお利きなさるのを聞くと、漸ッと二十そこいらだ。お嬢様、あなたお一人で入らつしやいましたの、まあ眞個に、と呆れたよ。

それから、未だ日は高いが、延明寺からさきの五丁畷で、山の裾が暗くならう。停車場前の帳場に居る若い衆に、間違の無いことは知つて居るが、中でも、白地の手拭の結目が、顏より大い向う顱卷で、親仁のさき曳をして居た時分から氣心の知れて居る、お前を名ざして、呼びに遣つたといふものさ。」

「そりや、阿母、私あ、何のお客様だつて、粗略にや思はねえけれど、いつも不愛想なお前さんが、わざ〳〵此處ン處まで出て來て、氣をつけて上げてくれッて云ふし、向うの鎭守様の森を山

の手へ折曲る處で、見ると、未だ立つて見送つて居るだらう、こりや、昔阿母が浮氣をした時分のお主筋か、それともお茶代がうんと出たか、」

「まさか。」

「筑どん、内ぢやお茶代でね、人様のお扱を違へるやうなことはしませんよ。」

彦次は唐突に、

「しかし借のあるものは違ひます。此の通り、人が棒立ちに立つて居ても、お掛けなさいともいつちやあくれねえ。」

お縫は一寸容子を極まつて、このところ假色で、

「勝手に其處へお掛けなねえ。」

「よう！　正のもの、難有え。」と額をぴッしやり。

「旨いだらう。」

「まあ、聞きねえ。何でもこりや大切なお方だと思ふから、乘せた私の氣の揉めること一通りぢやねえ。大分病氣のやうだから、急いぢやあ、ぐらついて、身體に障るだらうと思つたし、然うかといつて西日が酷い。阿母、あの日は又恐しく暑かつたからね。よた〳〵曳きながら、何さ、此の入日を背にしちやあ堪るまいと、母衣はかけて置いたけれど、私あ、ハラ〳〵してあぶら汗

が出た、さつきのやうな元氣に、よくまあ、おなんなすつたと思ふ。」
母親は頷いて、
「大抵の方は白いのが日にやけるが、あの方のは蒼ざめたのが白くなつたよ。矢張潮風が利くんだね。」
「阿母さん、他に利くものがあるんでさあね。」と娘は悟を開いたやうに言ふのであつた。

二十六夜

九

「いや、見通しだ、姐さん目が高い、私も藥の利目には驚いた。然も路傍の地藏樣の前で、效能立處にあらはれましたからね。何の事はない、停車場前の、廣告にや、婦人一切の御藥として、月ケ岡の若旦那の肖顔を出したいくらるなもんだ。
聞きねえ。
それからだ。いふ通りお大事なものを乘せて、よた曳きにや曳いてたけれど、餘り我ながら意氣地はねえ、延命寺手前の小橋なんざ、些と合せ目がござつてるるから、靜に曳くよりか一呼吸

に飛び越す方が無難だらう。
もし、些と急ぎませうか、おからだに障りやしませんかつて、聞くとね。何うぞ後生だから急いで下さい、知らない土地だから遠慮をして居たんですが、じれつたくつて〳〵と、恁うぢやないか。
えゝ、おい、何のこつた、これ、海軍役所の旦那が自轉車と、駈つこをするなあ、己ばかりといふ私だ。」
「自慢はよしてよ、ふむ、其處で藥は利いたのか。」
「聞きねえ、お縫さん、聞きねえ、阿母も聞きねえよ。」
「こんなに出張つて聞いてるぢやないか。あの方たちの話だから、眠がりの私も目をこんなにして居るんだよ。お縫坊は素より夢中なり、御覽な、最う停車場の戸は閉まつたし、近所でも大概灯を曳いて、店を片附けたよ。」
「まツたくだ、いやに寂として風立つて居ら。氣は心で、これでも向うの氷店に、軒提灯の數でも殖しや、未だ夏の盛だに、唯さへ不景氣な處を、恁う又皆滅入つちやあ、土地の衰微だね。お客は何てつて來るんです。避暑だとか、海水浴だとかいふんぢやないか、尤も此處いら、田圃にや月中から赤蜻蛉が飛んでるからね、せめて停車場界隈でも赫と陽氣にして居ないと、お客たち

は汽車の窓から顔を出して、覗く拍子に嘘をします。尤も八月の末にや末だがね、何の彼のつてこれで來月の半ばまでは、東京から入つて來ようといふのに、仕様がねえ、今夜はまた其の中でも、宵から寂しいや。串戯ぢやねえ、床屋なんざ宵張の癖に、恐しく早寢をした。おや、いつも納涼臺で寢て居る洋燈屋の兀親仁も、今夜に限つて出て居ねえ。」

「これ、聞えるよ、お前、今夜はね、二十六夜なのさ。九ツ時から早起をして、山だの、海だのへお拜りに行かうといふつもりで、早寢をしたのが大分あらあね。今年になつてはじめてだ、背戸まで秋が來たやうだけれど、まだなか〳〵此様なこツちやありやしない。」

「お前方知らねえか、今夜二十六夜待でな、月ケ岡の八幡様に、村の若い衆が催しの改良劍舞ちうがはだかるだ。そも〳〵熊ケ谷直實はアだの、杯手に持イ見渡せばアだの、はあ、種々ある中にも、新田の勝公と、西畠の源坊が、掛合の曾我兄弟討入といふが、コレ、芝居がかりだあ。」

とのそ〳〵と出て來たのは、框に寢そべツて居た、これは月ケ岡あたりの作男にて候。大欠伸をして身體をかき〳〵、

「先刻此處等さ使に來た次手に、穴市(賭博の名、風俗を亂すを以て細說は此處に省く)で、些とせしめてこましたで、燒酎をあふると、うと〳〵したが、幸だあ、何の道、これ、夜明しだと思ふで、今の中寢てこまそと、横になつたけれど、主たちが、別嬪の風說するで、現心に何のことはない、辨天様が夢枕に立たつしやるやうで、寢つかれねえでの、ちつとんべい、其の血の道の藥ちうのを貰はうと思つて出て來ただ。さあ、語らつしやいまし、私も聞くべい。」と、口三枚あたりに又御新客お一人様。

十

「五丁畷を飛ぶが如しだ。瓦を燒く取着の一軒家から、二軒三軒づゝ、ちらほら百姓家が見え出して、それから、それ、若い衆、お前達が、月ケ岡の村へ入らあ。」

「然うだよ〳〵。」

「路傍に地藏様があるだらう、路傍つたつて野中の濡佛ぢやないや、一體月ケ岡邊にや一杯に咲いてるが、螢草がむら〳〵と咲いた中に、四本柱に小さな屋根を葺いて据ゑてあるね。」

「はあ、ございやするて。」

「其處だよ、效能立處に顯れたといふのは。一二町手前から見えたがね、田舍にや珍しい、容子の可い書生さんが彼處に立つてると思つたつけ。

其の筈だ、月ケ岡の若旦那だと、私が目よりさきにお前、俥の上で別嬪、何今阿母のいつた、其ん時は生靈だ、數夫さん！と云つたらうではないか。蹴込を踏みなすつたわけでもないが、何

だか恐しく氣合が入つて、上から押伏せられるやうだ、私あ釘づけに楫棒を留めたのさね、然うすると書生さんも、つか〳〵と寄つて來て、何とも謂へない顏をして、お縫さん其の顏が藥になる、そして、おゝ、お前ッて、其處で名を呼んだけれど、私は茫乎して居たから、つい聞損なつたんだ。村方の若い衆、お前居まはりだから聞いて知つちや居ねえのか、あの新家に來て居なさる別嬪よ、それ今、お前の夢枕に立つたんだ。」

「知らねえでよ。」

「何ていふの。」とお縫は發奮む。

彦次は片頰笑をして、

「お縫さん同一名だらう。」

「默つておいでよ。」

「おしづ、さんだあ。」

「何。」

「お靜さんちうだあよ。」

「張合がねえこと夥しい、お靜さんぢや普通の名だ。そして此の人のいふんぢや、お靜さん忠太夫と聞える。」と彦次め、又笑ふ。

「これ、馱目イいふもんでねえ。何も別嬪だつて、何んだつて、今時の名によ、小野小町とも、ハア衣通姫ともつけられねえぢやあんめえかね。それとも威勢がなうて、惡かんべいなら、勝公と源坊が改良劍舞で名告るやうに、ひやあ、遠からむものア竹法螺の音にも聞かう、近からば根際い寄つて、蟇の目にも見さい。曾我の十郎祐成、同じく弟五郎時致、藤原鎌足朝臣お靜の方とでもいつて聞かせるだつけか、喃。」

「澤山よ。」

「はゝはゝ、そりや然うと、お縫坊も身を入れて聞いて居るが、お前、話といふのは其だけかね。」

「ぢや、何だ唯、其のお靜さんと若旦那が路傍で出逢したといふだけの事だい、べらぼうめ、前置が豪いから、何事がはじまるかと思つたら、何の事だい、宛然德利の底をゆすいで飲むやうな氣もない話だ。恁う、それよりか、私が方にや、新家のお靜さん大世話場といふ、」

「待ちねえ、まあ、默つて聞きねえ、筑松だつて其の位な事は知つてらい。枝のない田圃道だ、唯出ッくはした位なら、何にもお座料は頂きません、私なんざ出くはしつけてら、時々おふくろの口から、親仁の遺言に出ッくはさうといふお兄い樣だ、話はこれからだ。

尤も日が經つたから、些と間は伸びたがね、其の時直ぐに引返して、御注進と駈けつけて見ねえ、停車場の木戸を打つて、賣切れ申し候といふ、札を出す處だつた。生靈を乘せた所爲か、何

も、あゝ、凄いほど美しいと思つて悚然としたから病みついたのでもあるまいけれど、日が暮れて、其ン時月ケ岡から歸り路、寒氣がしたのがぶりつきで、つひぞない瘧で寢て居たもんだから、今夜はじめてお目にかゝるやうなわけだけれど、月ケ岡の老人二人ね、海軍役所の旦的、其の奥さんね、これへ今の兩名で、一幕御覽に入れますだ、チヨン〳〵、」と筑松口拍子。

住居之段

十一

「東西！東西！　えゝ、秋草山の月ケ岡住居之段、役者役割、東西！　村の若い衆、彼處の内は姓は何といふね。」

「月ケ岡の草分だあから、矢張、其の月岡だあよ。」

「おつと可しか、一、若旦那、月岡數夫、一、お嬢樣お靜、をかしいな、娘も變だ、一體私は素人ぢやあるまいと思ふが、何も褄を取つて居るわけぢやない、女房お靜も些と色氣がねえ、恁うと、まゝよ、立女形として置け、東西！

一、若旦那　月岡數夫

一、いろをんな　お靜

一、數夫の父　正左衛門

一、おなじく　數夫の母

一、海軍役人　駒田保

これが敵役で、あとがお待かねの勇みだ。

一、停車場車夫　筑松

最う一枚女形が入用だけれど、名が分らない。駒田さんの彼の派手造の奥さんだ。」といひかけて筑松は調子を張り、

「相勤めまするは竹本筑松。」

「筑さん、役者に竹本はをかしいねえ。」

「ぢやあ澤村筑松。」

「ひやあ！　こうれ、遠からん者は竹法螺の音にも聞け、近からば寄つて墓の目にも見さい、曾我の十郎澤村の筑松だあとよ、はあ、おもしれえ〳〵。」と作男は上機嫌。

「さて、幕が明くと、今いつた名のり合だ、別嬪はすぐに車から飛下りたワ、まあ！とばかりでお前。

私アね、こりや二人で抱きつくだらうとぎよッとした。何其處は綺麗なもんさ。しばらく、といふと向うでも、しばらく、ッたッ切。

しばらく、顏を見合せて、しばらく默で、しばらくよ。

藥は何も、茶碗についで、頂いて飲むとは限らねえと見えて、然うやつてる內に、ぱッと恁う、血の色がさして、活返つたやうに元氣づいたがね。

數夫さん、內は何處なのッて、尋ねると、直其處だ、といつて、直ぐに彼のだら〳〵のぼりの小高い處に別莊造りの新しいのと、茅葺の古い家と二軒、日あたりの稻田を前にして、背後へ秋草山の蔭を背負つたのが見えます。

其をね、恁う指をしながら、お坊ちやん、何處かで道草をした歸途と見えて、萩の枝を二三本、右方の手に持つて、居なすつた。可い姿だつたけれど、暮方の所爲か、又あの邊は此處等町方より十日ばかり秋が疾いから、何だか、もの寂しさうな風が、私の目にも見えた位さ。

姐さんは、涼傘を杖にせい〳〵呼吸を切りながら、自分の事は言はねえで、何かなすつたのッて、また尋ねるとね。

內は大變なんだ、私は困つちまふッて、若旦那大ふさぎ。

はゝあ、世間が許さぬといふわけで、親御達の手前、恁うやつて、遙々尋ねて來た者を內へ入

れる次第にや行かないと言ふ事だらう。いや、こりや何うも然うありさうな事だと、一からのみ込んだが、大違ひ。

それ、今いつた別莊づくりの新家と最う一軒の母家の方ね、彼處を、ほら、自轉車の旦的だ、海軍役所へ通ふ駒田さんが借りてるだらう。相勤めまするは矢張私だけれど、こりや敵役だ。

奧さんと女中を一人使つて、たしか三人ぐらしだつけね、おう、若衆。」

「はあ、然うでがす。華族樣に親類があるとやらで、えら、頭の高え奧樣だあ。其の癖、おしやらくのウ見るやうに、白粉をベッたりの、びらしやらと赤い褌よう引ずるだアね。」

筑松は膝を打つて、

「むゝ、其よ、相勤めまする役者、矢張澤村筑松だ。」

十二

「話の樣子では、何でも其の、白粉の花見たやうな、奧さんが、新家の數夫さんに氣があるんだね。何、こりや其の時、數夫さんが自分の口から言つたこッちやないけれど、何でも行がかりが其に違ひねえ。」

「違えねえ、違えねえよ。私は彼處へも商に行くが、腰つきから、物のいつぷり、第一あの、色

白で油づいて、額のてら〳〵とする處が合點しねえ、不義をする人相だ。怪しからんことさ。又無理もねえよ、彼の、髯むくぢやらとお坊ちやんを、隣同士に見較べた日にや、一方はお月様の中で、杵を持つて立つて居ようといふ姿だし、一人は牛部屋と合借家で、魚の腸を掻き廻さうといふ風だ。近い處がお縫さんの目が曇らぬ鏡よ。ねえ、姐え、お前さんだツて不義をするだらう。牛を馬に乗り換へるといふが、豚と兎を取かへる一件だが、何うだね。」

「些と母様の前では御挨拶をいたしかねます。」とお縫は澄ます。

さすがに母親が、

「馬鹿なことおいひでない。」

「待ちねえ、串戯ぢやあねえ、なるほどお前、それぢや鰹が泳ぎ出す夢を見兼ねねえ。恐しく氣が疾いな、誰もくツついたとも何とも言やあしない、唯氣があるんだといふだけのことさ。

其處でソレ隣だから、何の彼のと世話をやく、旦的が又勤人で、一日留守にするといふもんだから、奥方は其の緋縮緬をお引きずりで、庭づたひに、敷夫さん、敷夫さんとやる一件だ。

机に向つてる緣側へ、くの字なりの厭味たつぷり、手風琴で、アイ、ラブ、ユウさ。此方が其の氣更になしで、オーライと來ねえもんだから、先づ年よりを手なづける氣で、お惣菜が出來ましたからと、それね、あぶらの浮いた鳴燒なぞを御持參で、駒田が留守で寂しいんですから、此

方で御一所に、なぞといふ寸法。

其の晩も、些とお飯には疾いが、お爺さん、お婆さん、こんなものを拵へましたから、御一所に食べたうございますね、お年よりが胡瓜揉なんぞ毒ですよ、此の鷄卵燒を、」

「筑さん、大層委しいぢやないか。」

「まあさ、其處らだらうてことさ、鷄卵燒なんぞ拵へさうな對手だからよ。」

「うむ、拵へる、鷄卵燒もな、恁う捻パンの形にして、茶ツ葉と肉をこま切に交ぜた奴よ、屹と拵へる、私なんぞ魚を持つて行くと、フライにするツてな、あくる日は屹と、昨日の魚はフライにしたが、不味かツた〳〵と恁うよ。恁う旨いも不味いもあつたもんぢやねえ。フライ、と言ふのはな、體の可い天麩羅だぜ。串戯ぢやねえ、得てフライがる奴に魚の味の分るのは少いぜ、フライ〳〵フライ！　水變じて墨となる、十錢銀貨燒棄の掛聲が呆れらあ、此間、些とごみに醉つた、溜の鮒を持つて行つた、安いもの好の新いものずき、鮒はお前、其こそ活きてるから、御臺所御機嫌斜ならず、フライにするつさ。あくる日行つて如何でございましたッて聞くとな、新しいから旨いつてよ。今度一番、鰌をお目にかけて、其の時は後學のために、お手許拜見とやつて御馳走になつて見ようと思ふ、鰌の天麩羅さ。」

「如何なこつても、ほゝゝほゝ。」

「はゝゝはゝ、まあそんなものよ。處で、」
「何うしたの。」
「ト先づ取入つて、年寄たちと取膳で、晩の御飯を食べてる處へ、旦那様お歸だ。處がね、御自慢の自轉車だから、横づけにしても音がしまい。
髯の方ぢや、いくらか氣振を覺つて、其の下心があつたものか、戸外から様子を見て、突然躍込んだと言ふ寸法らしいや。數夫さんの話も、そんな風だし、私が聞いても然う思つた。」

十三

「夏のことなり開放し、逃げるも引くもあらばこそ、お茶をかけて持つてた處を、突然引摺倒しでもしたさうで、茶碗が一つ引くりかへつて、數夫さんが見なすつた時は、其處等お飯だらけ、此方はソレ數夫さん數夫さんが堪らないから、向うの池子山へ上つて、ぶら〳〵して、晩方内へ歸つて來なさると、恐しい高聲。
隣家の主人の聲だから、見えないやうにして、密と出格子から覗いたんだとさ。
先方は血眼だ、腕まくりで眞中に打すわりの、ヤイふんぞりめ、おのれ、主人の歸る時分時も構はないで、此の狀は何だ、其分に置く奴でない、覺悟しろッさ。

奥方は俯向になつて、ゆすり泣をして居ると、年寄は平あやまり、お婆さんなんざ、おろ〳〵立場を失つて居るといふ始末。これはと思つて飛込まうとしなさる時、姦婦！　さあ數夫の青二才は何處へ逃げた、出せ。二人ともふん縛つて煙硝の匂を嗅がせて遣ると、泡をふいてら、」
「亂暴だ。」
「ひやあ、これ那様騒があつたかね、えれいこツた。」
「まあ、聞きねえ、だもんだから、何、まさか面と向つちや、男と男、いくら暴れたツて指一本さしはしまいと、思ひなすつたさうだけれど、事が面倒だから入るには入られず、然うかと言つて立迷つて居るのを先方が見附ければ跋が惡し、引返して、其の地藏様の前の處まで來なすつたんださうさ。外聞が惡くッて近所の百姓家へ中裁も頼まれず、年寄に氣を揉ませるのも不孝なりと、弱つて居なすつた處だ、――とかいつまんで、お話だ。……
成程それか、大聲が聞えらあ。いや、一通りならず吼り立つて居たと見える。
でね、丁度可い處へ來てくれた。お前一ッ工夫はないか、私も實は弱つたッて、意氣地がねえと云やそれまでだけれど、内氣な方だ、お氣の毒な、大に打てて居なさらあ。
姐さんがね。
（あの、其の御夫婦は、いつも仲が惡いんですか、）と落着いて聞く奴さ。

旦的はアノ柄で月琴を彈くとね、時々手風琴と合せるさうだが、眞實か。」
「やるでがす、はあ旨いもんだ、此の節ぢや、村ではやる改良劍舞の、滑稽唄を覺えて、コラサノサ、ドツコイサなあんてね、聞かせるでがすよ。」
「其だ。
數夫さんが、いつも合奏ものなんぞをして、仲が可いんだと、話すとね。
（大方然うでせう、お髯さんが、やツかんで、心にもないことをいつて怒るんでせうから、人の見る前で打つたツて叩いたツて、引摺つてでも内さへ歸つて行きや、何でもないんです、打棄つてお置きなさい、靜まるまで此處で一服しようぢやありませんか、若い衆さん、あの、早附木を持つちや居ませんか。）
恁う私にいふんでさ。
數夫さんがね、
（飛んでもない、然う悠々して居られるもんか、賴むから、老人の身にもなつて御覽）と、型なしだ。（然うねえ、お爺さんやお婆さんが氣をお揉みなすつちやお可哀相だ、眞個にあなたはこんな事にかけると仕樣がないよ。
私も先のやうぢやないんです、餘所の人と口を利くと、最う打倒れさうに頭痛がするんだけれ

ど、何うにかして上げませう）ツて。
全く、それ、日向を私が危險がつた位に窶れて居るんだからね、これで何うしてと思ふのに、些とも騷がないで、つむりが重さう。涼傘をつきながら、片手に藥瓶を持つたまゝ、徐々さきへ立つて、彼處をたら〳〵と上つて行くと、數夫さんが其のうしろへ。――私は見たさも見たし、俥を曳寄せて置いて、革鞄を持つて、おともさね。」

十四

「そこで新家の門口だ。お婆さんは跣足で土間に立つて、曲つた腰も据らねえで、お前、手を上げて宙を拜むやうにして抑へて居るとね。
（退け！　蹴飛ばすぞ、こら、己の妻を己が連れて歸るに、何を留める、其とも何か、不義でも汝が兒が可愛いんで、惚れた此奴まで可愛いなら、待て、今、處置をしたあとの、體だけ返して遣る。）ツて、隊長、奥方の手を鷲掴みにして、土間へしよ引き出さうとしてる處よ。奥方は、身體半分沓脫の上へ宙に釣られて、大圓髷の根が、引掴めえられた手の肩も拔けさうな腕の處へ、がツくり恁う潰れてな、眞蒼になつて顏をしかめてよ、取亂した體で、疊のへりを、足でばたばたとやつて、柱にしがみついて居た處だ。何の事はねえ其の白粉の花を、根こぎにして引摺つた

といふ形。

お爺さんは火鉢の處に投首をして、蹲まツて居なすつたツけが、見兼ねてよろ〳〵と出て、(まあ、旦那様)と、皺だらけな手をぶる〳〵震はしながら、袖へ縋んなすつたのを、ものをもいはねえで、向うへ突飛ばしたから、尻餅だ。(駒田さん亂暴です)ツて、數夫さんがずつと土間へ入ると、(何を。)……と睨みつけた。

髯の顔色、拳を握んだ、あの手で胸板を突かれた日にや、一たまりもあるめえと、此處で何よ、澤村筑松本役よ。」

「何うした、若旦那の加勢をして、髯の足へでも喰ひついたか。

「いンえ。」

「目潰しの泥でもハア打かけたんべい。」

「いンえ。」

「筑さん何うしたの。」

「私あサソクだ、倒れて怪我をなさると惡いと思つたからね、土間を入つた右ツ手に、一寸下駄でも入れて置かうといふ、半間の物置があるがね、其のお前、開戸の立てつけが惡いと見えて、澤庵石が壓へに置いてあツたから、突然片手で引摑んで、ポンと木戸の外へ拋り出した。」

「成程本役だ。」

筑松も打笑ひ、

「其處へ姐さんが入んなすつた。

(何をなさるのよ)ツて、其ン時、摑み附きさうだつた髯の前へ、數夫さんを背後へ庇つて、靜に立つたと思ひねえ。

あまり目覺しい美しさに、旦的はきよとんとし、しばらく默つて居たツけがね。何だ、き様ツて云ひながら、大の字形にはだかツて居たのが、棒立になつて了つたあ。

(まあ、お放しなさいよ、酷いわねえ)と、澄まして、奴が奥方を引摑んだ手を持添へて、掙放すと、……へむ、放します。

(お初に、私は彼の數夫さんの女房でございます。)といひながら、藥瓶の包を落すやうに疊に置いて、ばツたり上框へ腰を落して、こゝで切なさうに呼吸をつくと、また顔の色が惡くなつた。

それでも、ひらりと茶の間へ上つて、(お父さんお危うございますよ。)ツて、お爺さんの傍へ坐つたと思ひねえよ。

奥方は放されて身體を横に、其のまゝべた〳〵と摺り退いて、髷をがツくりと遣つたまゝ、くひしばつて、しく〳〵泣。

お婆さんは二人が入つたのを見ると、身をかはして戸外へ出て、木戸につかまつて呆れ顔をして、内の様子を覗いて居なさら。

其の背後境の垣根越に、駒田の下婢どんが、うろ〳〵して居るといふ次第だ。

姐さんがね、袖を返して袂ン中から、紅い小さな珠で留めて、細打の紐にわがねて持つてた手拭を出して、立つて框から、突立つた髯に身を寄せながら、

（アイ、お母さんのお御足を。）といふと、數夫さんが受取つて、砂を拂つてあげる奴さ。

私もぐツと氣を利かして、へい、お穿きなさいで以つて、今脱いだ姐さんの籐表の後齒といふのを、敷居際でお婆さんの足許へ揃へましたね。

彦次、やい、手前なんざ、氣が付くめえ、不斷心がけがあると違つたもんだ、阿母、私あ此の通り孝行だぜ。」

十五

「さて、一同舞臺正面を横に見て、姐さんを輪形に取卷いた、こゝで髯の口からいざこざ澤山、いや、いふも可煩え、不義一件の混雑だ。

姐さんがお前、呼吸苦しさうに笑つてな。

（もし、數夫さんにや、こんな佳い女房があるんですから、人様のものなんか、意地汚なはいたしません、御心配遊ばすことはないんです。）サ、何うだ、聞えた理窟だらう。

此方あ虎髯をむず〳〵さして、（き様、女房だ、女房だといふが、些と亭主に氣を注けろ、見て居ない留守の事が分るもんか。）と遣るとね。

（三年一所に居ないたつて、大丈夫、浮氣をするかしないか見極めない位なら、はじめから良人にはしません。）ツさ。

此奴、耳が痛からうぢやねえか。

（其も私が見ても氣が揉めるやうな方なら知らず、よく良人の氣を知つて居ますが、此の奥さんのやうな柄の方は、嫌なんです。第一あなた、御自分の持ちものだから、人が取らうかなんて自惚れて在らつしやるけれど、掏摸が見たつても、欲しがるほどの玉ぢやないわ。）ツて然う云つてね、仰向いて目を瞑つて罎の口から藥を一口。

此時は旦よりか、奥方の、じろりと見た目が、恐しく凄かつた。

すツくり立つと、蹈みしだいて、前へのめらうとした裙を蹴て、ばら〳〵と土間へ下りて、（私はもう、）と金切聲。

（こら！　何うするか汝、何處へ行くかッ。）といふのを機かけに、髯もどか〳〵と出て、追ひか

けたがね、沼田の沼へでも駈け出すかと思ふと、自分の内へ飛込んだんでさ。詰らないのは垣根に立つて居た下婢どんで、（畜生、何を見て居やがるんだい。）ツて、奥方が癇癪紛れ、駈出しざまに平手で一ツ、ぴツしやりと啖はしたらう。

わツと喚いて泣く處を、馬鹿ツてえと、髯が、やり場を失つた握拳で突飛ばしたもんだから、いや可哀相に、どツしりと轉つた。」

「おや〳〵氣の毒な。」

「若い衆、お前の情郎ぢやねえか、それだと默つちや居られねえ處だ。」

「なにハア、可い氣味でがさ。」

「さては振られたな。」

「はゝゝはゝ、月ケ岡ぢやよく振られるぜ、駒田の白粉の花をはじめとし、若い衆お前もかね、私もかへり路に五丁畷で一降浴びた。日が暮れた時分よ、もツと後を見て居たかつたけれど、立つて居る幕ぢやねえから、革鞄を差置いてね、ハイ、お荷物はこれへ置きます、何うもおめでたうございますツて、言つたら、御苦勞樣つて、駄賃の外にお手づから二貫文。

變にはじめツから寒氣のして居た處へ、雨をくらツて、ソレ五日ばかり寢たと言ふもんだが、實はね、あとは何うなつたらうと思つたに、お睦くツて結構だ。何しろ顏色がよくおなんなすつ

て、私も蔭ながら嬉しいや。

しかし誰も自分が惡いと思ふものは無えから、長い間の事た、駒田の徒に怨まれなさらねえけりや可いが、役人風を吹かして、町から村へ一杯の肩幅だからね、些と面倒よ。若い衆さん、何ぞ、いざこざのあるやうな樣子はねえか。」

「はあ、何にもそんねえな氣ぶりはねえね、混雜は藪ん中へ伏せたと見えて、誰も村の者は知んねえでがすが、大方何だんべい、仲なほりが出來たんべい。昨日も一昨日も相かはらず、隣同士行交をして居なさるだ、先の中よりか、却つて何よ、旦那の方が役所から歸ると、月ケ岡の内へ遊びに行くやうだがね、雨降つて地イ固るだ。ものの、字が分りさうな人は彼ん達二人だで、仲好くしなさるが可いでがす。」

作男も眞面目になる。

彦次はしばらく考へ、

「はてな。」

朝戸出

十六

「些と、しかし考へもんだぜ、今の話の様子だと、なかで第一詰らないのは駒田の奥さん、其の白粉の花だ。

敷夫さんには振つけられる、痛い思ひはする、其の上道ならねえこつてもお前、惚れた男の前で、小酷く恥を掻かされちや、條違ひでも怨まずには居られまい。

男と男は薩張して、解ける時は解けるものの、女同士ぢや然うは行かねえ。

道理こそ、駒田の奥さんは、新家の姐さんに變な素振をすらあ。」

「どんな風だ、お前見たか。」

「見た、其が何だ、先刻彼の御祝儀が出た一件の時よ。

一昨々日の晩だつけな、今年はよく降るが、夏へ入つても一番といふ大雨だつたのは。然うか、然うすると一昨日の朝だ。あの、恐しい雨は、お前、降つて降つて降り拔いて、あけ方三時頃にはからりと星空になつたい。風は好し、一地引、上つたのが、丸鰺よ。澤山はなかつたが、ざツ

と濱近を廻つて、直ぐに月ケ岡まで伸したもんだ。

大降でお前、皆な洗ひ浚ひ泥を流したもんだから、何時も泣かせられる五丁畷なんざ、ヒヤヒヤ可い心持で一ツ飛。

新家へ行くと、若い人達が閉め忘れたと見えて、木戸は八文字に内の方へ開いて居ら。

格子戸は錠が下りて居た、まだ、疾いんだからな、靄が一面、庭にや朝顔がしつとりと咲いて居た。竹垣の圍内だけは新しく地ならしをしたと見えて、其の瑠璃色の花ばかり、草一ツ葉生えちや居ねえけれど、ぐるりと取まはして山の名だけに秋草が一面だ、綺麗ッたらないぜ。

魚屋でございと、二聲ばかり呼んだ返事がねえや。其處で何の氣なしに、雨戸の隙間から覗いて見た。

「馬鹿、覗いたか。」と筑松穩ならぬ顏をする。

「可いぢやあねえか、生物を商ふだ、何時までも立つちや居られねえ、と先づ汝を極めつけて置いてよ。

實は心配でならなかつた、それ、此の町は龍宮へ降り埋められるかと思ふほどの雨だつたらう。此方人等さへ戸外へ出て、星を見た時は嬉しかつた、路で濡佛の顏を拜んでも、いや、御無事で と言ひたかつたわ。

隣はあるたッて、一軒家同様。殊にな、夏場海水浴のお客を目あてに、そら強盗ものが横行するだ、ちら〳〵方々で物騒な話を聞いてる矢先だから。

と片目をつぶると中が見えたが、戸外は靄で、座敷は未だ眞ッ暗だ。

すると蚊帳が二張。

しをらしいぢやねえか、ちら〳〵ちら〳〵と未だ光が殘つて、蚊帳の裾だの鴨居の邊りに見えたのは螢だい、どしや降を凌ぎかねて立てこんだもんだらう。

けれども、其の時はそれも氣がかりだ、構はずドン〳〵と叩くとな、はいと返事をしたのが別嬪だ。

威勢よく、魚屋でございと呼ぶと、今明けますよッて、しばらくして、蚊帳をからんで、ト膝をついて、それから茶の間を通つて、土間へ下りて、急いで戸を開けて出なすつたがね。

腫ぼッたい目で、お早うッさ、銀杏返がばさ〳〵して、お前、何だらうぢやねえか、寢亂れ姿と言ふんだらうぢやないか。」

筑松は娘を見返り、

「姐さん、餘り身を入れて聞きッこなし。」

「大丈夫、繻子の帶をキチンとしめて居ましたぜ。」

お縫が、

「當前さ。」

十七

彦次はかぶりを振つて、

「處がお隣のは然うでねえ。丁度、其のトタンに木戸の處を通つたがね、緣側の戸が一枚開いて居たから、ずつと朝晴れに一運動といふ氣取だらう、白粉よれのした、襟のくねつた、寢衣の浴衣に桃色の扱帶をだらりと結んで、大髻の束髮だ。」

「彦さん、束髮に大髻はをかしいねえ。」

母親も口を入れ、

「それぢや毛の薄い私のなんざ、チョン髷の鬢と言はなけりやならないなう。」

「大きに、いや、それでは大づかみの束髮か、何うも娼妓のやうな其の風ッたら無かつたぜ、然もお前、大儀さうに褄さきを蹴つて歩行だ。

お早うッて、別嬪が如才なく聲をかけたがね、默つて居ら。

再度、もし、奥さんお早うございますッさ。

なるほど表向仲直りはしたらうよ、腹藏のねえ挨拶振だア、其を何と、あいとも云はず、振向きもしねえで、しよた〳〵雨戸の中へお引込み。

およしなさい、お早うも何もあつたもんぢやねえッて、私はね、姐さんに低聲で然ういつた。胸氣ぢやあねえか、何ぼ、頭が高いたッて、何さ、彼の奥さんのは頭が高いんぢやねえ、髷が大いんだい、處置ぶりが氣にくはねえ。

先刻のは此時の話だ、鰺はいくらだと聞きなさる。

阿母の前だがね、私は人を見て掛値なんざ云ひません。」

「分つたよ〳〵。」

「十で十五錢頂きますッたら、高いッてよ、さあ、此處で一ッ假色だ、賴むよ。」

「遣るべいかね、ひやあ、これ！　遠からんものは竹法螺の音にも聞け、近からば寄つて蓋の目にも見さい。」

「曾我のぢやねえ、鰺の値をつける處だ、お縫さん一ッやんねえな。」

娘は褄先を括枕のやうな兩膝に挾んで、蹲んだまゝ、團扇を半面にかざして、仰向く姿勢で、

「些とお負けなねえ。」

喝采々々。

「此の子は。」と母親苦笑ひ。

「何しろ十五ばかりおくんな、といふから、蓋を引くりかへして一、一、一さ、其奴を持つていそいそ臺所へ入んなすつたッけ。

火鉢の引出をがた〳〵とね、蓋と一所に持つて出て、アイお代。

見るとそら小銀貨が一ッだらう。十ヲで十五錢、可しかね、掛値のねえ處をお前、十五で、十錢は酷からう。

もし、是は、と云ふと、(可いよ、おまけな。)とおいでなすつた、こりや酷い、といふ內に、すッたすッた入つちまひなさるから、嬢さん、不可ませんと、私も土間まで入ると、遁げるやうにして、臺所の前で、背向きに坐ッちまつて、(澤山よ。)とある御意だと思へ。

其の肩を搖ぶつて、拗ねたといふ工合なんてものはなかつたい。まるでお姫樣だから下郎、ねえ、ねえ、としりごみだ。

言を返すも恐れ多いやうな氣がして、意氣地はねえ、其のまゝ、引返したが、隣家へは、癪だから聲を懸けず。

田圃路へかゝつても、をかしいやうな、擽つたいやうな、馬鹿々々しいやうな、然うかと思ふと嬉しいやうな、難有いやうな、變な心持がして、獨りでにニヤリ〳〵、何時か足取も遲くなつ

て、又ニヤリさ。

こりや不可えと、思ふ内に、矢張ニヤリと笑ひやあがら、呀！　こりやならぬ、と、うんと氣を入れると、すぐに下腹から、ニヤ殿がおいでなさる。自然天然妙希烈だ、吃逆のやうで止まらねえ、口の端を抓るとの、其が又ひとりでに可笑しくなつて、了ひにや我ながら情ない、聲に出て、へゝゝゝゝ。」

一同、吻々々々吻。

田舍唄

十八

「まるで魅まれた鹽梅だね。魅まれたといや、正のもの、自分で此の腕へ喰ひついて見た一件が未だ其の他にあるんだぜ。

何だといふと、其のお前、ニヤリ〳〵で我ながら變だから、待て、こりや一合呷りつけて出かけようと、朝ッから不料簡を起して、商歸りに何時も寄るだ。あの、月ケ岡を向うへ出はづれの、汚い荒物屋兼帶といふ一軒茶屋だ。狸が化けたやうな爺さんが、獨りで商ひをして居る内よ。

今日は、か何かで、ズッと入ると、奥行も何にもねえや、素麵箱へ古莫蓙を切張にした奴に腰をかけて、燒酎を一合、とやると、驚いたい、數夫さんの御兩親だ。正左衛門さん御夫婦がお前、さしむかひで居るだらうぢやあねえか。尤とも四五日降續いた不漁で、彼處等は廻らなかつたけれど、餘り變つてら、然もお前、其の人達の嫁御、嫁といふでもあるめえが、數夫さんの情婦見たやうなもんだから、先づ其の嫁さんにやられて、ニヤ〳〵の次第なんだらうぢやあねえか、全く腕を嚙んで見たぜ。」

「よく魅かされる男だな、鯉の泳いだ夢なんぞも、何うかといや、矢張其の魅まれの方に近いんだ。」

「そりや魂消たんべい、あの茶屋の爺さんは何も狸の化けたのぢやないで、相生寺の隱居和尙どのが、剽輕な人で、還俗をしてはじめたゞ。何が其の剽輕ものだで、此中、急に氣が變つて、諸國行脚に出てえだから、店を讓るちうのを、正左衛門さんが引請けたあだよ。難有いこんだ、嫁樣が出來たで、年寄が居ては、氣詰りだんべいと、はあ、其處で新家を明け渡したものでがな。」

「何、それぢや新家には若い人切か。」

「いンね、行ッ切といふでねえ、行ッたり來たりだあ、大抵夜になれば歸るだがね、雨でもひどけりや荒物屋に泊るでがす、それだッて狹いから、年寄たちは二人とも新家をあけることは滅多

にねえだよ。」
「そんなら可いが、串戯はよして不用心よ。餘計なお世話だが、ねえ、姐え。」
「知らないよ。」
「それから升で遣りながら、鰺を十五の話をすると、お爺さんは大笑ひ、お婆さんまでがほくほくもので、可愛い娘ぢや、お前さんには氣の毒だツて足りず前を、賣溜の中からばら錢で出しなさら。飛んでもねえ、不足を言つたんぢや夢さらねえんで、實に世帶氣が出なすつて、おめでたい事てすと、平にあやまると、此方も祝の氣で進ぜるツてな、去年、田地田畑を賣ンなすつたが、何うして未だ御大氣なもんだ、其の足りずまへを下すつた上に、燒酎一合先方さまで御馳走よ。」
筑松はづイと立つて、背後から一ツ魚屋の背中を撲はし、
「可い加減にしねえか、それぢや代濟だものを、然も御馳走になつた上に、先刻の御祝儀は何うだ、三重取にせしめてやあがる、太え奴！」
「酷いことねえ。」
彦次は落着き拂ひ、
「其處は私だ、唯取にするもんか。ちやんと心得があるんだい。先づ、御祝儀とあるから、仔細は言はねえで、難有く頂いたと、魚は總了ひとなつたから、今夜一番、八幡樣まで、見物に出か

けるといふ胸算だ。
處で、新家は路だから、行きがけに寄るつもりよ。其處で見ねえ、向うの土間に梨と一所に馬に積んで持つた來た、本場の南瓜が、お膝送りといふ身で、いかいことおはします。
數夫さんが、梨を袂へ入た時、姐さんが、南瓜も買つて行きませうツて、そんなに持てるものかと、叱られたのを御存じだらう。」

十九

「彦さんが氣前を見せて、お土產に持つて行くだ。萬事此の通り氣がつく男だからね、何うも世帶が持てません。一言もあるめえ。」
と鷹揚にぢらりと一同の顏を睨めまはし、北叟笑をして得意顏。
お縫が、
「だつて月ケ岡邊にはいくらも可いのがありさうなもんだね、お饅頭にでもすると可いよ。」
「いンね、魚屋さんの思ひつきが可かんべいよ。村方にや、いくらもあるだし、第一正左衞門樣の畑に出來ただ。すつかり田畑を賣りなさつたで、去年の今年でがす、近處から、おすそ分けしたうても、何かハア面あてがましいで持つていく次第にならねえだ。又向う樣でも賣つてくンろ

とは言ひ惡かんべい、其だで、丁ど可いでがすよ。」
「ソレ見ねえ、お誂へ通りに行かあ、さあ、然う事が極つたら、徐々出掛けるとするだ、時にもう何時だらう。」
母親が踵をめぐらし、雇女が凭り掛つて睡つて居る、柱時計を及腰に視めたが、
「まだ十時打つたばかりさ。」
「夜が長くなつたこと。」お縫も立つ。
「丁度可からう。」
と彦次は仰つけに反るやうにして、顏を出したが、軒下から空を見ると、
「おゝ曇つた、眞白になつたぜ。」
「お星さまが餘りキラ〳〵なさると思つた、降りか不知、」
「大したことはなからうが、どツと來りや素裸だ。」
「私も同士に行きますべい。」
「それぢや阿母、南瓜を。」
筑松唐突に横合から、
「幾つだ。」

「え、」
「唯つた一ツか。」
「……二ツよ。」
「彦さん、三ツにおし、然うすると一錢まけて上るから、丁ど御祝儀だけ、帳面づらが可いよ。」
と娘が人の惡いこと。
「何よ、そりやな、何よ、私だつて天秤を擔いで行くンぢやなし、然うは持てねえ。」
「手傳つて下げて遣るだあよ。」
ぐツとも云はず、天窓を撫でた。
「思ひ切つて然んなら然うか、結へて下げるやうにして吳んねえよ。」
「こうれ、然う兩手では草臥れるで、お前さあ一ツ持たつせえ、私が二つ持つてやるべい。」
唯見る沙悟淨の髑髏にあらず、神女の瓔珞にあらず、狂人の笹にあらず、南瓜を結んで振分けにした繩からげの眞中へ、鼻毛の長い顏を出した。
「いよ、どツこいしよと、恁うするだ。」
「似合つた、似合つた。」
「はあ、似合つたッべい、一番此の思ひつきで、八幡樣で踊るかい、あら、ドツコイサノサ、ド

ツコイサ。」

作男は腰を捻つて、ひよいと、チン〳〵の手つきをする。喝采々〳〵。

すぐ其の腰を左右に振つて、トントン〳〵と出て、一足退ると、ばッさり、兩手を柳に流して、

「チョツクラチョイト、あら、ドツコイサノサードツコイサ、」と踊る。

ウタ＝朝に咲き、夕にしをるゝ朝顔さへも、思ひ〳〵の色を持つ＝

「思ひ〳〵のネ、思ひ〳〵の、ちよツくらちよいと色を持つ……はア今晩は、」と摺違つて暗を行く。——

五丁畷を、半ば月ケ岡の方に越した處で、

「誰？　數さん。」

停車場前から歸りがけ、二人ならんで、お靜が手に、鰹の顆仄赤う、提灯を提げたのは數夫である。

二十

「近村の者だらう。」

「おや、大方、八幡樣へ行くんでせう、知つてる人でないのに可笑いよ。」

「此處らでは路で行逢ふと夜なんざなほのこと、皆聲をかけるんだよ、此方でも挨拶をして遣らないと、澄ましてるとか、權高だとか言ふんです。お前なんざ婦人だから餘計に氣をつけて、はい、今晩は、位なことを云つて置かないと憎まれます。」

「アイ。」といつて傍目も觸らず、裳はら〳〵見えがくれ、蹴出の水色涼しさう、提灯のあかりに搦んで、ほの〴〵とある一條路。山と山とが蓑のやうに海濱へ擴がつて、月ケ岡の方に狹くなる、左右は稻田、前後に人も見えず、前途に茫乎と行んだは、村の取着なる瓦を燒く大竈で、黑い坊主が坐つた形。

「大分足早になつた、恐いのかい。」

フト砂道で、音のせぬ下駄を留め、

「數さん、提灯と取かへて下さいな。お魚を、狐が欲しがると厭だから。」

「可し。」

お靜は寄り添ひ、

「さあ、急ぎませう、お晝が晩かつたから、未だお腹は空かないけれど、お魚が食べたくなつた。三枚におろして、中落を煮て、あとは醬油に漬けてさ、片身は刺身にしませうね、庖丁の手際を見せますよ、旨いものよ。」

默つて居る。
「阿母さんも、阿父も、今夜はお留守なんですね、いけないねえ、歸らないつて云つておいでなすつたつけ、あの、荒物屋の方でお泊りなの、」
「否、玄武寺といふのに講があつて、お詣りなすつたんだが、晩くなるからお泊りだよ。方丈とも懇意だから、」
「お寺は何處なんです。」
數夫は左を指して、提げたものを持直し、
「向うの山中さ、お前、然う提灯を差上げちや見えやしない。」
お靜は提灯を背後へ廻した、海を去ること十町餘、町に遠く、山に包まれた、畷の盡きんとする處、頸の白い、洗髪、浴衣の色も鮮やかに描かれた。
透かすと池子山朦朧たり。
「彼處なの、大變だわねえ、まるで雲の中ぢやありませんか。おや〳〵、ぼんやり眞白になつて來た、まあ、曇つたわ、あら、山の裾の方が雪が降つたやうになつたよ、一寸、」
數夫も振仰ぐと、星が隱れて、路は却つて見る目に明るく、恰も銀河が下りて來て、野中へ擴がつたやうである。

「夕立か。」
いふ時、轟々といふ響、稻葉が搖れて飜つて、墨のやうな水田の根から、振ひ出すかと螢がばらばら、消ゆると颯と風の音。——思はず男の手を緊乎と取つて、お靜は露で冷い手に力を籠め、
「雷さま!?」
「何、汽車の音か、」
聞き澄して、
「海が鳴るんだ。」
「あゝ、然う、然ういや先刻、地引を見て居た時分も、浪が荒かつたわねえ。一寸、一寸。」
「忙しいね、何だ。」
「山の裾の白いのがむら〳〵と動いて居ますよ、浪が這つて來たんぢやなくッて、」
「雲が出たんだよ、」
「そんなら可いけれど、彼處へ浪が來ようものなら、阿父さんも阿母さんも歸られなくなつて了ふよ、何だか氣味が惡いねえ。急に夜があけたやうぢやありませんか、二十六夜だのに、未だ月の明ぢやないんですもの、」
「白浪が映るんです、此の邊はね、時々空が海の色と同一になるよ。」

二十一

「あゝ、吃驚した、私、」
「一々何の事たね、默つてお歩行き、見つともない、摑まつてりや澤山です。」
「だつて、だツたツて私は、」とお靜は呼吸をはずませながら、物好に振向いた。
「恐いから一生懸命に歩行いてるのに、いけすかない畜生だよ。」
「犬も何にも歩行きやしない。」
と齊しく見向くと、莞爾して、
「否、此の瓦を燒く竈ですよ。何時でも何時でも、人を、威かすんだもの、知つてても吃驚するわ。ぬうと目の前へ突立つてさ、癪に障るッちやない、厭な入道だよ。ヤイ、」と提灯の柄を逆に取つて、此の邊一むら茂つた薄越に、手の屆かない處を突かうとすると、ひやりとした一雫は、葉末の露の散つたのではない。
「何を詰らない眞似をして居るんだ、見たが可い、降つて來た、」
「可くッてよ、濡れたつて浴衣ですもの、ひやッこくッて可い心持だわ。」
故と落着いて、悠々と歩を移す。

「困るな、何も依怙地になることはない。最う一呼吸だ、急げといふのに。」
「厭よ、」と打遣つたやうに云ふ。
「草臥れたか。酷く降つて來ても、お前駈けることは出來ないだらう。」
「卯の年ですもの、飛びますよ。」
「勝手にするが可い。」と振りもぎりさうにすると、入交ひに後れた姿を、慌しく縋りついて、
「不可ません！」
「それ御覽。」
「おや、人が恐がると思つて大層威張るわね、一寸。」
「何だ。」
「こんなことをして歩行くのは、はじめてだわ、滅多にないことなんですもの。」
「滅多にあつた日にや色狂氣だね。」
「ですからさ、雨はふるし、人通りはなし、丁ど土手づたひのやうな路だし、お誂へ通りぢやありませんか、雲脚早き雨空も、ツン、ツル、ツ、ンツ、ツン、テツ、トン、チン〳〵、テン、思ひがけなく吹き霽れて……一ッ打つけて貰ひたいねえ。」
「何がお誂へなものか、それ見な。」といひかけて竈の前を折曲り、薄を拔けて、村の入口、又一

丁場、吹曝へ出たトタン面を洗つて横濺がさツとかゝる。
お靜はさすが婦人の身、髮の濡れるのを厭つたか、頸を雨に打たれながら、横ざまに袖を翳すと、數夫は手疾く麥藁帽の紐を解くより、衝と手に持つた、が我にもあらず婦人の肩に差かけた。
「だから言はないこツちやない、お前手拭は持たないのか。」
「可ござんすよ、もツと降れ〳〵、此間の、あの螢が澤山飛込んだ時のやうに、大雨になれば可いよ。」
と些と激しく云つた。
「えゝ。」
「然うすりや、又あなたの蚊帳へ入るもの。」
「今晩は。」と唐突に、向うから來て通り過ぎた者がある。
稻葉摺に右左、二人は颯と路を開いて、お靜が透さず、
「今晩は、」
「はい、お休みなさいやし。」と生ぬるい野良調子、降にもかまはず、のツさり行過ぎたと思ふと、早や靄に包まれて姿は見えず、中音で、
「あら、どツこいさのサ、どツこいサ、」

「暢氣だことねえ。」
「何方が暢氣だか分りやしない、恁う降つて來ちや、義理にも駈け出さなくつちや形が惡いよ。さあ、一奮發遣つけよう。」
「迎も、」
「置いて行よ、」
「可ござんすとも、」といふ口の下から、ばた〳〵と駈け出して、
「厭よう！　數さん。」

二十二

月ケ岡へ入らうとする稍手前、秋草山の麓に迫つた處が、岸破と缺けて、五六間が間古い一帶の壁の趣がある。並べて横に細長い小家をかけた、唯竹の柱に茅の屋根ばかりなのは、少し離れた前途の、椿の古木の根を潛つて、路を横ぎつて田圃に注ぐ用水の流に沿うて、山の根を十五六間、こゝに石段を築いた上なる、觀世音の御堂大破につき、再建の用材を入れてあるので、纔に廂の出た下へ、若い同士は花やかに駈け込んだ。
「おゝ、切ない。しどいことね、何うも餘程苦しくツてよ、少し休まして下さいな、あなた、濡

れましたか。」
片手で海水帽の雫を切つた、數夫は清らかな腕まくりで、これは脊が高いから、低い廂に背屈をしたが、右手には、鰹を結へて提げて居るから、肩のあたり、胸のあたり、單衣の上へ、頬摺して、
「何大したことはない、お前、何うだ。」
「平氣なものよ、浴衣だから。」
「憚りながら私だつて、着ものを庇ふのではないんです。二人でびしよ〳〵ぢや、外聞が惡いからのこツたよ。」
「何うも相濟みません。」とあでやかに笑つて横を向くと、數夫は憎いと思つたやうすで、
「何しろ此の鰹が荷になつて仕やうがない、此處へ置いて行かうぢやないか。」
お靜は向き直つて、涼しい目をまんじりと顏を見ながら、
「止して下さいよ、勿體ない、あなた串戲ではありません。」
「急に降つて來た工合といひ、何うやら此の魚を狐めが見込んだやうだ。」
「厭ねえ、」と身を震はすと、ばツたり取落す、提灯は口を開いて、蠟燭がちよろりと出る。……消えては大變と、早速に拾ひあげた數夫の手に、ぶら下るやうにして、袂に取着く、黑髮がはら

はらと。
「おゝ、冷い、そらお見、恐しく濡れたぢやないか。」
「雫が垂つて氣味が惡いの、」
「其上そんなに恐がりの癖に、何だつて負けない口を利くだらう。最う可し、可し、何の狐なんぞが居て堪るもんか。尤も此邊に澤山居たにや居たんだけれど、横須賀へ行く汽車の音だの、鐵砲の音が聞えるやうになつてから以來は、見ようたつて見られやしない、臆病ッちやありやしないや。」
「だつて驚かされると、出るやうに思ふんですもの、さあ、提灯を持ちませう。」と仰向けに亂れ髮を颯と振つた。
「又大變に降つて來たよ。」
「其の割にや身體にかゝらないが、待ちな、向うが芋畑であらうも知れぬ。」と、ずッと雨の中へ灯を向けて、唯見ると、百姓家の外圍、路より少々高い位、二坪ばかりの夕顏棚、雨は其處にのみ篠突く如し。
「成るほど。」
「光秀が出る處よ。」

數夫はこれには答へないで、今夕顏棚を透かさうとして、廂から半身を出したまゝ、一足外へ出て、四邊を瞪して、背を捻ぢるやうにして、小屋の屋根越に觀音堂の方を見た。

「さあ、お寄越しなさいよ。」と手を差伸べると、心すともなく背後へ廻して、お靜を暗うしなかつた、情らしい提灯を、此方へ取ると、忘れたやうに、默つて放して、何としたか、一所に持つて居た海水帽さへ、ハタと雨の中へ落したのである。

「何うせ內へ行つて絞るんですもの、貴方が着ておいでなさいな。」

尙ほものも云はないで、彳んで空を仰いで居た。

蟹の怪

二十三

お靜は何の氣も着かず、

「何うしたんです、だらしがないわねえ、ヨ」

といふ大人びた、快活な、老實やかな、其の癖焦つたさうな懸聲で、腰を雨溜の地に低うして、やがて、片端を取つて其の半ばを引揚げながら、

「紐が泥だらけぢやありませんか。」

と何心なくフと提灯の灯に透かすと、帽子の下に伏せられて、右行せず且つ左行せず、濡色の美しい蟹が一個。

「おゝ。」と背後へしさりざまに、お靜は反るやうにして衝と立つ。

恁うと期して威してさへ、其の恐れ方に、驚くやう馴らされた數夫は、これにハッとして、心付いて面を合せる、二人の中を、蟹は其の鐵小實の脛當をサソクに横に引いて暗い方へ颯と隱れた。

惟ふにこれは、恁る雨夜を、しのび歩行きの葉武者であらう。

一體彼の觀世音の御堂の下なる古椿が、些細小川に根を洗はれて、土の中に黑く朽目を顯した洞の中に、鎧の袖を搖り合せて、二ツ、三ツ、時に四ツばかり、待伏をするのは斥候で、それより前途、月ケ岡の方まで、まだ先鋒を進めぬけれども、下の方、五丁畷へ斷續して、五騎、七騎、此處彼處、地の窪める處、水の淺き處、轡を揃へて、陣を張る。此の單陣は縱横の陣に次いで、一陣は町の方へ、一陣は海の方へ、末廣がりに數を增して、五里、三里、七里にはびこる大網颯と打つたる如く、然も軍勢手戈を揃へて、其の數網の目よりも多く、秋草、(山名)池子(山名)を捲き落す秋の木の葉に異ならず。萌黃、緋縅、雜鎧、黑革縅着たるもあり、鋭き兩股の方天戟を

中天に振つて、八足の進退自在なるが、いづれも其丈五寸に滿たず、小さきは山蟻に如かずと雖も、蛇を斬り、蛙を追ひ、百足を殺し、毛蟲を打つ。時には寺の廚を襲うて古猫を驚かし、軒下をおびやかして別莊の門に犬を馳らす。出沒の極まりなきや、梁を渡り、井戸に潛み、石に化し、砂に化し、水に化し、寸隙を潛るかとすれば、大廣間に駈けて出る。

渠等は、恁くして水を奪ひ、渠等は恁くして陸を奪ひ、山を領し、川を領し、樹を擒にし、草を從へ、年々侵略の域を開いて、果は何をするか分らない。

けれども人はこれを恐れぬのである。學生も恐れなければ、婦女子も恐れず、お靜も亦はじめは敢てこれを恐れては居なかつたので。

未だ松蟲の聲も聞かない前、黄昏の濱邊の地引を見ようと、數夫と連立つて月ケ岡を出で、椿を横ぎり、觀世音を拜み、此の小屋の前を通つて、瓦燒く竈を横に折れると、池子、秋草、右左、五丁畷から遙に見ゆる延命寺の石碑について、小橋を渡ると、鎭守の松の森の下は、ハヤ潮風が身に染むばかり。海へ行くのは、停車場の前を横ぎつて、兩側別莊の間を拔け、葭蘆の繁き小川の橋を、最う一つ渡るので、それからの路、しばらく、夜は松蟲の名所となる。……丁ど其の砂地であつた。

お靜が蒼白いと語つた海濱の西洋館の土塀の際から、其の爪先を横切つたのは、一騎、花やか

に鎧うたる緋縅の若武者にて。

二十四

初陣なるべし、其の紅蟹、戰に馴れずと覺しく、

「まあ、美しい、」と言ふあどけない聲の下に、はらりと手巾で壓へられた。

直ぐにお靜は、其の時自分が翳し持つて、夕陽の名殘を遮つて居た、手なる海浴の帽を取つて、裏がへしにすると、若き敵將の囚を入れて、其まゝ手巾を蔽にして、兩手で舁きながら、嬉しさうに、俯向き見つゝ。

濱へ出ると、數夫は最初から恁る他愛のない道草に與せず、先達て早や波打際に影を長く、背姿で行んで、傍に近き地曳網、都人の一團立集ふ前後に、見えつ、隱れつ、幼子がさきに、婦人が次に、壯佼が殿し、脊の高い親仁も交つて、曳哉！曳哉！　沖の小島に足を踏張り、暮れ行く空の秋草山に枕するかの姿して、後退りに曳くかと見れば、呼吸をもつかず、すた〳〵と、入亂れながら足を揃へ、誰彼の鍵縄兩方より、一イ二ウ三イ四ウ入違ひに、綾とり、投かけ、引からめて、綱も弛めず働く狀を、餘念なげに視めて居た。

人目繁ければ傍には寄らずに、お靜は隔たつて後なる方、件の西洋館の塀外に、持舟と見えて

引揚げてあつた、白塗の端艇の舳に腰を休めて、數夫の姿と、地引の狀、打寄する浪、かへる浪、岬を漕ぐ船、沖の雲、畫を見るやうに視めて居たが、内證の樂をといふ顏色、手巾の端を擡げて、一人中を差覗くと、むく〳〵と爪を上げた。

遁してなろかといふ風して、下へ丁と引くとずるりと入る、覗けば、乘り出すので、又振り下すと、入るのを、窺ふと、のッさり這ひ上る。

「えゝ憎らしい。」と箕を振るやうに、邪險に、ばさ〳〵と搖り落して、其まゝ、小走に駈け出した、波打際で呼吸を切つて、

「數夫さん、些ともいふことを聞かないんだもの。打棄つてやれ、畜生！」と、突然逆に取つて帽を返すと、紅蟹は、しばらく鍔の端に留つたが、熟柿のやうにほたりと落ちた。

其のまゝに遁げ去らず、爪を上げて向かつたので、お靜は丁ど筒を拔いて銀煙管を取つて居た、雁首にかけて向うへ飛ばすと、はずみに二つばかり、ころ〳〵と轉けた處へ、波がしらがざぶりと來た。白泡のなかに、其の一片の紅、飜へつて隱れたが、ざッと卷いて返るとともに、一際色濃く甲を見せて、忽ち、兩爪を上げて、じりゝとお靜に差向けると、此方もつか〳〵と前へ進んで、

「生意氣な、」と再び海面へ撥ね飛ばす、見事に轉けたが遠くは去らず、又浪の口が銜へたけれど

も、砂に八ッの足を支へて、二たび方天戟を構へたのである。

三たび目の時は、疾や海の色薄墨を染めたる如く、地曳も黑い影になつて、忙しく燈籠の畫の廻るやう、白く堆き浪打際で、しばらく蟹を見詰たが、急に弱々しくなつて、默つて見て居る數夫の背中へ、袖屏風して身をかくして震へて救ひを求めたのである。お靜はこれあるがために、いたく同類の戰士が、復仇を恐れるやうになつたので。

さればやがて、自分が嘗てなつかしさの思ひに煩ひ、檜物町の抱主さへ、憐んで年を負け、朋輩の手前は落人にして寄越してくれた、數夫と分れねばならないやうになつたのも、お靜は、一度、蟹の怨みゆゑぞと思つたのであつた。

二十五

「詰らないことをいふもんぢやない、そりや一寸の蟲にも五分の魂、酷い目に逢はせれば、小さな蟲だつて腹を立てます。近頃聞きや螢の彼の美しい光が、つかまへると、最う一倍明くなつて見えるのも、腹を立つんだつて言ふぢやないか。

先刻お前が捕へようといつて大騷ぎをした松蟲も、あんな優しい、可愛い蟲だけれど、籠へ入れられて鬚を動かす時は、怒つてるのかも分らない。人間にはそれこそ向つたつてかなはないが、

蟲同士、魚同士、鳥同士ぢや、喧嘩もしたり戰もしたりさ、人が思ふやうに、一概に蟲けらとばかりいふやうなものぢやないよ。

それだもの、それ相應に手ン手が自分の身を守る道具を備へて居て、身體が大切さには、手向ひをしようけれども、そりや最うほんの其の當座ばかりのことで、一寸と遠退きや、其切、何が何だか分るものかね。親子も兄弟もないのを見たッて知れたこッた、怨を殘すの、祟をするのッてことは決して無いんです。

お前は何か、私が唐突に四五年別れるつもりで、奮發をして、餘所へ行くといひ出したのを、蟹の思ひだの、今夜の空模樣と同一で、氣が變つたのといふけれど、何の今更當世らしい、心變だの、浮氣だなんて、そんな暢氣らしい事があるものか。

思ひだの祟だのといふよりも、却つて彼の蟹は、私を敎へてくれた恩人だと思ふ。いゝえ、蟹よりはお前が善智識だと思ふんです。

先刻、あゝやつて、二度も三度も煙管で引掛けて撥飛ばすなんて、亂暴なことをして、あとで恐がつて震へるから、何故そんな邪險なことをすると云つて聞いた時、靜さん。」

いひかけて、石壇の上なる、觀世音の御堂の緣に腰をかけた、數夫は、傍に差うつ向き、喫まうともせず煙管を持つた手を膝に置いて居る、お靜の方に向直つて、

「お前、何といつた、東京から來て月ケ岡へ一所になつてからは、張も意地もなくなつて、ちやきちやきの江戸ッ兒だのに、餘り自分でも筋が拔けたやうだから、と云つたらう。

どんなに胸へこたへたと思ふ、何！　張と意地、男は猶更の事だと、思つて、お前は恐くなつて震へたけれど、私はぞッとするほど身に染みたよ。」と語るだに今もおのづから、數夫は肅然として身を緊むる。

お靜は顏を上げたが、

「氣に障つたら堪忍して下さいな、あなた大丈夫、これから屹と氣をつけて、あんな邪險らしいことはしませんから。いゝえ、屹とまた我まゝな氣でも出して、お父さんやお母さんに、粗相でもしてはと思ふんでせう。私は最う久しく煩つてから、ほんたうですよ、自分でも生れかはつたやうに氣が弱くなつて、踊の稽古を仕込むたッて、下地ッ子を叱る元氣もなくなつて居たんですもの。

何もあなたへお勤めに、音無しくして居るんぢやないんです。前なら、あんな厭な奴、御祝儀に水引をかけて、御紋着で畏つたッて、口も利くんぢやないけれど、最う堅氣だと思ひますから、お隣の髯だつて、内へ來りや大事にするし、奥さんにだつて、此方から機嫌を取るやうにして居るぢやありませんか。此間ッからの約束ですから、私やこれから歸つて、お飯が濟んだら、八幡

様の屋臺へ行つて、あの若い衆に、曾我の顏を拵へて上げるつもりですよ、あなた。」

屹と云つたが、打萎れて、

「私や何うしてそんな氣になつたんです。」と愁然として項を垂れた。

岩井靜馬

二十六

聲を强うして、

「何うだらう、まあ、澤庵に握飯さ。ぱら〳〵蚤が跳ぶ樂屋へ入つて、改良劍舞だか源氏節だか、こんな片田舍のお茶番の後見でもしようといふ氣に、何うしてなつたんだか、御存じ？」と又瞻つた目の裡に、怨あり、涙あり、しかもいふべからざる位があつた。

故あるかな、涼傘さして當流の大師匠なにがしが、横町の舞臺へ通ふ、夕暮の其の七ツ八ツの頃ほひより、踊には天稟の妙を得て、年紀十七の時疾く流儀の免許を得た。岩井靜馬といふ名を其のまゝ、お酌の時から押通して、いかなる座敷を勤むるにも、唯紅燈に蝶の影、綠酒に花の姿のみ、一度も三絃を手に取らなかつたのであるけれども、檜物町の檢番の札、長く三番の下に落

ちず、就中、名題「深山櫻及兼樹振」保名の物狂ひに神を會して、紺泥に銀で秋草の亂れ咲を畫いたる舞扇、衝と疊について片膝を立つる時は、席にあるもの襟を正して、地に立つたるは、いかなる上手も、音〳〵に汗を握りしとかや。

からかひ半分土地のもの、客までも聞覺えて、お師匠さん〳〵と渾名に呼んだのが誠となり、同一桔梗家の暖簾下なる、下地子、お酌どもが、姐さん、おさらひをと言ふのが最初で、五人七人弟子が殖えると、花は姿、蝶は影、翠帳に宿らず、紅閨に留まらず、堅いが評判であつたから、お店の內儀たちが贔屓にしたので、町家の娘も次第に加はり、扇子を胸に裾短な、お洒落な涼傘連、朝は四ツ五ツ打續いて、横町の露地から桔梗家の裏木戸を開け、お師匠さん今日は。母屋から中庭一ツ、お靜が居間は離座敷、暖簾を飾らうとて、抱主が別扱ひで、戸外へは出さず塀の內へ、別に岩井靜馬とし、御神燈を提げさせてあつた。

此の座敷で煩らひついて、氷嚢に括り枕、紫陽花の影次第に薄く、風鈴の風に弱々と呼吸こそ通へ、やがて石燈籠に月の影さして、蟋蟀の鳴く頃はと、醫者も頭を傾けた時、抱主の姐さんが、人を遠ざけて、膝に抱いて、誰も居ないから親だと思つて、胸にあることを聞かしておくれ。

隨分身上のためになつて、小さいが藏も立てたお前のこと、思ひ切つて相談しようと、こゝではじめて知つて、おや〳〵、姿もいつか亂髪と云ふのかい、今時古風な何んのこツた、しかも去

年の櫻時から、然う、そして此頃は旅の空で、そんなら、お前も追つかけて草を敷寢にするが可い。江の島へも行つたもの、裏木戸は自由なり、新橋は直き其處だし、遁げ出しても濟むものを、意地も張もありながら、年期があるから義理が惡いと、それほど主人を思ふなら、何故打明けて云つてはくれぬ。唄の文句はいゝけれど、眞個にそんなやうすでは、氣でもふれたら何うおしだ。こがれ死をさせるまでも、お前のからだで儲けるやうな、情無い私だと、思はれたのが怨めしい、これだつて江戸ッ兒だ。したが他のものの手前がある、私が支度を手傳ふから、氣の向いた時、何時でも可いから、そこを明けて遁げておくれ。但し土産も小使も、目立たぬやうに持たして上げる。やがて龍口寺樣のお會式に參詣る次手、內證で寄つて顏を見ようが、女世帶なり、抱妓は大勢。もしか、內があけられぬと、これでしばらく逢はれまい。久しくお前の踊も見ぬ。靜ちやん一ッお名殘に、おはこの保名を立たないか。——菜種の畑に狂ふ蝶、翼交して羨しいねえ。

直ぐに枕を上げたので、……

實や數夫とは二世の緣、幼い時から、伯父さん伯母さんと、お靜が馴染んで遊びに行つた、隣町に指物屋の名人がある、其が數夫の緣續きで、二階に下宿して居ただけだつたに。

若木の橘

二十七

元來、數夫は、月岡正左衞門、老夫婦の實子ではないのである。

其の月ヶ岡の隣村、沼田の豪農、鳴澤なにがしの二男で、世にいふ四十二の二ッ兒であつた。

物語にも此のことあり、一たび棄てて人に拾はせ、やがて取戻せば不忌といふ、相生寺の隱居、其の頃は未だ當住であつた、說に從ひ、さて棄兒にするのに右から左、譬ひ儀式にせよ、拾ひ人が昨日祝を持つて來た村內の者ではをかし、土地は狹いこと、殊に大百姓、雛鶴も一聲や、瓜番の小屋の親仁まで、初產の屋根を仰いだれば、とわざ〳〵隣村まで親仁どのが抱いて出かけ、去ぬる丙羊の年。二百十日の大あれで、方丈を吹き飛ばし、本堂も損じたが、未だ其の頃は堂守が居た、此の月ヶ岡の觀世音の緣に据ゑて、式の如く小隱れると、此處へ、嬰兒を亡くして泣きに來たのが、これも小村ながら月ヶ岡の長者と呼ばれた、正左衞門の女房で。

一目見るより、わあ！活返つたと半狂亂、すぐに抱き取つて引返す、石段を下までは下させず、もし〳〵と父親が呼び留め、坂の中程で早や取返さうとすると、頭を振つて肯ぜず、喧嘩をすれ

ば、袖の珠の碎けん恐れに、已むを得ず婦人の云ふがまゝに、あとについて、兎も角、其の住居。

まだ新家を設けぬ時分、秋草山の麓なる、丘の上に、一軒家ながら大構で、（近頃は駒田が住居）慇懃なる接待あり。

返せ戻さぬと、女房と、棄子の親。涙出づるまで爭つた三鼎、正左衞門眞中にどッかと坐し、目を瞑つて是非がござらぬ、コレヨ、尋常にお返し申せ。さりながら今度を御緣に以來は御懇に賴み存ずる。仰せにや及ぶべき、御許に差置く分には參らねど、お拾ひ下されし御内儀は、伜のためには命の親。一旦棄てたものなれば、固より手前どもの息子ではなし、正左衞門殿、御夫婦より更めて和子樣頂戴いたすと、子の可愛さは知つた同士。父親も心を察して、泣く〳〵取戻して歸つたが、緣なれば、正左衞門を、名づけ親に賴んだので、子寶多く設けたらば、養子にくれる事もあらうと、心に念じて數夫とつけた。

實の母は、敢て其の四十二の云々に心づかひをしたと言ふでもないが、產後の肥立捗々しからず、殊に乳の出が薄かつた。

七夜の祝に月ケ岡から夫婦來合せ、此の由を聞くと手を拍つて、憚り多いが、もつけの幸ひ、此方は年取つてからの初產なり、親の身さへ憂慮なりじに、肥立は固より、乳の道もよくついて、背戸へ棄つるが流るゝばかり、世帶は鎌倉なる雪の下に、若後家を立てて居る、妹に打まかせて、

お乳母になりと上りたいと、胸を壓して歎いたので、數夫の兩親、顏を見合せ、貰ひ涙にくれたのが、屛風の內外で、打合せて、然らば預け參らすべし。

夫婦は恰も夢心地、田圃道を交る〴〵、手から手へ抱いて歸つた。

やがて母も本復したが、其まゝ連れ戻すも氣の毒らしく、日が經ち月が經ち、年がかはつて、つい五歲の春まで過ぎた。固より其の間、風なく、雨なく、おだやかなる日さへあれば、缺かさず抱いて來て顏を見せもし、三日に上げず見にも行く。近い里に遣つた風で過ぎたのであるが、さてあるべきにあらざれば、再び數夫は實家に歸つた。

三年過ぎて妹が一人出來た。和子二人切の時はともかくも、お三方あれば數夫をと、名も呼捨てにするくらゐ、我兒を取戻す劍幕で、夫婦再三出向いたけれども、鳴澤にてはうべなはず、斷つてと强ふる力もなく、其まゝ再び泣寢入。

たゞ沼田村の空ばかり、二度目の種痘をする時も、醫者の手を引張つて、正衞が自分に出かけたのである。

二十八

五年目に又一人末の弟が出來た、數夫が十三の時であつた。

此度は退ッ引させず、此方も最早や情に迫つて斷り切れなくなつたのであるが、其でも未練のあつたのは可愛いのばかりでない。此の數夫、うまれつき、美人の聞えの高かつた母親に肖て、なほそれより、蒲容柳質の小公子、所謂身替にならざる首、三太長松の亞流でない。

嘗て棄てられたのが月ケ岡で、觀世音にあやかつたと、人も口々にいつた。目に品あり、道を行く人の親も、振返つて見るばかり。同一年紀頃の腕白どもも、東土產の錦繪は、汚さぬことと合點して、綺麗なものを損なはず、蟲が飛んでも楯になつて、皆が數夫を庇つたので。

兩親が惜むほど、堪へ難き思ひのなほ募るは、月ケ岡の長者夫婦。果は相生寺へ日通ひをして、隱居和尙に泣きしみづくと、後に荒物屋の亭主になつて、燒酎を賣らうといふ、頓生屋菩提兵衞とも云ッつべき變りもの。らつきようの樣な坊主首を賭けものにして、下腹へぐッと飲込み、卷り手に數珠をかけて、元氣は可いが御老體、よぼ〳〵と下山あり。

鳴澤の奥の間に、金銀鏤ばめたる伽藍のやうな佛壇を背負つて、聞說く昔天竺にと、故事やら、引事やら、方便の大嘘やら。會者定離の因緣を說いて、前世の約束とあきらめさせ、漸く兩親を納得させた。

これより前、數夫は物心を覺えてからも、月ケ岡で月の內の半ば以上を寢泊りして、藁の上より育てられた長者の家に馴れ睦み、我儘も餘計に謂つて、仔細を知らぬ人の目には、却つて月ケ

岡の兒のやうな、そればかりを、實の親は飽かず思ふ位であつたが、膝許に引寄せて、あらためて養子にする由言ひ含めると、然ばかり馴染んだやうに思はれたのも、唯遠慮のない、甘やかす、餘所の叔母さんに過ぎなかつたものと見え、固よりものの道理は分るし、大人しやかな幼兒とて、冠を振ることはしなかつたが、悄然とした心の裡、數夫は、兩親に棄てられたやうに思つたのであらう。

いよ〳〵月岡の姓を名乘ると、老夫婦のいつくしみは、一人兒の上に、なほ、强ひて移し植ゑた若木の橘、御領主の御祕藏を拜領なんどしたるやう、乳母が主人に事ふるばかり。

然るにても、人の子の、實の親の懷しさに、道のり一里とは隔たらず、花も同じ時、月も同じ時、軒端にかゝる片時雨も、棟を分たぬばかりだけれど、二日見ねば堪へられず、沼田の沼に釣すといひ、池子に小鳥を狩るといひ、椿が咲いたと、枝ながら、瓜が生つた、と蔓ながら、袂に添へ、手籠に提げて、鳴澤の家に音信るゝを、唯道すがらを案ずるのみ、蝮にさゝれな、漆にかぶれな、勿濡れそと思ふ露ばかりも、養家の夫婦に僻む氣はなかつたけれども、さあ、恁うなると實の母、男勝りの義理正しく、襷を取つて袖に抱かず、もつれ毛を拂つて頰ずりせず、使に來たのか、宜しくよと、果ては門から歸さるゝ。

幼馴染の柳に泣き、垣に取付き、松に縋り、しよんぼりと裏の藪に彳むことさへ度々あつた、

一時秋の日疾く暮れた、養家へ歸る田圃道、黍殼に月の射す中を、後へ三足、前に二足、我にもあらず辿つたが、餘りのことに世を果敢なみ、十三の幼心、今は恁うと思ひけん、途中から小川を渉り、樹立を拔け、池子の山路をとぼ〳〵と、萩薄、遠近の蟲の聲に誘はれて、やがて山深み梟の一ッ鳴いたる森の中、切立の岩の形、朦朧とあるを知邊に、小さき拳ほと〳〵と、美童相生寺の門を敲く。

火焔山

二十九

やがて大學孟子など、數夫は今もよく書く手習の草紙の師、件の隱居の膝に縋つて、其の媒妁を怨みながら、世に恩愛の悲しきこと、慈悲の情の辛きこと、苦痛、鬼神の責苦に過ぎたり。浮世を思ひ切りました、養家への義理も立つ、實の親の戀しさも些とは忘れられませう。新發意に遊ばしてお寺に置いて下さりましと、一心に伏拜むと、頓生屋の菩提兵衛、齒のない大口を開いて呵々と打笑ひ、馬鹿野郎、山へ入つて坊主になるより水あがきして河童になれ。重ねてそんな不料簡を出すと、十人百人に珍しい結構な身を棄てて、出家沙門にならうと申す、因果なものは

此の兒でございと、延命寺のお開帳に、見世ものに叩き出すと、天窓から大喝したが。

寺男をつけて養家へ返して、しかし世が世なら弟子にして、天下の名僧にしようものを、と寺を讓つた住職に語つて、默然として歎息し、かまへて人に洩らす可からず、可祕可祕、とあつて法衣の袖を搔合せた。

日ならず、またよぼ〳〵と下山あり、養家の父を實家に招いて膝組の內談、喃、それが可からう、可うござりませう。いかにもと事一決。

東京へ出すに極まると、恰も可し、養家の母の妹が緣着いた先方、今は亡き夫の弟、日本橋檜物町に指物屋を營み、職人ながら屹とした暮と、數夫を託する次第になつたのであつた。

村で尋常科を卒へるとともに、高等科は上京して、常盤とやらむ小學校、土地ッ兒も同じで、數夫は二十三の去年まで。

靜馬が抱へられた桔梗屋とは、隣町ながら、背中合せ、指物屋の水口と、踊子達が涼傘を疊む、お師匠さんの裏木戸とは、彼の狹い露地一つ。手拭を伸しても、緣の結ばるくらゐな中、悉は略之。

此間絕えず一月に二度、二月に三度など、養父母へ顏を見せに、歸るのが身の勤め、やがて志すことをなし遂げて、二人を東京に迎ふるまでも、田舍に住み果てようとは思はなかつた數

夫が、去年の夏から、突然都門を辭し去つて、長く相州の僻地に埋れ木にならうとしたのには、別に仔細のあつた事で。

こゝに數夫に兄がある。兄弟四人の總領で、名は正三郎。氣性數夫とはがらりと違ひ、幼い時より書を讀まず、字を習はず、博奕を好み、相撲に耽り、長ずるに從つて、海道筋に名の聞えた、沼田の正とて大兄哥。

然も豪家に生れたれば、鋭きながらも鷹揚で、金づかひ綺麗に氣位高く、酒とは寢ても、婦人を抱かず、强きを挫いて弱きを助くる、所謂江戸の俠客の概あり。

思へらく、一石の米幾粒ぞ、田地千石を耕して、我天下に何をかなすと。

卽ち林を伐つて柱となし、山を崩して庭となし、畠を賣つて塀を築き、田を棄てて屋を起し、蒸氣器械を鐵道で鷲掴みに引寄せて、二棟の製絲場、煙突高く天に冲して、池子の頂に黑雲を立てたるが、使ふものには言ふも更なり、繭を買ふにも、絲を賣るにも、我がためよかれとばかりはせず、其の俠氣が先に立てば、然せる社會に立交つて、損多く德少なく、家產稍傾きたる上、二年續けて二度の失火、人には微傷もなかりしのみ、繭も、絲も、工場も、次なる炎に母屋さへ、唯一掴の燼となんぬ。

這般！　火に負ければこそ燒けもすれ、おのれ一番正兄哥が、雲をも凌ぐ炎の山を、掌に握つて見せうと、此の思ひつきが突飛であつた。

嘗て、繭玉の買出しに、信濃のあたりを經めぐつて、小田原合羽に切草鞋、一文字の笠、脚絆がけ、血氣に路を貪つて、うら枯の頃なりし、燒野が原を通りし事あり。

名にし負ふ淺間の山、野末に黑き衾をかけて、迦俱土の神の閨、物凄まじくも寂として、煙も立たぬ夕まぐれ。

三十

燒石は左右に崩れ、燒灰深く凹んだ中を、唯見ると黃なる流があつたが、硫黃の匂芬々として、面を打つに心付いて、袂なる早附木を探り、試に點じて衝と落すと、水の中に消ゆるが如く、二度ばかり音がしたと思ふと、プス〳〵といふ響き。

いかさま燃ゆるでえす、と片頰笑して、平氣で一飛に躍越して、其まゝ行過ぎようとしたが、心得ず背がほてるに、振返つて見ると這は什麼。

早や五六町さきなる方に、ひら〳〵と炎立つたり、とかういふ間もあらばこそ、いきなり笠を取つて投げ、小田原合羽をかなぐり脫いで、暴風に芭蕉の揉まるゝばかり、十里渺々として一草一木なき、燒野ケ原の只中に、身を飜して働いたが、一打煽消すごとに一間さきへ燃え上つて、

ちよろ〳〵と這ひ進むに、茫然として立つて見れば、目も遙に、薄く紫の煙湧き出でて、藍よりも蒼き炎、暮れ行く空の雲深く、淺間を包んで舞ひ下り、野中に颯と擴がる中へ、果しもあらず燃え込んだ、あまりの物の凄じさに、正三郎は空恐しく、我を忘れて、ヒヨイと飛ぶと、踵をめぐらし、里ある方へ一目散。

此處もハヤ火の粉の中かと、膽を冷したが、宿は事なく、小雨が寂しく降つて居た。お泊りなさいまし、おつかれ樣で、と出女に袖を引かれながら、正三郎、淺間の方を振返つて、氣拔けのしたやうに彳む處へ、旅の者三五人、打連れてどや〳〵と、酷い火だ、大變だ、三途の川より恐しいと、口々に行過ぐる。

ともかくも旅籠を取つたが、好な酒も咽喉へ通らず、姐や飯にする、と箸を取つた、平の蓋も開けたまゝで膳を突出し、ごろりと横になると、次の室へ今着いたのが、立ちながら野火の風說。村方に損じもあらば、名乘つて出ようと疲れて寢た。其の火、なにがしの里の人口で、村の者が總出で留めて、幸ひ一本の松をも害せず、但、野の斜めに燃ゆること、一晝夜、約三里。

人に損はかけねえから、其のまゝで默つたが、恐らくは天の罰か、一體それから思ひついて、硫黃の採掘にかゝつたのが、間違であつたも知れず、北海道で引請けたのが、死山でまるで○。工場は二度の火災なり、のツても反つても最う叶はぬ、御兩親もお年紀の上、今度ばかりは愚

癡をおつしやる、男でなくば死ぬものを、腹を切つても腑甲斐はない。資本さへ都合が出來ると、最う一度穿つて見る、活山一ツ別なるは、己が身を憐んで、然る工學士の先生が見込みをつけて下さつた、自分も手心覺えたり、間違ひは無えが、金子だてな。

外に工面のつけやうなし、月ケ岡へも今までに汝にかくして度々の借用、己の口から最う云はれぬ、弟、一生のお願だ、き樣から賴んでくれと、指物屋の二階にたづねて、面瘦のした正三郎が數夫の優しい手を取つて、押頂いて言つたので。

一議に及ばず、歸つて月ケ岡へ由を語ると、顏を見て嬉しげに、何うしてやつても他人あつかひ、袷一枚ねだらぬを、怨めしいと思つたに、よく金子を貸せと言つてくれたと、涙を流して喜んだが、しかしそれがために田地を賣つた、奉公人にも暇を出して、老夫婦が世を侘しい、さしむかひの住居となる。

然までとは思はなかつた數夫はこれに驚いて、死もなほ足らずと詫び入ると、いや粥を啜つても大事ないが、願がある、聞いてくれ。朝夕お前の顏を見て、せめて半年居て死たいと、膝と背に取縋られ、我を忘れて泣き伏したが、直ちに下宿を引拂つて、月ケ岡へ歸つたので、夫婦の喜び一方ならず、舊家は人に貸し、東京風の別莊づくり、三間ばかりな新家を建てて、やがて親子が引移つた。寥しく嬉しく懷しく、秋春をこゝに暮らして、數夫は月も見ず、花も見ず、唯都の

空を見る時は、池子の山の蜀魂、血を吐く思ひはおんなじで、靜馬のお靜があるにもあられず、枕についたが、抱へ主の情に因つて、一所に成つたのであるものを。

神童

三十一

「否、それはよく分つて居る、鐵拐な口も利くけれど、優しいのは知つて居るんです。先刻も濱から歸りがけに、松蟲の音を聞いて、お前が暫時聞惚れて居て、眞個に優しい聲だ、意地はなくツても婦人は大事ないと云つたつけ。何、私は、お前が蟲の聲より優しいのを知つてるよ。

またそれを知らないで、いつもいふ通りあの大切な年寄つた二方を、預けて行くことが出來るものか。最う阿父さんや阿母さんは、私にも見かへるほど、お前が氣に入つたやうすだし、串戲でも口へまで出してお云ひだから、お前さへ、優しく留守をしてくれれば、遁れられない義理はあるが、構はずしばらく居なくつても可からうと思ふから、打明けて賴むんだがね。

恁ういふと、大層奮發氣があつて、立派な男のやうに聞えるけれど、それも、皆お前のお庇さ。何うしてこれが、前であつて御覽なさい。よしんばお前に働きがない、些と稼ぎにでも出かけ

なさいと、突出されても意氣地やない、ぼんやり坐つて居る情ない人なんです。

殊にお前が深切に、こんな者でも見棄てないで、一所になつてくれたから、親達の義理ばかりで、引込んで居る時のやうな、唯寂しい氣ぢやない。お前も身體が强くはなし、いつまでも田舍に暮さうといふものだから、金輪際、世の中に出ようなどと、氣は揉むまい。出家でもしたつもりで、果敢ないながら、心易く、此の月ケ岡で暮さうと、一旦心を極めたんだ。

そりや私だつて何だから、隨分、願も望みもあつた、大なことは望めないでも、せめて此の村から數といふものが出たと、人にも知らせたし、自分の名は出さないでも、村の名、親の名を知らせたい位なことは忘れないで居たんだが、一年なり、半年なり、此の烈しい世の中で、學校にはおくれるし、友達には忘れられる、あとの者には追ひ越されるといふ譯だから、氣も滅入つて、もう何うなるものかと思つた處。

丁どお前が尋ねてくれて、あの地藏樣の前であつた日さ。

相生寺の山門の邊を、ぼんやり歩行いて歸つて來ると、路傍の崖に木槿とね、それから早咲の萩が咲いて居て、餘り綺麗だから、一枝折つて、それから歸りがけに、兩側が藪で、それに槻の大木が岸におッ冠さつて、薄暗い中を、沼田の沼から流れて來る、小川が通つて、丸木橋が懸つて居る處があるがね。

流の些と深い處へ盥を浮かして、竹で漕いで遊んで居た、九ツばかりの色の白い、くりッと肥つた、腕白さうなのが丸裸さ。

田舍ぢや珍しくもないことだから、それに心は留めなかつたけれど、あゝ、此の橋を渡つて、月夜にお山へ行つて、坊さんにならうと思つたこともあつたつけ、と流の源もなつかしいし、石を拂つて腰をかけてさ、手帳があつたから、描くともなしに其處の景色を鉛筆のさきで引いて居ると、盥に乘つて居た腕白が、ざぶ〳〵と泳いで來て、ひよいとお前、橋へ上ると傍へ來て、恁う、膝に手を構へて及腰になつて覗くんです。

人肌がするほど傍へは來ず、ものも云はないで、目を圓くして瞪めて居たが、やがてもう止さうとすると、（をぢさん上手え喃。）ッてお前、其の繪をくれろと言ふんだ。

小兒にだつてやれるんぢやない。其よりも之を上げようかと、萩の花を見せるとね、何、そんなものはいくらでも家に咲いてると、然ういふから、何處だと聞くと驚いた、道で折つたのが其の小兒の内のだつたが。あゝ、然うか、惡いことをした、堪忍しなッてあやまると、其ンばかり構やしない。内には澤山花が咲く、大な椿があつたけれど其は暴風雨に吹折られた、まだ、牡丹櫻の綺麗な樹がある、それが濟むと霧島つゝじといふのが咲くし。菖蒲もある、桔梗もある、最う些と經つと菊が咲く、それからお腹の痛む時お粥に入れて煮て食べると、直に治る花もあると、

話しながら、又、ぱちや〳〵と水を分けて、盥へ入ると、背むきになつたがね。」

三十二

「靜さん、お前がこれだけ聞いても、そこいらを鶩のやうな聲を出して、ぎやあ〳〵駈け廻つて る近所の百姓の小兒とは、宛然腹が違つた怜悧なものだと思ふだらう。

力味があつて、可愛くッて、人見知をしないで、ぞんざいでない、そしてね、其の目の品の可さつたら、氣の所爲か、口を利くのに訛も少なくッて、聲さへが清しい。私は神童、何、人間並すぐれた佳い兒だと思つたよ。

左樣ならと、分れて歸る路々、氣恥しいやうでもあり、懷しいやうでもあり、賴母しいやうにも思つて、先づ此の月ケ岡も彼の兒のために、世間に聞えるやうにならう、後には天下の指折のものになるやうに考へられた。

自分は自分で見限つたし、其處へお前が來てくれたものだから、最う〳〵望はなくなッたが、餘り生れて來た效がない、待て〳〵、あの小兒のために、後の榮を祈つてやらう。

相生寺の先のお上人は、私が小兒の折には、何んなにか行末を賴母しがつて下すつたか、それは私が及ばなかつた、何うぞ出世をしますやう、あの兒が名を天下に上げて、私が望んだ志、月

ケ岡といふ村の名の、津々浦々にまで聞えますやう、他に身替のない田舎、我が身にかへても念じ上げる。私はいつまでも此處で氣樂に世を送つて、ならば其の兒に讀書の世話でもしようと、……

今考へりや恥かしいが、此の御堂の觀世音は、私が生れると襁褓の内から御恩になつた佛だから、一心になつて、斯うやつて、お前が寢るとは起きて出て、三晩ばかりかゝつてこしらへた、爰にあるのが、其の、心を籠めた誓文です。」

數夫は右手に一折の、短册形の起誓文を、もの靜に持つて居た。

「そして人に知れないやうに、あの先刻出して來た、額のうしろへ納めたんです。御覽、心變の何のッて云ふけれど、これにも私の名とならべて、お前も連判狀の一人だよ、」とさら〳〵と解いて兩手を添へ、片端を斜めに落して、お靜の固く引緊めた膝へかけて、仄な明を差向けると、婦人は瞳を動かしたるのみ。

清らな頸も、耳許も、髪の亂に暈りを帶びて、岩井靜馬が俤は更なり、打見には三十路ばかりと、人もいふほど世帶染みた、病後の窶れ今の間に、又傷ましきまで、頰もこけて、風が染むか、肩もさみしく、力なげに左手で壓へた、胸のあたりの膨らかなるも、石女のあはれが見える。

つい今しがたまで、思ふ男と、二人づれの嬉しさに、野路の雨もものならず、氣も冴え、聲も

高く、珍しさに重きも忘れて、丸く肥えた鰹を下げて、口三味線でさゞめいたとは、生れかはつたやうである。

引添ふ數夫も物寂しく、丘の薄ももの淋しく、大空の星の光も淋しい。たゞ御堂の緣の、朽ちた欄干に引かけた提灯の明が射す、むら薄の葉に包まれ、莖にかゝつて轉がつた、一尾の魚のみ、露に活きて、草の葉よりも蒼く、二人の顏の色よりも白い。

これより前、此の御堂にのぼる時、彼の材木小屋を出でて椿あり、ついて小流に沿うて行けば、觀世音おはします、其處へ行つて雨宿を、と數夫は心有つて拵へたのであるけれども、お靜は唯興に乘じて、新家の近いのも小降になつたのも怪まず、まるで道行だね、意氣で可いと、一つは蟹に恐れたれば、佛の御名も賴母しく、浮か〳〵と坂を攀ぢて、威勢よく伏拜み、御免下さいましなどと薩陀に挨拶をする浮かれ加減。雨は其折から上つたのであつたが、大空に雲の名殘の無きさへ、お靜は疾より夢心地。

たとへ鰹を提げて、二人づれ、同一お靜と數夫とが、手を引き合つて丘の下を口三味線で通る姿を、別にあり〳〵と此處から見ても、驚きも怪みもしないであらう。

其の時數夫は身を開いて、其處ともなく星の色を仰ぎながら、

「最う此の誓文を上げてからは、日も月も年も長くつてくれろとばかりで、他に何にも思はなか

つたが、いつかお前と、矢張り此處へあそびに來た時だつた。」

三十三

「ねえ、桔梗だの女郎花、薄だの、藤袴はいゝけれど、水引の花まで、珍しさうに抱へ切れないほど兩手で抱いて、崖を下りる時辷つて、蛇が恐いといふから、私が先へ立つて持つて居た桑の枝を折つたのに捉まりながら、鬼薊の葉を見つけて取らうといふから、咲いて居ないのにお止しと云つたら、(あの、お父さんもお優しいし、お母さんもお優しい、あなたも優しいし、私も優しい、御覽なさい、桔梗が優しいのに、女郎花が優しいでせう、薄も然うなら藤袴も優しい花、恁う又優しいものばかりぢや、何だか心細いやうな氣がするから、鬼薊を交ぜませう。)とお前が然う云つた時から、最う、私は少し考へついて居たんだけれど、意氣地はないが、どちらとも心が決まらないで居たんだから、何も今日思ひ立つた譯でもないが、先刻の蟹の時、何うしても奮發せずにや居ないと極めた。

なるほど氣がつけば段々に張も無くなりや、意地も無くなる、何うやら聲まで低くなつて、お互に是ぢや何の事はない、人間のおも湯のやうな、しつこしのないものが出來ッ了ふ。

だから靜さん、よく思つて御覽、何も悲しいことも、情ないこともないんです、思ふやうにな

りさへすりや――またしないで置かうか。それだもの、祝つてくれたつて可いわけだ、唯賴みたいのはお二方で、今夜彼處に在らつしやる、」と少し伸上つて池子の方。

お靜も夢見るやうな顏を上げた。

丘の下で、

「朝に咲き、夕にしをるゝ朝顏さへも、あら、どッこいさのサ、どッこいさ、」

と幽に聞えて、通るものがあるので、數夫は衝と身を以つて提灯の灯を祕した。

「數夫さん。」

「何。」

「そして何時行きます。」

「直ぐ。」

「え！」

「何も今ッからと言ふわけぢやないが、實は反故にする氣で居たけれど、恁うなれば大切な私を贔屓にして呉れる人の手紙が來て居る、其人と一所に行つて、志を立てるには、最う然う悠々とはして居られぬ。思ひ立つたが吉日だから、明日にも出かけようよ。考へて見りや氣恥かしい……此の誓文は何のこッた、第一佛樣にだつて申譯がないんです、」と、笑さへ浮べた其の顏、眠の